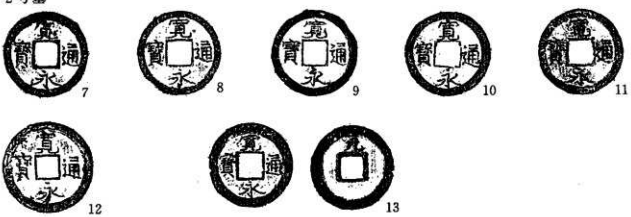
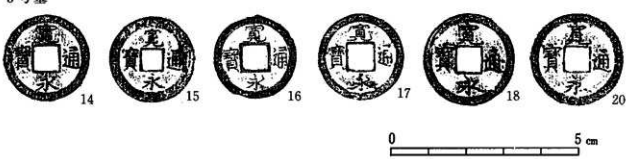
1号墓

2号墓



3号墓



第148図　近世墓出土銭貨拓影

第５節　砂原遺跡（長野県）出土の江戸時代人骨

京都大学霊長類研究所
茂　原　信　生

１　はじめに

砂原遺跡は長野県北佐久郡浅科村大字塩名田にある遺跡で、1994年に北陸新幹線の工事に伴って㈶長野県埋蔵文化財センターによって発掘・調査された。この遺跡は縄文時代から近世にかけての遺跡であり、人骨は出土遺物から判断して近世（江戸時代）のものと考えられている。

人骨の計測はマルチンの方法（馬場）にしたがい、歯の計測は藤田（1947）にしたがった。

２　出土状況

遺跡は砂地であり、人骨の年代も新しいため保存状態は比較的よい。出土した場所は近世の墓地であったと考えられている。

３　出土人骨の特徴

１号人骨（１号墓）

発掘された人骨の中では保存は悪い方である。頭蓋骨と四肢骨がおもである。下肢は膝を左右に開いており、そのあいだに左右の上肢を置いている。座位で出土している。

頭蓋骨

頭蓋骨は頭蓋冠の一部が破損して消失しているほかは、残りはよい。眉弓は発達しておらず、前頭骨の額はほぼ垂直である。前頭結節が目立つ。鼻根部は平坦であり顔は平坦な印象であったと思われる。後頭部は全体がやや突出しており、外後頭隆起はプロカのⅢ型程度である。乳様突起は小さく、内外的にも薄い。歯槽性の突顎である。縫合は前頭縫合、矢状縫合、人字縫合の外板・内板ともに鋸歯状の縫合が明瞭であるので比較的若い個体であろう。

下顎骨は、ほぼ完全であるが下顎頭が破損している。オトガイ隆起は普通である。外側隆起はやや発達しているが、顎舌骨筋線は鈍である。

歯

第３大臼歯まで萌出している。下顎の左第３大臼歯は萌出していない。先天的な欠損かどうかは不明である。生前に失われた歯はない。咬耗は少なく、象牙質の露出しているのは下顎の犬歯と第１大臼歯だけである。第３大臼歯に咬耗はほとんどない。下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第１大臼歯が＋5型、第２大臼歯がＸ５型、第３大臼歯が＋4型である。

下顎の犬歯歯冠中央付近に線状のエナメル質減形成が見られる。これは5 歳前後に形成されたものであろう。隣接面にう蝕はないが、下顎の左第１大臼歯の咬合面と下顎の左右の第２大臼歯の頬側面にう蝕が見られる。頭蓋骨から判断すると、この個体は女性と思われる。

体幹骨

頚椎と胸椎の一部が残っているが、椎体にに加齢変化の骨棘などは見られない。

四肢骨

骨端まで残っているものは数少ない。

上肢骨

上腕骨は細い。結節稜は比較的発達しているが三角筋粗面は発達していない。橈骨・尺骨の骨間縁は鋭いが細い。

下肢骨

寛骨の大坐骨切痕は直角に近く女性的である。耳状面はやや高くなっているが、いわゆる妊娠痕である耳状面傍溝とみられる溝は耳状面の下部に鈍な溝として認められる。腸骨稜の骨端はまだ癒合を完了していない。大腿骨の上部は扁平で、外側に殿筋隆起が張り出している。後面の粗線はさほど発達していない。扁平示数は63.7で超扁平大腿骨に属している。脛骨は後面の鉛直線が中央付近まで達しているが発達は悪く、したがって断面はヘリチカのⅠ型に近い。腓骨は扁平ではない。距骨には蹲距面が見られ、内側蹲距面が前方にのび出す森本（1981）のC型である。

藤井の式（1960）を用いて計算された推定身長は、上腕骨では141.9 ㎝、大腿骨では139.9 ㎝、脛骨では138.5 ㎝であり、これらの平均値は140.1 ㎝である。この値は平本（1977）の報告している江戸時代人女性の平均値（前期143.03㎝、後期144.77㎝）よりもかなり小さい。

この個体は女性と考えられる。年齢は歯の萌出状況と咬耗、ならびに頭蓋骨の縫合、腸骨の癒合の状態から20歳代の青年程度と思われる。

2号人骨（2号墓）

座位で埋葬されていたものである。骨の保存状態はよい。

頭蓋骨

前頭骨の額は比較的たっている。鼻根部は平坦である。眉弓はやや発達している。後頭部は全体がやや後方に張り出しており、プロカのⅢ型程度である。乳様突起は比較的大きいが内外的には厚くない。耳道上稜は明瞭でないがその一部を構成する前上乳突結節は非常に発達して鋭い縁を形成している。縫合では冠状縫合の側頭部外板の縫合が蓋合で消失しているが、ほかの部位では消失していない。頭蓋最大長は175mm 、最大幅は140mm で、頭蓋長幅示数は80.0となり中頭に近い短頭に属している。顔高は大きく、コルマンの顔示数は105.0 と比較資料の中ではもっとも長い顔である。

下顎骨は比較的頑丈で、筋突起は発達し筋稜も発達しており内外的にも厚い。下顎各部はやや外側に張り出している。角前切痕はごく軽度である。左右の外側結節は発達して小さな出っ張りを形成している。

歯

上顎では、左右の中切歯（第１切歯）、右の犬歯、左の第１小臼歯・第１大臼歯、ならびに左右の第３大臼歯の計７本が生前に失われており、下顎では左右の中切歯と右の側切歯（第２切歯）、犬歯の４本が生前に失われている。全体に歯槽の退縮が著しい。特に上顎の左第１大臼歯の歯槽は膿胞状に大きく退縮している。歯槽膿漏が進んでいたであろう。咬耗はさほど進んでいない。切歯と第１大臼歯に象牙質の露出が認められるがそれ以外には見られない。さほどの高齢ではない。

下顎大臼歯の咬頭と溝の型は第１大臼歯が不明で、第２大臼歯が＋4型、第３大臼歯がX４型である。

齲歯はないが、上顎大臼歯部に歯石の沈着がみられる。下顎の左右の第１小臼歯の歯冠中央付近に線状のエナメル質減形成が見られる。この減形成は５歳前後に形成されたものであろう。

体幹骨・四肢骨

体幹骨では主に頚椎と胸椎が残っている。下位胸椎の椎体の上下に加齢変化を示すリッピングがわずかにみられる。さほど若い個体ではないことを示している。四肢骨の残りはよい。

上肢骨

左肩甲骨の関節面は辺縁が明瞭である。上腕骨の太さはふつうで、三角筋粗面の発達は比較的よい。橈骨、尺骨はふつうであるが近位や遠位の関節面には加齢変化がみられる。寛骨の大坐骨切痕は90度に近い。また、耳状面はほかの部位より高くなっている。妊娠の痕跡を示すとされている耳状面前溝が大きくえぐれており、寛骨の特徴は女性であることを示している。

下肢骨

大腿骨の太さはふつうで、後面の粗線はわずかに稜状になっている程度であまり発達していない。殿筋隆起はやや張り出しており大腿骨の上部は扁平である。扁平示数は73.2であり、超扁平大腿骨に属している。脛骨の後面の鉛直線はほとんど認められず、したがって中央付近の断面は三角形でヘリチカのＩ型に近い。脛骨は扁平ではない。距骨には蹲踞面、ならびに脛結節が認められる。内側蹲踞面が前方に伸び出している森本（1981）のＣ型である。

藤井（1960）の式を用いた推定身長は上腕骨で150.5 ㎝、橈骨で150.8 ㎝、尺骨で152.7 ㎝、大腿骨で146.3 ㎝、脛骨で149.3 ㎝、腓骨で150.5 ㎝であり、これらの平均値は150.0 ㎝である。この値は平本（1977）の示す江戸時代人女性の平均値（前期143.03㎝、後期144.77㎝）よりもかなり大きく、男性の平均値（前期155.09㎝、後期156.49㎝）よりはかなり小さい。

この個体は、頭蓋骨の形態や筋が比較的発達していることでは男性的であるが、寛骨は女性と考えられる諸特徴を示しているので、女性であろう。女性としては比較的筋の発達はよい。年齢は壮年から熟年程度である。

３号人骨（３号墓）

座位であろう。骨の保存状態は非常によい。顔面を下に向けている。

頭蓋骨

ほぼ完全な頭蓋骨である。前頭部はわずかに傾斜している。鼻根部はほかの個体に比べるとくぼみが目立つ。眉弓は発達していない。外後頭隆起はほとんど目立たずブロカのＩ型である。乳様突起は普通であるが内外的に厚みがある。前上乳突結節はやや発達している。

頭蓋の縫合は冠状縫合の外側部や矢状縫合の前方部分の外板に癒合が観察される。さほど若い個体ではなかろう。頭蓋長幅示数は84.0であり、短頭である。

下顎骨は頑丈であるが、オトガイ隆起はさほど発達していない。筋突起は内外的に厚いが小さい。また、これに続く外側隆起はよく発達している。角前切痕はなだらかに大きい。

歯

上顎歯では左の側切歯と左右の第３大臼歯の計３本が生前に脱落していたと思われる。また、歯槽はどこも退縮しており、特に犬歯や大臼歯部での歯槽は浅く広くなっており歯根の一部しか植立できなかったと思われるほど退縮が著しい。歯槽膿漏と思われる。下顎歯では、左右の切歯、右の第２小臼歯、左の第１小臼歯と第１・第３大臼歯の計８本が生前に脱落している。前歯部の歯槽の退縮が著しく、右の大臼歯部の歯槽の退縮も著しい。

咬耗はさほど進んではいないが、どの歯も象牙質の露出が見られる。下顎の大臼歯の咬頭と溝の型は第１大臼歯が＋型（咬頭数は不明）、第２大臼歯がＸ４型である。大臼歯部に歯石が沈着していたようであるがほとんどが脱落している。残存歯にエナメル質減形成はない。

体幹骨

椎骨の残りは比較的よい。椎体の上下の辺縁には加齢変化の骨棘が見られない。第２頸椎の歯突起を受ける歯突起窩の関節面の辺縁に骨棘が見られる。

体幹・四肢骨

体幹骨は腰椎が残っている。椎体の上下に加齢変化であるリッピングが認められる。

上肢骨

肩甲骨の関節面は楕円形ではなく、辺縁の骨稜は右の方が鈍でより張り出している。右利きであったと思われる。上腕骨は普通の太さであるが、三角筋粗面は比較的発達している。骨頭の辺縁に骨稜が形成されている。また、橈骨神経溝はよく発達しており、特に右で顕著である。橈骨の骨間縁は鈍である。

下肢骨

寛骨の大坐骨切痕は直角に近い。耳状面はほかの部位よりも高くなっている。耳状面傍溝のうち前溝は大きくえぐれており、この個体が妊娠経験をもつことを示している。大腿骨の太さは普通である。後面の粗線は中央付近でやや張り出しているがさほど発達していない。上部外側の殿筋隆起はやや張り出している。扁平示数は76.4で扁平大腿骨に属している。脛骨は後面の鉛直線がほとんど認められなず、断面はヘリチカのV型である。脛骨は扁平ではない。腓骨は細く直線的である。距骨は左右ともに内側踝距面が前方に伸展した森本（1981）のC型である。

藤井の式を用いて推定された身長は上腕骨で150.0 ㎝、橈骨で146.3 ㎝、尺骨で147.2 ㎝、大腿骨で148.5 ㎝、脛骨で147.9 ㎝、腓骨で148.4 ㎝であり、これらの平均値は148.1 ㎝である。この値は平本（1977）の示す江戸時代人女性の平均値（前期143.03㎝、後期144.77㎝）よりもやや大きいが、男性の平均値（前期155.09㎝、後期156.49㎝）よりはかなり小さい。

この個体は、頭蓋骨の形態や四肢骨の形態・大きさなどから考えて女性と考えられる。年齢は熟年と考えられるが、その中でもまだ若い方に属するであろう。

４号人骨（４号墓）

座位で埋葬されていたものであろう。頭蓋骨は前方に落ちており顔面は下を向いている。左右の上肢は肘を直角に曲げて手を骨盤部に置いている。下肢は膝を強く曲げている。骨の保存状態は非常によい。

頭蓋骨

鼻根部はくぼんでおらず平坦である。眉弓はやや発達して盛り上がっている。額はやや後方へ傾斜している。後頭部は全体的に後方に張り出しており、外後頭隆起はブロカのⅢ型程度である。乳様突起はやや大きめで内外的にも厚いが右の方が大きい。前上乳突結節はさほど発達していない。縫合は明瞭な鋸歯状は失われる部分があるものの外板は癒合していない。頭蓋長幅示数は75.8で中頭である。コルマンの顔示数は比較的大きい。

下顎骨は頑丈で、筋突起は大きく内突起稜も発達している。オトガイ隆起は普通で、オトガイ結節も目立たない。角前切痕はほとんどない状態である。

歯

上顎歯は左右の第３大臼歯がない。下顎の第３大臼歯の状態を参考にすると生前に脱落した可能性がある。右の第１大臼歯の歯槽壁は膿胞によると思われる原因で失われている。左の第２大臼歯の歯槽もやや退縮しているがほかは健全な歯槽である。下顎歯は全歯が残っているが第３大臼歯の歯槽は浅く、第２大臼歯の歯槽はかなり退縮している。エナメル質減形成やう蝕は見られない。

咬耗は少なく、象牙質の露出しているのは下顎の切歯だけである。

体幹骨

椎骨に加齢変化は認められない。胸骨柄にある左の鎖骨との関節面はなめらかではなく途中で折れ曲がったような形態である。ただし、左鎖骨の胸骨端の形態は普通である。胸骨柄の内面はあれており、海面質が露出したような形態である。

体幹骨・四肢骨

体幹骨では腰椎がよく残っている。椎体には加齢変化はみられない。さほど高齢ではない。

上肢骨

上腕骨は比較的太く頑丈である。三角筋粗面はよく発達している。橈骨・尺骨は頑丈で骨間縁もよく発達している。

下肢骨

寛骨の大坐骨切痕は鋭角である。耳状面はほかの部位よりやや高いが、関節面傍溝は溝状のものはみられないが耳状面の下端付近に左右とも陥凹がある。恥骨結合の左右後面に妊娠痕状の荒れが観察される。大腿骨は太く頑丈である。後面の粗線は幅を持った稜状である。上部外側の殿筋隆起はやや発達している。扁平示数は74.1で超扁平大腿骨に属している。脛骨後面の鉛直線の発達はよくないので、中央付近の断面はヘリチカのＩ型に丸みを持たせたような三角形である。腓骨も太い。距骨の内側蹲距面は前方に伸展した森本（1981）のＣ型である。

藤井の式（1960）を用いて計算された推定身長は、上腕骨で156.1 ㎝、橈骨で157.6 ㎝、尺骨で156.4 ㎝、大腿骨で157.7 ㎝、脛骨で155.8 ㎝、腓骨で154.9 ㎝で、これらの平均値は156.4 ㎝である。この値は平本（1977）の報告している江戸時代人男性の平均推定身長（前期155.09㎝、後期156.49㎝）とほぼ同じである。

この個体は、寛骨の形態から女性の可能性もないわけではないが、決定的と言えるほどの形状ではない。四肢骨は大きく、頑丈であり、頭蓋骨の形態も男性的である。男性の可能性の方が高いと考えられる。年齢は青年（20歳代）程度であろう。

５号人骨（５号墓）

頭蓋骨片と四肢骨が残っている。四肢骨の保存状態は一部を除いてよくない。

頭蓋骨

左右の側頭骨錐体部と頭蓋冠のごく一部が残っている。細かな形態は不明である。

体幹骨・四肢骨

体幹骨は胸椎・腰椎、肋骨などが残っている。腰椎の椎体には加齢変化はみられない。

上肢骨

肩甲骨の一部、上腕骨の遠位部、橈骨の近位部などが出土している。上腕骨の太さはふつうである。橈骨の骨間縁はよく発達している。

下肢骨

寛骨の大坐骨切痕は鋭角である。耳状面はほかの部位よりも高い。耳状面傍溝は鈍な溝が耳状面の下縁に沿って走っている。大腿骨の骨幹が残っている。後面の粗線はあまり発達していない。詳細は不明である。距骨には蹲踞面が認められ、内側蹲踞面が前方に進展した森本（1981）のＣ型である。

この個体は、部分的にしか残っておらず、性別、年齢ともに不明であるが、成人には達していたと思われる。寛骨の形態はどちらかといえば女性的である。

4　砂原遺跡人骨の特徴

頭の形状は、現代人的な短頭が2例であり、残る1例は中頭である。例数は少ないので集団としての特徴とはいえないだろうが、同じ江戸時代人の江戸の無縁坂人や熊本の桑島人、あるいは福島の本飯豊、あるいは鍛冶久保人の平均値はいずれも中頭であるのに対してやや異なった傾向を示していると言えよう。また、江戸庶民など顔の短い江戸時代人と比して顔の長い個体もみられる。

歯の咬耗は比較的少ないが、歯槽が退縮している個体が多く、歯石の沈着もあるので歯槽膿漏の可能性が高い。齲歯は少ない。エナメル質減形成は観察されるが、頻度は山本（1988）の報告している江戸時代人の頻度よりも少ないといえるだろう。生活環境の悪かった江戸庶民と比べてそれよりもストレス（病気などを含む）の少ない環境であった可能性もあるが、例数が少なく断定は難しい。例えば、ストレスのかかった個体が早く死亡してしまったとか、の可能性もあるからである。今後の資料の蓄積が待たれる。

推定身長は男性が江戸時代人の平均値程度であり、女性は1号墓の個体は小さいが、他は同時代の平均値よりやや大きめである。

頭蓋骨は比較的男性的であるが寛骨は女性の特徴を示すような個体がみられる。この集団の女性は女性としては筋の発達が比較的よい個体が多い。労働などの結果であろうと思われる。大腿骨はいずれの個体も扁平であるが、これに対して脛骨は扁平ではない。身長はいずれも低い。

外傷として残る骨折や梅毒などの病気の痕跡を示す個体はない。

5　まとめ

砂原遺跡から出土したのは男性1例、女性4例の合計5例の人骨である。高齢の個体が多い。骨の保存状態は埋葬されていた場所が砂地であったため良好である。

この人骨を観察する機会を与えていただいた㈶長野県埋蔵文化財センターの方々、とくに白田武正氏、青沼博之氏に厚く感謝いたします。

引用参考文献

馬場悠男　1991「人骨計測法」『人類学講座』別巻1「人体計測法」　江藤盛治編集，雄山閣
蛯名忠次郎　1951「日本人前腕骨の人類学的研究　其一　橈骨」『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集』5
蛯名忠次郎　1951「日本人前腕骨の人類学的研究　其二　橈骨」『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集』5
藤田恒太郎　1949「歯の計測規準について」『人類学雑誌』61
藤井　明　1960「四肢長骨の長さと身長との関係に就いて」『順天堂体育学部紀要』3
福田　佐　1961「関東地方人腓骨の人類学的研究（計測編）」『東京慈恵会医科大学雑誌』76
權田和良　1959「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』43(1)
平本嘉助　1977「日本人身長の時代的変化」『自然科学と博物館』44(4)
加藤守男・原田遼二　1969「関東地方人膝蓋骨の人類学的研究」『東京慈恵会医科大学雑誌』
森田　茂　1950「関東地方人頭蓋骨の人類学的研究」『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集』3
森田茂・河越逸行　1960「湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究補遺」『人類学雑誌』67(5)

西原四良　1953「関東地方人上腕骨の人類学的研究」『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集』9
大場信次　1950「関東地方人大腿骨の人類学的研究（計測編）『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集』3
茂原信生　1993「福島県鍛冶久保遺跡出土の江戸時代人骨」『東北横断自動車道遺跡調査報告23付編6』
　　㈶福島県文化センター
鈴木信夫　1961「関東地方人頭骨の人類学的研究（計測編）」『東京慈恵会医科大学雑誌』75
高野元昭　1958「関東地方人鎖骨の人類学的研究」『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集』18
高野元昭　1958「関東地方人肩甲骨の人類学的研究」『東京慈恵会医科大学解剖学教室業績集』18
脇　達也　1970「熊本県牛深市桑島出土の江戸時代人頭骨の人類学的研究」『熊本医学会誌』44

第20表：砂原遺跡出土人骨の概要

墓坑番号	性別	年齢	特記事項
1号墓	女性	青年（20歳代）	エナメル質減形成、齲歯、推定身長140.1cm
2号墓	女性	壮年～熟年	エナメル質減形成、歯槽膿漏、中頭、推定身長150.0cm
3号墓	女性	熟年	歯槽膿漏、148.1cm
4号墓	男性	青年（20歳代）	歯根膿瘍、156.4cm
5号墓	女性？	不明（成人）	部分的出土

第21表：砂原遺跡出土の頭蓋骨の計測値（単位mm）と比較資料。（単位はmm）

			江戸時代												現代	
			砂原遺跡（長野県）				本郷霞（福島）茂原（1994）		鍛冶久保（福島）茂原（1994）		桑島（熊本）鵜（1970）		無縁坂（東京）森田・河越（1960）		関東地方人森田（1950）	
Martin	計測項目	計測点	2号墓女性	3号墓女性	4号墓男性	女性平均値	男性平均値	女性平均値	男性平均値	女性平均値	男性平均値	女性平均値	男性平均値	女性平均値	男性平均値	女性平均値
1	頭蓋最大長	g-op	175	175	190	175.0	128.1	176.5	185.0	176.0	180.13	172.60	183.5	173.2	178.9	170.80
3	グラベロラムダ長	g-l	171	171	185	171.0	173.0	173.5	180.3	170.0	173.86	169.72	178.0	168.7	174.8	166.30
5	頭骨底長	n-ba	96	93	100	94.5	105.3		104.0	98.0	103.90	98.43	102.6	97.8	100.7	95.60
8	頭蓋最大幅	eu-eu	140	147	144	143.5	139.4	133.0	138.7	129.0	131.02	128.50	141.1	136.8	140.3	135.90
	長幅示数（8/1）	(8/1)	80.0	84.0	75.8	82.0	76.5	74.9	75.4	73.3	72.74	74.42	77.0	79.0	78.5	79.70
9	最小前頭幅	ft-ft	88	95	99	91.5	93.9	97.5	100.7	94.0	93.47	91.87	94.9	91.5	93.2	91.00
10	最大前頭幅	co-co	－	114	125		115.4	112.0	118.5	120.0	102.90	102.45	117.0	112.3	115.9	111.60
	横前頭示数（9/10）	(9/10)	－	83.3	79.2		81.8	92.2	86.1	83.3	90.91	89.67	81.3	81.1	80.5	81.50
11	両耳幅	au-au	125	129	129	127.0	126.7	114.7	130.3	119.3	121.47	118.35	126.6	119.8	124.9	118.80
12	最大後頭幅	ast-ast	105	116	114	110.5	113.4	109.4	108.0	109.3	109.31	105.72	109.5	104.5	108.4	104.20
17	バジオンブレグマ高	ba-b	137	128	135	132.5	136.7		138.0		135.88	132.02	138.5	134.1	138.1	132.50
	長高示数（17/1）	(17/1)	78.3	73.1	71.1	75.7	75.7		75.6		75.48	76.48	75.6	77.5	77.3	77.70
	幅高示数（17/8）	(17/8)	97.9	87.1	93.8	92.5	103.6		100.7		104.62	102.90	98.2	98.1	98.6	97.70
20	耳プレグマ高	po-b	112	113	113	112.5	109.8	98.0	110.7	109.5	111.93	107.20	116.6	112.9	118.1	113.80
23	頭骨水平周	g-op-g	－	510	542		524.0	537.0	528.0	504.0	507.75	492.57	522.2	497.3	513.7	493.70
24	横弧長	po-b-po	－	309	313		301.5		310.0	298.5	307.80	294.02	324.9	315.1	324.4	313.20
25	正中矢状弧長	(n-o)	－	369	387		361.3		376.0		371.97	356.17	377.3	359.9	371.7	357.60
26	正中矢状前頭弧長	(n-b)	126	124	135	125.0	124.8	120.0	125.5	128.0	130.63	117.40	127.6	123.7	127.4	122.10
27	正中矢状頭頂弧長	(b-l)	－	121	132		121.8	128.0	129.0	125.0	120.35	127.35	126.1	121.3	125.1	121.00
28	正中矢状後頭弧長	(l-o)	－	125	120		118.0	114.7	114.0	102.0	124.45	111.42	123.8	114.8	119.1	114.30
28(1)	正中矢状上鱗弧長	(l-i)	－	82	73		77.7	69.3	57.7	58.0	66.63	57.92	78.1	71.9	71.3	68.80
29	正中矢状前頭弦長	n-b	113.3	108.5	119.6	110.9	111.8	98.5	111.2	108.6	113.53	110.17	111.9	108.2	111.8	106.50
30	正中矢状頭頂弦長	b-l	－	109.5	112.8		108.7	109.4	114.9	114.8	111.73	110.97	113.0	109.2	111.8	108.60
31	正中矢状後頭弦長	l-o	－	106.4	98.8		100.8	103.8	99.7	90.7	101.35	92.05	101.9	97.5	100.4	97.00
31(1)	正中矢状上鱗弦長	l-i	－	77.8	67.2		73.4	65.4	56.6	51.5	66.35	56.12	72.6	67.0	67.5	64.10
40	顔長	ba-pr	89.5	99.1	98.3	94.3	103.3		100.0	99.0	96.74	102.00	98.5	92.5	97.6	94.40
43	上顔幅	fmt-fmt	101.8	103.3	111.2	102.6	105.1	101.9	105.8	101.0	104.56	99.95	105.6	100.7	103.8	100.10
44	両眼窩幅	ek-ek	100.0	95.7	105.1	97.9	96.3	96.8	98.1	92.5	97.70	93.05	99.9	94.4	97.2	94.10
45	頬弓幅	zy-zy	129.2	130.0	133.6	129.6	136.7	121.0	122.0		126.32		136.4	125.9	132.9	124.90

46	中顔幅	zm-zm	—	95.0	103.8		99.0	96.8	106.0		101.14	91.55	101.6	95.1	98.6	93.50		
47	顔高	n-gn	135.6	119.7	129.3	127.7	126.7	117.0	123.6	110.5	122.40	117.65	123.5	119.0	123.8	115.00		
48	上顔高	n-pr	77.7	70.4	75.0	74.1	72.4	68.1	74.4	63.7	70.54	71.40	71.8	68.3	70.7	67.10		
47/45	コルマン顔示数	(47/45)	105.0	92.1	96.8	98.5	91.9		95.9		93.65		91.7	95.7	93.1	92.20		
48/45	クルマン上顔示数	(48/45)	60.1	54.2	56.1	57.1	52.6		56.0		55.40		53.0	54.5	53.3	53.80		
47/46	ウィルヒョウ顔示数	(47/46)	—	126.0	124.6		126.9	120.9	115.0		115.80				125.4	123.30		
48/46	ウィルヒョウ上顔示数	(48/46)	—	74.1	72.3		72.5	70.4	68.5		70.15		70.9	72.3	71.8	82.00		
50	前眼窩幅	mf-mf	23.7	16.5	24.7	20.1	18.5	20.2	20.8	18.9	20.48	17.95	18.5	17.3	17.8	17.40		
	前眼窩間示数（50/44）	(50/44)	23.7	17.2	23.5	20.5	18.9	20.8	21.3	19.2	20.64	19.15	18.5	18.3	18.3	18.50		
51	眼窩幅	mf-ek	40.7	41.9	42.0	41.3	42.0	40.3	40.9	39.7	41.81	40.00	43.3	41.7	42.7	41.10		
52	眼窩高		34.5	30.7	34.5	32.6	34.9	34.0	34.4	33.9	34.47	34.85	35.1	35.3	34.3	33.80		
	眼窩示数（52/51）	(52/51)	84.8	73.3	82.1	79.0	83.0	81.0	82.0	85.0	83.25	87.12	81.6	84.7	8.04	82.40		
54	鼻幅		26.7	28.0	24.6	27.4	25.6	26.8	24.4	25.7	25.90	24.15	25.1	24.6	25	24.50		
55	鼻高	n-ns	53.6	46.4	50.7	50.0	53.6	46.2	52.8	47.7	50.52	49.9	53.6	50.4	52	49.00		
	鼻示数（54/55）	(54/55)	49.8	60.3	48.5	55.1	47.8	58.0	46.4	56.1	51.34	48.36			48.4	50.20		
57	鼻骨最小幅		8.3	5.8	9.4	7.1	6.8	5.6	7.0	8.0	9.15	6.95	7.7	7.7	7	71.0		
57(1)	鼻骨最大幅		19.6	17.3	18.4	18.5	18.1				18.67	14.95	18.0	17.7	17.9	17.50		
	横鼻骨示数(57/57(1))		42.3	33.5	51.1	37.9							42.7	43.8	39	40.70		
60	上顎歯槽長	pr-alv	50.6	54.8	53.9	52.7	57.6			52.0	52.56	53.20	53.7	50.4	52.4	50.30		
61	上顎歯槽幅	ekm-ekm	—	65.3	62.2		68.6		65.7		64.67	63.45	67.7	63.4	65.8	61.70		
	上顎歯槽示数（61/60）	(61/60)	—	119.2	115.4		118.1				123.65	119.71	127.1	126.3	126	123.20		
62	口蓋長	ol-sta	43.1	44.4	47.3	43.8	46.8		46.0	50.1	42.46		46.2	44.1	44	42.70		
63	口蓋幅	enm-enm	—	35.7	34.5		46.2		36.9		39.60	38.25	40.4	38.4	40	38.40		
	口蓋示数（63/62）	(63/62)	—	80.4	72.9		97.9		80.2		92.01				91.1	90.40		
65	関節突起幅	kdl-kdl	126.2	—	132.6		126.3			123.0	117.46	113.00	127.50	119.78	122	115.70		
66	下顎角幅	go-go	105.1	92.8	100.3	99.0	98.4		109.7		97.44	92.27	102.17	94.84	96.9	90.30		
67	歯下顎幅	for. men.	52.9	43.6	51	48.3	45.3		48.1	44.9	46.86	43.22	47.83	44.69				
68	下顎長	go-go, pg	73	75	74	74.0	72.2	72.0	70.7	70.0	68.13	67.82	76.50	71.35				
69	オトガイ高	id-gn	—	—	39.1		36.5	37.0	35.4	31.8	31.70	29.70	34.50	32.50	36.1	33.20		
69(1)	下顎体高	for. men.	34.2	32.3	36.5	33.3	35.1		33.9	27.5	32.14	31.33	33.34	29.29				
70	下顎枝高		56	57	57	56.5	61.8	57.0	65.0	52.5	60.15	52.75	69.81	59.43	62.6	57.60		
71	下顎枝幅		28.4	36.2	34.8	32.3	34.1	31.1	36.1	30.9	31.97	29.85	34.29	31.43	33.1	31.10		
	下顎枝示数（71/70）	(71/70)	50.7	63.5	61.1	57.1	55.6	56.0	56.0	58.7	53.60	56.74	50.65	52.42	53.1	54.10		
79	下顎枝角		140	126	131	133.0	129.0	129.0	128.3	128.0	128.54	128.15	122.89	132.23	127.7	131.30		
70(3)	下顎切痕高		30.3	8.6	12.8	19.5	14.0	13.2	14.2	12.6	14.77	13.86	15.58	13.27	14.7	13.10		
71	下顎切痕幅		11.7	34.1	35	22.9	36.9	32.3	39.4	33.6	36.07	34.66	35.20	33.92	35.4	34.60		
	前頬骨示数（F3/F1）		18.2	15.5	16.7	16.9	13.1	13.6	16.9	17.6								
	鼻骨示数（N3/N1）		7.8	23.3	18.1	15.6	33.0	27.7	40.0	31.3								
	頬上顎骨示数（J3/J1）		24.0	15.2	19.3	19.6	19.9	23.6	29.3									
F1	前頬骨弦	fmo-fmo	97.7	93.8	103.0	95.8			93.3	92.4								
F2		fmo-n	52.0	49.1	54.3	50.6												
F3	前頬骨垂線		17.8	14.5	17.2	16.2			15.8	16.3								
N1	鼻骨弦（鼻骨最小幅）		8.3	5.8	9.4	7.1			7	8								
N2	鼻骨幅（最小幅位）		4.2	3.2	5.0	3.7												
N3	鼻骨垂線		0.6	1.4	1.7	1.0			2.8	2.5								
J1	頬上顎骨弦	zma-zma	92.3	95.3	102.6	93.8			101.5									
J2		ss-sma	51.2	49.8	55	50.5												
J3	頬上顎骨垂線		22.2	14.5	19.8	18.3			29.7									

第22表：砂原遺跡出土人骨の上肢骨の計測値と比較資料（単位はmm）

	江戸時代						縄文時代		江戸時代				現代	
	砂原遺跡（長野県）						津軽只屋		江戸町民		天徳寺		関東地方人	
	1号墓 女性	2号墓 女性	3号墓 女性	5号墓 女性	4号墓 男性	女性平均値	（浦野他） 男性	女性	（鈴木：1967） 男性	女性	（竹内：1992） 男性	女性	男性	女性
頭　骨													（高野：1958）	
1　最大長					140.1		152.1	132.0	139.4	128.4			139.60	130.00
6　中央周		37			36	37.0	33.8	33.5	38.0	31.0			38.20	33.20
6/1　長厚示数					25.7		25.6	25.0	27.3	24.3			27.30	25.10
5　中矢穴状径		12.4			11.3	12.4	13.2	11.3	13.1	10.4			12.20	10.80
4　中矢盾面径		9.3			10.3	9.3	10.1	8.5	10.5	8.9			10.00	8.40
4/5　中矢横断示数		75.0			91.2	75.0	76.6	75.1	81.3	86.0			83.40	79.30
肩甲骨													（高野：1958）	
2a　関甲骨長													105.80	96.80
12　関節窩長	31.9		30.1		34.4	31.0	37.3	31.6	36.6	32.9			35.20	31.60
13　関節窩幅	20.1		24.4		25.4	22.3	26.2	21.9	27.0	22.8			26.80	23.10
13/12　関節窩長幅示数	63.0		81.1		73.8	72.0	70.5	69.3	73.5	71.4			76.20	74.90
上腕骨											左側		（内原：1953）	
1　最大長	246	277	275		297	266.0	291.5	226.2	296.8	269.7	289.5	266.8	295.93	272.38
3　上端幅					37.6		49.1	42.1	48.8	42.8	47.5	42.0	48.33	42.17
4　下端幅		54.1		53.4	54.5	53.8	58.2	50.7	59.6	50.8	59.0	51.6	58.97	49.91
5　中央最大径	21.1	22.2	20.9		23.0	21.4	23.9	20.4	22.7	19.6	22.4	19.9	22.41	19.71
6　中央最小径	15.1	16.3	15.1		17.9	15.5	17.5	14.1	17.7	14.9	17.0	15.0	17.74	14.70
7　骨幹最小周		63	56		64	59.5	65.2	55.3	63.5	54.1			62.27	54.11
7a　中央周径	58	65	60		67	61.0					64.9	57.6		
7/1　長厚示数		22.7	20.4		21.5	21.6	22.8	20.5	21.4	20.1			21.14	19.89
7a/1　長厚示数	23.6	23.5	21.8		22.6	23.0					22.3	21.3		
橈　骨													（嶋名：1951）	
1　最大長		206	192		227	199.0	235.2	209.0	224.2	199.8	222.8	199.1	225.09	202.11
2　生理長			180.8			180.8	220.2	197.2	210.8	188.9	208.4	187.4	208.19	188.13
3　最小周		43	34		45	38.5	44.5	38.5	41.6	34.5	39.9	34.7	40.45	34.69
3/2　長厚示数			18.8			18.8	20.5	19.2	19.8	18.3	19.3	18.2	19.55	18.49
4　骨体横径	14.9	15.8	15.1	15.5	20.3	15.3					16.5	14.7		
4a　骨体中央横径		15.7	13.1		18.1	14.4	17.2	14.8	15.6	13.5	15.1	13.7	16.45	14.56
5　骨体矢状径	10.9	11.4	9.5	11.3	13.3	10.8					11.7	10.1		
5/4　体断面示数	73.2	72.2	62.9		65.5	69.4								
5(4)　筋圓径		42			49	42.0					46.3	39.6		
5(5)　中央周		45	36		48	40.5			44.2	38.2	42.5	37.5	43.34	37.56
5(6)　下端幅		31.8	25.2		31.3	28.5	32.5	27.3	32.9	29.0	33.8	28.6	33.89	28.88
5a　骨体中央矢状径		11.9	9.8		12.3	10.9	11.8	10.3	12.0	10.0	11.9	10.0	11.81	9.84
5a/4a　骨幹横断示数		75.8	74.8		68.0	75.3	69.2	70.3	77.5	74.6	78.9	73.7	71.75	67.44
5(6)/2　体断面示数			13.9			13.9					16.2	15.3		
5(5)/2　中央位長厚示数			19.9			19.9					20.4	19.9		
尺　骨						#DIV/0!							（嶋名：1951）	
1　最大長		227	209		239	218.0	252.5	226.0	242.1	223.4	239.2	216.0	241.52	218.69
2　生理長		200	184		210	192.0	222.3	201.4	211.2	195.7	209.1	190.1	210.67	191.11
3　骨幹最小周		40	34		41	37.0	39.3	33.9	36.4	31.5	35.4	31.8	36.55	32.16
1/2　長示数		113.5	113.6		113.8	113.5					114.0	113.5		
3/2　長厚示数		20.0	18.5		19.5	19.2	17.8	16.7	17.2	16.1	17.0	16.8	17.48	16.82
6　肘頭幅		21.5				21.5					26.0	22.7		
11　骨幹背掌径		11.3		10.3	11.9	10.8	14.2	11.7	12.8	10.5	12.7	11.0	13.20	10.71
12　骨幹橈径		16.9		18.2	18.8	17.6	16.3	14.0	16.2	14.1	16.4	14.1	16.29	13.91
11/12　骨幹横断示数		66.9		56.6	63.3	61.7	87.3	84.5	79.0	75.1	78.3	78.6	80.94	76.94
13　上茎径	15.8	18.0	18.0	16.6	18.9	17.1	21.2	17.2	21.2	18.5			20.52	17.16
14　上茎長径	20.6	25.1		23.3	25.5	22.8	25.5	21.8	26.2	22.5			25.17	21.91
13/14　茎厚示数	79.0	71.7		71.2	74.1	74.0	82.8	79.5	81.1	82.2			82.16	78.37
11′　中央最小径		10.9			12.1	10.9	12.4	10.6					12.39	10.39
12′　中央最大径		15.4			18.8	15.4	17.0	14.5					16.63	14.26
11′/12′　中央横断示数		70.8			64.4	70.8	73.2	73.5					74.53	73.16

第23表：砂原遺跡出土人骨の下肢骨計測値と比較資料（単位はmm、＊は推定値）

Martin	計測項目	江戸時代 砂原遺跡 1号墓 女性	2号墓 女性	3号墓 女性	5号墓 女性？	4号墓 男性	女性平均値	縄文時代 津雲貝塚 清野他 ♂	♀	鎌倉時代：福島 ♂平均値	♀平均値	江戸時代 江戸町民 鈴木：1967 ♂	♀	桑島（熊本県） 立志（1970） ♂	♀	現代 関東地方人 ♂	♀
大腿骨																（大塚：1950）	
1	最大長	344	370	379		416	364.3	418.2	382.9	368.0	361.7	414	378	412.2	398.5	412.05	382.10
2	自然位全長	340	369	375		411	361.3	414.2	377.8	380.0	357.7	410	374	407.1	394	408.05	378.20
6	中央矢状径	20.9	24.7	25.4		27.8	25.7	29.3	25.0	27.1	25.2	28.3	24.8	26.29	24.27	27.61	24.66
7	中央横径	23.8	26.5	25.8		26.5	25.4	25.5	24.0	26.8	24.3	27.4	24.1	24.66	22.79	26.23	23.06
6/7	中央横断示数		117.9	123.8			120.9	114.6	103.9	101.6	103.8	104	103	107.1	107.1	105.72	107.56
8	骨髄中央部	70	80	79		85	76.3	86.8	77.4	85.0	78.7	87.2	76.9	80.61	76.59	83.60	74.40
8/2	長厚示数		470.7	475.1			472.9	21.1	20.6	22.2	22.0	21.1	20.5	20.12	19.70	20.42	19.61
9	骨体上横径	29.2	31.4	31.3		32.0	30.6	30.5	28.3	31.4	29.4	30.7	26.5	29.58	27.02	30.86	27.86
10	骨体上矢状径	18.6	23.0	23.9		23.7	21.8	24.2	21.6	23.4	21.1	27.8	25.5	23.01	21.37	25.35	22.45
10/9	上骨体横断示数	63.7	73.2	76.4		74.1	74.8	79.5	76.6	74.5	72.8	91.2	97.3	77.6	78.97	82.18	81.24
21	上頭幅			70.8			70.8	79.9	70.6	75.1		79.5	70.6	73.65	69.59	79.67	69.85
膝蓋骨																（加藤・原田：1960）	
1	最大高			34.6			34.6				34.5			39.79	39.65	41.39	37.14
2	最大幅			35.6			35.6				35.5			42.04	39.65	45.14	40.12
3	最大厚			17.9			17.9				16.4			18.33	17.7	19.88	18.16
4	関節面高			28			28.0							28.96	31.75	31.69	28.67
5	内側関幅			20.6			20.6							19.71	20.4	21.03	18.83
6	外側関幅			18.1			18.1							24.6	22.6	27.10	24.53
1/2	指幅示数			97.2			97.2				97.2			95.51	99.91	92.1	92.86
3/2	厚幅示数			50.3			50.3				46.2					44.08	45.48
5/6	関節面示数			113.8			113.8									78.17	76.92
脛骨																（鈴木：1961）	
1	全長	＊261	305	299		331	302.0	345.9	318.1	311.0	285.0	327	302	336.47	321.65	320.38	298.25
1a	最大長	＊266	308	306		337	307.0	349.5	322.7	316.0	290.7	331	306	340.42	326.05	325.31	302.40
6	下端		40.2	41.8		45.9	41.0	50.2	45.3	46.6	43.0	49.6	43.6	74.61	45.35	51.3	45.84
8	中央矢状径	24.9	25.2	24.9		28.1	25.0	32.1	26.8	29.1	25.4	28.9	25.3	27.02	25.66	28.73	25.71
9	中央横径	19.7	18.7	19.8		21.3	19.4	19.6	17.7	21.3	17.8	21.6	18.9	20.18	18.54	22.79	20.31
9/8	中央横断示数	79.1	74.2	79.5		75.8	77.6	61.5	65.4	74.2	70.0	74.9	72.4	74.89	72.60	78.66	78.68
8a	栄養孔部矢状径	29.3	29.1	29.8		33.3	29.4	35.4	30.2	32.4	29.1	32.9	28.8			31.77	28.95
9a	栄養孔部横径	21.1	21.1	20.8		24.9	21.0	21.9	19.0	22.5	19.7	23.7	21.2			25.10	22.51
9a/8a	栄養孔位置断面示数	72.0	72.5	69.8		74.8	71.4	62.2	62.8	69.8	67.9	72.2	73.6			78.26	77.28
10b	最小周	64	65	64		73	64.3	77.4	67.1	77.0	64.0	70.8	63.7	73.47	69.06	72.25	65.28
腓骨																（福田：1961）	
1	最大長		306	298		323	302.0	334.0	312.1			327	296	340.2	327.0	322.35	301.7
2	中央最大径		11.1	12.9		15.2	12.0	17.7	15.1	14.7	12.4	15.3	12.8	14.64	13.83	14.61	13.61
3	中央最小径		9.6	9.2		10.0	9.4	12.1	9.9	11.3	9.5	11	9.4	10.57	9.31	10.94	9.54
3/2	中央横断示数		86.5	71.3			78.9	69.0	66.1	78.7	76.6	72.1	73.9	72.32	69.97	73.35	70.1
4	中央周		35	38		43	36.5	52.0	43.6	45.0	30.0	43.4	37.3	45.00	41.96	43.38	38.95
4a	上骨体周		36	34		36	35.0	39.3	35.1	33.0		36.3	31.9	38.25	36.43		
4a/1	長厚示数		11.8	11.4		11.1	11.6	11.8	11.7			11.1	10.7	11.3	11.47	11.68	11.33
4(2)	下端幅			21.1		21.7	21.1			19.1		20.2	17.6			19.84	17.33
距骨																	
1	距骨長		45.7		45.7	49.0	45.7	50.0	45.4	49.7	45.5						
2	距骨幅		40.6		35.9	37.9	38.3	41.4	37.9	42.7	36.4						
3	中央厚		28.2		27.8	28.1	28.0	28.9	25.9	29.0	27.0						
2/1	長幅示数		88.8		78.6	77.3	83.7	82.7	83.6	85.9	80.0						
3/1	長高示数		61.7		60.8	57.3	61.3	57.8	57.1	58.4	60.7						
踵骨																	
1	最大長	61.7	66.5			66.7	64.1	76.2	69.6	73.6	65.6						
2	中　幅	33.7	39.2			39.5	36.5	41.8	37.9	41.1							
4	高	36.6	35.9			38.7	36.3	40.0	36.3	35.7							
2/1	長幅示数	54.6	58.9			59.2	56.8	55.3	54.3	55.8							
8	踵骨隆起幅	25.0	25.7				25.4	31.4	27.5								
7	踵骨隆起高	37.4	35.8			38.8	36.6	45.3	40.9								
8/7	踵骨隆起幅高示数	104.2	107.6				105.9	69.8	67.0								
經1/大2	経骨大腿骨示数	76.8	82.7			80.5	79.7	81.5	83.6	79.9	79.8						

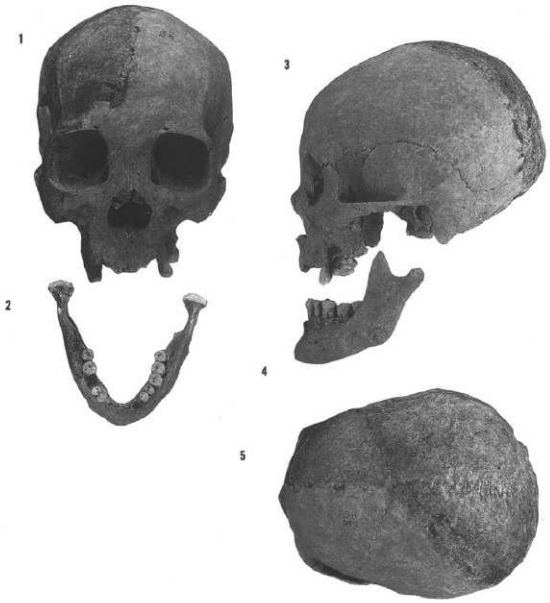


写真１：砂原遺跡出土の江戸時代女性人骨（２号墓）
１：正面観、２：下顎骨上面観、３：左側面観、４：下顎骨左側面観、５：上面観

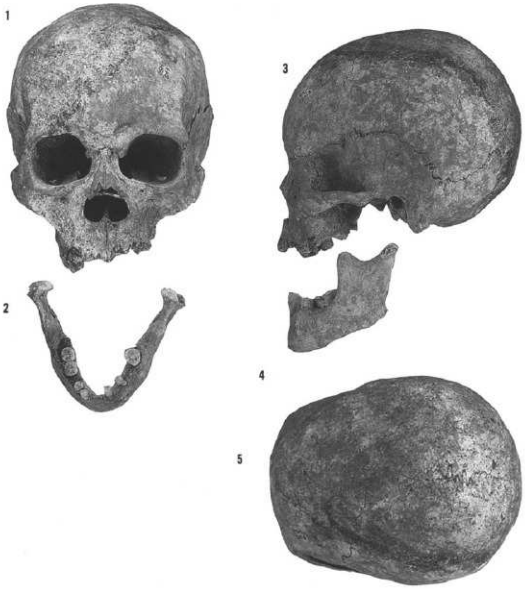


写真２：砂原遺跡出土の江戸時代女性人骨（３号墓）
１：正面観、２：下顎骨上面観、３：左側面観、４：下顎骨左側面観、５：上面観

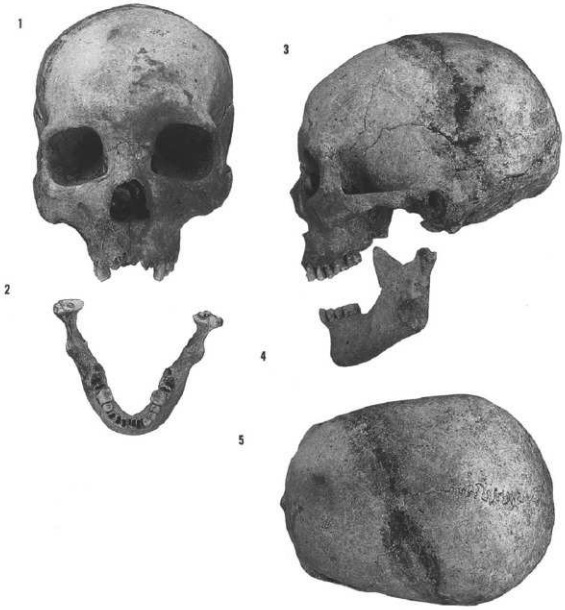


写真３：砂原遺跡出土の江戸時代男性人骨（４号墓）
１：正面観、２：下顎骨上面観、３：左側面観、４：下顎骨左側面観、５：上面観

第6節　小結

縄文時代中期の遺物群は、なぜか1ケ所から出土した。しかも集落の存在が、どの時期も認められない。中期初頭、ここがようやく砂の堆積環境となっても、もうここには千曲川の流れが認められず、遥か西側を流下していたものと考えられる。渇川の下流というのが、最も適した表現である。なぜここに多数の土器を持って、やって来たのだろう、不思議にしか思えない。たしかにここでは、打製石斧も作られているが、それは確固たる作業内容ではなかった。磨石類の多数出土、これと何か関連があるのだろうか。渇川の下流がどのような存在であったのか、今では想像が付かない。

時を隔てて、古墳時代前期には、千曲川縁の自然堤防上に集落を営んでいた。古墳時代前期には良くあることで、これまで決して弥生人が近づかぬ場所に集落を営んでいるケースが多い。当然、そこには基盤となる生産場所の開拓が必要であったはずだ。能登・越後系の土器も出ているが、今のところ玉造り工房とは無縁の世界である。平安の人々と同じように、ここで水田や畑を耕作していたに違いない。ただし、北側1.5 km程には、古東山道の渡河地点があったと考えられており、それとの関連も想定する必要があろう。

古墳時代後期には、また同じ場所に集落が形成されていた。これも良くあることで、律令期を迎える頃、また突然に人々が生活を繰り広げる場所がある。その時の一場面となっているが、不思議と奈良時代の者たちはこの場所を嫌っており、遺物は一切拾えなかった。この土地は裕福な場所ではなかったのか、それとも遠隔の地から耕作にやって来たのか良くわからない。

平安時代初頭になると、また人々が住み着く。自然堤防上の最も高い部分をその場所とし、また微高地面にも1棟の掘立柱建物が存在していた。これもおそらくは田畑の耕作を目的としたものであろう。9世紀後半にはここも畑として利用することとなり、現状では、ただ1棟のみ、微高地面に放棄された竪穴住居が見つかっている。9世紀第4四半期のものである。

大洪水は、この時にやってきた。D・E区の水田状況からすると、田ごしらえの季節として考えられる。被災記録としては、仁和4年（西暦888年）5月8日（旧暦）に起きた、信濃国の6郡を流没させた「仁和の水害」が著名であるが、時期・季節ともこれに合致している。興味深いが、その信憑性は不明のままである。

第18表　遺構一覧表

番号	主　軸	主軸長 (m)	副軸長 (m)	壁高 (m)
1住	N－0°－W	2.92	3.68	0.80
3住	E…41°－S	4.55		0.39
4住	N－17°－W	5.00	5.45	0.52
5住	N－31°－E	4.17	4.65	0.56
6住	N－0°－W	4.72	4.61～5.10	0.73
7住	N－29°－W	5.25	5.38	0.80
8住	N－29°－W			0.13
9住	N－44°－W	5.50		0.65
10住	N－17°－W	3.47	3.78～4.10	0.56
11住	N－42°－E	(4.20)	4.12	0.48
12住	N－11°－W	4.25	4.30	0.64
13住	N－16°－W	5.30		0.21
14住	N－31°－E		3.31	0.68
15住	N－26°－E		4.40	0.76
16住	N－14°－E		2.35	0.14
17住	N－17°－E		3.68	0.17
18住	N－23°－W	3.62	4.57	0.85
19住	N－15°－E		3.35	0.67
20住	N－49°－W	5.07		0.88
21住	N－21°－E		5.90	0.80
22住	N－11°－E	4.42	4.82	0.63
23住	N－11°－E			-0.12
24住	N－2°－E		3.46	0.72
25住	N－13°－W			0.47
26住	N－6°－E	4.00	4.24	0.32

番号	主　軸	主軸長 (m)	副軸長 (m)	壁高 (m)
27住	N－30°－W	4.25	5.08	0.52
28住	N－20°－W			0.20
30住	N－21°－E	2.95	3.54	0.48
31住	N－12°－E	3.60	3.46	0.70
32住	N－4°－E		4.71	0.54
33住	N－10°－E	5.95	5.72～6.45	0.72
34住	N－13°－E	4.75	5.08	0.67
36住	N－14°－E	3.36	4.22	0.48
37住	N－19°－E		4.40	0.45
41住	N－15°－E			0.14
42住	N－32°－E	3.50	3.10	0.49
1建	N－0°－W	4.70		
2建	N－31°－E	5.50	4.00	
3建	N－5°－E	3.00		
1坑	N－65°－E	5.65	3.46	0.38
2坑	N－60°－E	3.01	1.79	0.32
3坑	N－6°－E		3.03	0.60
4坑	N－0°－W	2.36	2.17	0.40
1墓		上端 0.80 × 0.86		0.35
2墓		上端 1.05 × 1.21		0.37
3墓		上端 0.97 × 1.10		0.82
4墓		上端 0.79 × 0.84		0.39
5墓		上端 0.78 × 0.81		0.18
6墓		内法 4.00		
7墓		内法 4.10		

第19表　遺物観察表

図版番号	種　類	残　存	色　調	大　き　さ (cm)	整　形　の　特　徴	出土位置	備　　考
94－1	打製石斧	完形		長14.2　幅9.3　厚3.2		C区	角閃石輝石安山岩 (板状原理)　480.9g
－2	打製石斧	完形		長12.6　幅11.4　厚3.1		D区	チャート　573.3g
－3	打製石斧	一部欠		長 (9.5)　幅 (5.6)　厚 (3.0)		C区	粘板岩 (砂礫を含む) (182.04g)
－4	打製石斧	一部欠？		長 (10.8)　幅 (5.6)　厚 (2.8)		C区	粘板岩　(136.48g)
－5	打製石斧	刃縁欠？		長 (9.8)　幅 (5.5)　厚 (3.0)		C区	粘板岩　(168.41g)
－6	打製石斧	刃部欠		長 (5.8)　幅 (9.8)　厚 (2.3)		D区	粘板岩　(165.90g)
－7	打製石斧	基端一部欠		長13.3　幅5.3　厚1.2		C区	角閃石輝石安山岩　(112.55g)
－8	打製石斧	刃縁一部欠		長12.8　幅 (5.4)　厚1.8		C区	角閃石輝石安山岩　(179.53g)
－9	打製石斧	基端一部欠		長10.6　幅5.4　厚2.1		C区	硬砂岩　(164.41g)
－10	打製石斧	両縁欠		長 (8.6)　幅 (4.4)　厚 (1.9)		C区	硬砂岩　(89.55g)
－11	打製石斧	基部欠		長 (8.1)　幅 (5.5)　厚 (1.4)		C区	角閃石輝石安山岩　(94.30g)
－12	打製石斧	刃部欠		長 (7.8)　幅 (5.0)　厚 (1.7)		D区	角閃石輝石安山岩　(92.48g)
－13	打製石斧	両縁欠		長 (7.6)　幅 (4.7)　厚 (1.4)		D区	角閃石輝石安山岩　(43.12g)
－14	打製石斧	基部欠		長 (10.3)　幅6.5　厚 (2.9)		C区	硬砂岩　(188.38g)
－15	打製石斧	基部欠		長 (10.5)　幅7.5　厚2.2		C区	角閃石輝石安山岩　(218.24g)
－16	打製石斧	刃縁一部欠		長 (10.2)　幅 (5.2)　厚1.5		C区	粘板岩　(80.88g)
－17	打製石斧	完形？		長10.2　幅6.5　厚1.9		C区	粘板岩　133.24g
95－18	凹み石	一部欠		長11.5　幅7.6　厚4.3		C区	角閃石輝石安山岩　(499.1g)
－19	凹み石	完形		長10.5　幅8.4　厚4.3		C区	角閃石輝石安山岩　513.7g
－20	凹み石	完形		長9.7　幅7.6　厚6.2		C区	角閃石輝石安山岩　584.9g
－21	磨石	完形		長12.7　幅6.8　厚5.8		C区	角閃石輝石安山岩　615.3g
－22	磨石	完形		長13.2　幅6.5　厚5.5		C区	流紋岩　674.6g
－23	磨石	完形		長11.9　幅8.3　厚4.6		C区	角閃石輝石安山岩　650.4g

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
95－24	壺石	完形		長9.6　幅8.8　厚5.9		C区	角閃石輝石安山岩　657.8g
－25	壺石	完形		長10.0　幅10.4　厚4.0		C区	角閃石輝石安山岩　534.2g
－26	鞴石	完形		長7.1　幅7.1　厚5.5		C区	砂岩　343.7g
－27	大形剥片石器	完形		長4.3　幅9.7　厚1.3		C区	硬砂岩　55.7g
－28	石錘	完形		長5.0　幅5.3　厚0.5		C区	硬砂岩　23.14g
－29	石皿	1/2残		長(11.8)　幅(18.8)　厚(6.0)		C区	角閃石輝石安山岩　(1,809.9g)
142－1	土師器	口縁部1/2欠	黄橙	口13.9　高3.6　底6.3	回転ナデ、内面やや粗いミガキ、底部回転糸切り	カマド内	内面黒色処理
－2	土師器	口縁部1/3欠	明黄褐	口13.0　高4.2　底6.3	〃	カマド内	内面黒色処理
－3	土師器	口縁部1/3欠	橙	口13.0　高4.1　底5.9	〃		内面黒色処理
－4	土師器	口縁部9/10欠	橙	口(12.8)　高3.6　底6.0	回転ナデ、内面ミガキは不明、底部回転糸切り		内面黒色処理
－5	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口13.6　高4.2　底6.1　見込なし	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	軟質
－6	須恵器	口縁部1/5欠	灰白	口13.6　高4.4　底6.1　見込なし	〃	カマド内	軟質
－7	須恵器	口縁部1/3欠	赤褐	口14.0　高5.0　底5.8　見込なし	〃	床直	軟質
－8	須恵器	口縁部1/2欠	橙	口14.1　高4.5　底6.8　見込なし	〃	カマド内	軟質
－9	須恵器	口縁部1/4欠	淡黄	口13.9　高4.1　底5.3　見込なし	〃	床直	軟質
－10	土師器	胴部1/3・底部欠	明黄褐	口20.8　胴22.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド火床部	炎胴国の器高は信頼度低い
－11	土師器	口縁部1/3・胴部中央欠	橙	口23.2　高(26.0)　胴23.7　底4.6	口縁部ヨコナデ、胴部上半回転ナデ、胴部中央以下外面ヘラケズリ・内面ヘラナデ	カマド火床部	炎胴国の器高は信頼度低い
－12	土師器	1/2残	橙	口23.1　高24.6　胴22.8　底5.1	〃	カマド内	
－13	土師器	底部3/4残	橙	底4.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	カマド内	
－14	土師器	1/3残	浅黄橙	口(16.8)　高15.9　胴(17.2)　底(7.5)	口縁部ヨコナデ、胴部中央以下外面ヘラケズリ、それ以外回転ナデ	竪穴部構築材	
－15	須恵器	胴部上半以上1/3残	にぶい黄橙	口40.8	口縁部回転ナデ、胴部タタキ	カマド内	
97－1	土師器	坏部完形	浅黄	口21.2	ハケ→口縁部ヨコナデ→ミガキ	床直	外来
－2	土師器	口縁部1/3残	橙	口(21.2)	〃		外来
－3	土師器	坏部完形	橙	口20.4	口縁部ヨコナデ、ほかは不明	＋5cm	模倣品
－4	土師器	胴部以上1/3残	明黄褐	口(10.0)	胴部ヘラナデ→胴部ハケ→口縁部ヨコナデ		外来
－5	土師器	1/2残	明黄褐	口18.4　高6.3　底5.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ、底部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		外来
－6	土師器	1/2残	明黄褐	口9.4　高5.7　底3.1	口縁部ヨコナデ、ほかは不明		外来
－7	土師器	3/4残	明黄褐	口17.2　高(30.2)　台8.7	口縁部ヨコナデ、胴部ハケ、脚台部ハケ→下端ヨコナデ	床直	外来
－8	土師器	胴部下端欠	明黄褐	口17.6　高(30.0)　台8.8	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ハケ→脚台部下端ヨコナデ	床直	外来
－9	土師器	口縁部1/2残	橙	口16.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ	床直	外来
－10	土師器	口縁部1/4残	にぶい黄橙	口(20.0)	ハケ→口縁部ヨコナデ→胴部内面ヘラナデ	床直	外来
－11	土師器	口縁部3/4残	橙	口17.4	外面ハケ、胴部内面ハケ→ヘラナデ、口縁部ヨコナデ→口縁部内面ヨコミガキ	床直	模倣品
－12	土師器	胴部下端欠	明黄褐	口12.2　高(13.7)　底3.3	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ→ヘラケズリ、底部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→上半ヘラケズリ		外来（搬入品）
－13	土師器	胴部1/3欠	明黄褐	口10.7　高13.1　底5.3	胴部外面上半以上ハケ→下段ミガキ、胴部内面一部ヘラナデが入るがその他は不明	床直	
－14	土師器	脚台部完形	にぶい黄橙	台10.9	ハケ→脚台部内面ヘラナデ→下端ヨコナデ	床直	外来
－15	土師器	口縁部7/8残	橙	口12.0	全面ヨコミガキ	床直	外来
－16	土師器	口縁部2/3残	明黄褐	口22.8	口縁部ヨコナデ、外面ハケ→タテミガキ、内面ヨコミガキ	＋5cm	
－17	土師器	底部1/2残	橙	底6.6	胴部ハケ、底部外面ヘラケズリ	＋3cm	外来

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
98－1	土師器	1/3残	黒	口 (12.0)　高4.5　体 (9.6)	口縁部ヘラナデ、体部外面ヘラケズリ・全面ヨコミガキ→内面暗文		内外面黒色処理
－2	土師器	3/4残	橙	口11.4　体10.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	床直	橙色土器
－3	土師器	口縁部1/5欠	にぶい黄橙	口11.8　高4.7　体9.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面粗いヨコミガキ	床直	内外面剥げた黒色処理
－4	土師器	坏部1/4残	橙	口 (18.6)	全面入念なヨコミガキ		坏部内面黒色処理
－5	土師器	脚部完形	橙	脚11.8	下端ヨコナデ、坏部内面ミガキ、その他不明	床直	坏部内面黒色処理 支脚に転用したか？
－6	土師器	1/3残	橙	口 (17.4)　高 (11.8)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	床直	内面黒色処理
－7	土師器	口縁部1/2欠	橙	口5.9　高5.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
－8	土師器	4/5残	橙	口19.2　高 (34.8)　底 (5.5)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、底部は不明	床直	炭胴部の器高は復元値度低い
－9	土師器	底部完形	灰白	底2.8	外面ユビナデ、内面ヘラナデ		
－10	土製円板	完形	明黄褐	径3.7	割れ面研磨		胴張り壺の胴部を転用
99－11	石錘	完形		長14.9　幅7.5　厚3.9	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　699g
－12	石錘	完形		長12.9　幅8.0　厚3.8	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　620g
－13	石錘	完形		長12.7　幅7.9　厚4.3	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　726g
－14	石錘	完形		長13.3　幅7.1　厚4.7	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　656g
－15		完形		長19.7　幅13.2　厚7.9	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　2,482g
－16		欠損？		長 (30.0)　幅 (19.7)　厚 (8.9)	磨耗痕、左右に縄掛け部あり？	床直	角閃石輝石安山岩 (7,900g)
－17	石錘	完形		長14.5　幅7.0　厚3.7	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　664g
－18	石錘	完形		長13.1　幅5.8　厚4.3		床直	角閃石輝石安山岩　493g
－19	石錘	完形		長12.2　幅6.5　厚5.6	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　553g
－20	石錘	完形		長10.1　幅5.2　厚4.7		床直	流紋岩　412g
－22	石錘	完形		長10.7　幅5.8　厚3.5		床直	角閃石輝石安山岩　330g
－23	石錘	完形		長11.1　幅5.9　厚3.3	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　327g
－24	石錘	完形		長14.2　幅7.5　厚7.2	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　1,029g
100－1	土師器	口縁部1/3欠	淡黄	口12.0　高5.2　底4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ、底部回転糸切り	床直	内外面剥げた黒色処理 ちと2枚重ね 雑造な土器
－2	土師器	口縁部1/4欠	浅黄橙	口12.8　高3.3　体9.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ→内面暗文		内面黒色処理
－3	土師器	1/4残	黒	口 (12.0)　高3.9　体 (10.8)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		内外面黒色処理
－4	土師器	1/3残	橙	口11.0	〃		橙色土器
－5	土師器	口縁部1/4欠	にぶい黄橙	口13.2　高5.3　体10.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→内面暗文	床直	有段口縁坏 1と2枚重ね
－6	土師器	完形	灰白	口9.6　高4.3	口縁部ヨコナデ→全面粗いヨコミガキ	覆土上層	粗造な土器
－7	須恵器	2/3残	灰	口 (10.8)	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	床直	
－8	土師器	口縁部1/3欠	橙	口13.9　高5.5　底7.6	口縁部ヨコナデ、体部外面以下ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ→外面上半・内面ヨコミガキ	＋15cm	
－9	土師器	脚部下端欠	淡黄	口15.9	口縁部ヨコナデ、体部外面以下ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ→坏部内面ヨコミガキ→暗文	床直	坏部内面黒色処理
－10	土師器	口縁部1/10・脚部1/3欠	淡黄	口15.6　高11.6　脚11.6	口縁部・脚部下半ヨコナデ、体部外面以下・脚部内面ヘラケズリ→脚部内面以外ヨコミガキ	床直	坏部内面黒色処理
－11	土師器	口縁部1/3・脚部下端欠	浅黄	口13.6	口縁部・脚部下半ヨコナデ・体部外面以下ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ→坏部内面ヨコミガキ・暗文	床直	坏部内面黒色処理
－12	土師器	完形	橙	口13.9　高7.0　脚8.5	口縁部・脚部横ヨコナデ、体部外面以下ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ→口縁部外面・坏部内面ヨコミガキ	＋8cm	坏部内面黒色処理

挿図番号	器　類	残　存	色　調	大　きさ（cm）	器　形　の　特　徴	出土位置	備　　考
100－13	土師器	脚筒1/2・口縁部欠	橙	脚8.8	脚部裾ヨコナデ、体部外面以下・脚部内面ヘラケズリ→口縁部外面・坏部内面ヨコミガキ	覆土上層	坏部内面黒色処理
101－14	土師器	胴部欠	橙	□18.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	天井部右側に転用	
－15	土師器	ほぼ完形	明赤褐	□20.5　高37.9　底5.8	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	天井部左側に転用	正立可能
－16	土師器	胴部欠	明赤褐	□21.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヨコナデ	右袖奥に転用	
－17	土師器	口縁部1/4・底部1/2欠	橙	□22.9　高37.4　底（4.5）	〃	左袖奥に転用	
－18	土師器	底部欠	黄橙	↑21.4	〃	掘2分割し南袖手前に転用	
－19	土師器	完形	明赤褐	□21.2　高36.6　底5.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド左にかかる	正立可能
－20	土師器	完形	橙	□18.2　高29.1　底6.0	〃	カマド右にかかる	正立不可能
－21	鉄鏃	茎中欠					
－22	土錘	完形	灰黄	長6.1　厚1.4			10.73g
－23	土錘	完形	灰黄	長5.7　厚1.5			10.20g
102－24	石鏃	完形		長10.9　幅6.8　厚3.5	磨耗痕、縄掛け痕		角閃石輝石安山岩　30g
－25	石錘	完形		長12.2　幅6.0　厚4.4	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　44g
－26	石錘	完形		長12.9　幅7.9　厚3.9	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　59g
－27	石錘	完形		長12.4　幅5.9　厚4.5	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　48g
－28	石錘	完形		長10.4　幅7.4　厚3.5	磨耗痕	床直	流紋岩　457g
－29	石錘	完形		長15.2　幅6.7　厚3.6	磨耗痕	床直	花崗岩　549g
－30	石錘	完形		長11.4　幅7.5　厚3.2	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　482g
104－1	土師器	口縁部1/3欠	橙	↑14.5　高5.0	全面入念なヨコミガキ		内面黒色処理
－2	土師器	1/3残	明黄褐	□（12.0）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ→暗文		内面黒色処理
－3	土師器	口縁部3/4欠	灰白	□（10.8）　高4.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
－4	土師器	1/4残	明黄褐	□（10.2）	〃		内面黒色処理
－5	土師器	口縁部1/2欠	橙	↑12.4　高4.1　体10.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	カマド内	有段口縁坏
－6	土師器	口縁部1/4欠	橙	□10.9　高3.5	口縁部ヨコナデ→口縁部ヨコミガキ→暗文	カマド脇焚部直上	飛鳥
－7	須恵器	口縁部一部欠	灰	□9.3　高3.5　体11.2	回転ナデ、坏部外面回転ヘラケズリ		＋12cm
－8	土師器	2/3残	浅黄橙	□20.6　高（8.6）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ →全面ヨコミガキ		内面黒色処理か？
－9	土師器	口縁部1/2残	橙	□（18.0）	全面入念なヨコミガキ	＋8cm	内面黒色処理
－10	土師器	口縁部1/2欠	橙	↑18.4　高10.6	口縁部ヨコナデ体部以下外面ヘラケズリ→内面ヨコミガキ	カマド内	内面黒色処理
－11	土師器	坏部4/5・口縁部欠	橙	脚（12.2）	脚台内面ヘラケズリ→脚台部都内面・外面ミガキ	＋5cm	坏部内面黒色処理
－12	土師器	3/4残	明黄褐	↑21.4　高25.5　底9.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ→口縁部内面ヨコミガキ、体部内面タテミガキ	カマド内	焼成前に1孔穿孔
－13	十製砥石	完形	浅黄	長6.9　厚3.8	ヘラケズリ	床直	175.98g
－14	土製錘	口縁部一部欠	浅黄	長6.3　厚1.6	粗雑なミガキ		焼成前に2孔穿孔（27.30g）
106－1	土師器	口縁部1/2欠	にぶい黄橙	□12.3　高4.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	＋10cm	内面黒色処理 雑拙な土器
－2	土師器	1/2残	橙	□12.0　高（3.9）　体10.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		有段口縁坏
－3	土師器	口縁部1/3欠	橙	□13.2　高4.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→暗文	石袖基礎	飛鳥
－4	須恵器	1/2残	灰	□9.0　高3.2　体10.8	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ		焼成前に線刻

挿図番号	器　類	残　存	色　調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
106－5	須恵器	口縁部1/4欠	灰白	口10.6　高3.5	回転ナデ、天井部外面ヘラケズリ		
－6	土師器	口縁部・胴部3/10欠	橙	口（12.0）　高6.4　胴（8.5）	口縁部・胴部ヨコナデ、体部外面以下・胴部内面ヘラケズリ→坏部内面ヨコミガキ	＋7cm	坏部内面黒色処理
－7	土師器	1/3残	によい黄橙	口（18.8）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理 実測図の器形は信頼度低い
－8	土師器	口縁部1/3欠	橙	口14.8　高10.0　底5.0	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ、底部内面回転ナデ	カマド焚口部直上	内面黒色処理か？ ロクロ成形
－9	土師器	ほぼ完形	によい橙	口14.7　高16.4　底7.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→胴部内面以外ヨコミガキ	床直	
－10	土師器	胴部中央以上4/5残	橙	口（22.5）	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→全面粗雑なヨコミガキ		
－11	土師器	胴部中央以下1/3残	橙	底10.5	胴部内面ヘラナデ、外面ヘラケズリ→外面ヨコミガキ	床直	
－12	土師器	ほぼ完形	によい黄橙	口13.7　高20.4　底5.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面ハケ→タテミガキ、底部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ、一部ヘラケズリ	床直	顔料を塗彩痕あり
－13	土師器	口縁部1/4欠	橙	口16.0　高15.1　底6.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
－14	土師器	底部完形	淡黄	底6.2	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ		穿孔なし土器
－15	土師器	胴部中央以上1/4残	淡黄	口（14.5）	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	実測図の器形は信頼度低い
－16	土師器	口縁部3/4残	浅黄橙	口20.9	〃		
－17	土師器	胴部中央以上4/5残	によい黄橙	口21.3	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ→ハケ、胴部内面ハケ→下部ヘラケズリ・胴部ヘラナデ	＋5cm	穿孔なし土器
－18	鉄製品	一部のみ		長（4.7）			レントゲン撮影
－19	鉄鏃	完形		長19.7			レントゲン撮影
－20	刀子	切先欠		長（9.8）			レントゲン撮影
107－1	土師器	口縁部1/3欠	灰白	口12.0　高4.4　体19.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→内面ヨコミガキ	右袖密着	内面黒色処理
－2	土師器	完形	浅黄	口12.0　高4.5　体19.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	＋10cm	内面黒色処理 穿孔なし土器
－3	土師器	口縁部1/3欠	黒	口15.9　高5.3	〃	左袖密着	内外面黒色処理？ 搬入品？
－4	土師器	口縁部1/4欠	橙	口10.7　高3.4　体19.4	〃	床直	橙色土器
－5	須恵器	口縁部1/4欠	オリーブ灰	口12.2　高3.4	回転ナデ、天井部外面手持ちヘラケズリ	右袖密着	
－6	土師器	口縁部1/5残	橙	口（26.0）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理？
－7	鉄鏃	茎部残					レントゲン撮影
－8	白玉	1/2残		径（1.9）			滑石　（2.85g）
108－9	石錘	完形		長15.3　幅6.8　厚5.4	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　784g
－10	石錘	完形		長13.3　幅7.9　厚5.7	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　952g
－11	石錘	完形		長13.5　幅8.2　厚4.8	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　751g
－12	石錘	完形		長16.6　幅8.3　厚6.3	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　1,264g
－13	石錘	完形		長13.1　幅5.7　厚4.8	磨耗痕	床直	花崗岩　662g
－14	石錘	完形		長10.5　幅8.2　厚5.3	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　715g
－15	石錘	完形		長12.8　幅7.9　厚4.6	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　549g
－16	石錘	完形		長13.4　幅7.2　厚3.9	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　502g
－17	石錘	完形		長14.2　幅7.9　厚7.3	磨耗痕	床直	硬砂岩　1,050g
－18	石錘	完形		長13.1　幅8.1　厚5.9		床直	花崗岩　805g
－19	石錘	完形		長13.3　幅7.6　厚5.2	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　509g
－20	石錘	完形		長12.5　幅8.0　厚6.3	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　916g
－21	石錘	完形		長11.3　幅8.7　厚3.7		床直	角閃石輝石安山岩　497g
－22	石錘	完形		長13.0　幅8.4　厚5.7	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　928g
－23	石錘	完形		長9.9　幅6.3　厚4.2	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　417g

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大　きさ（cm）	整　形　の　特　徴	出土位置	備　　考
108－24	石錘	完形		長16.8　幅8.9　厚3.5	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　913g
－25	石錘	端部欠？		長14.4　幅7.8　厚6.4	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩(1,023g)
－26	石錘	完形		長9.5　幅5.9　厚4.7	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　426g
－27	石錘	完形		長11.4　幅7.7　厚5.3	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　645g
－28	石錘	完形		長11.8　幅9.6　厚3.8	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　649g
－29	石錘	完形		長12.8　幅8.0　厚4.1	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　610g
－30	石錘	完形		長16.8　幅6.8　厚6.4	磨耗痕	床直	砂岩　1,159g
－31	石錘	完形		長14.6　幅8.5　厚5.9	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　1,088g
109－1	土師器	完形	淡黄	口12.3　高3.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
－2	土師器	1/2残	淡黄	口13.4　高（5.2）　体11.8	〃		内面黒色処理
－3	土師器	口縁部1/3欠	橙	口（11.2）　高4.5　底4.8	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
－4	土師器	口縁部2/3欠	橙	口（10.6）　高5.4　底4.7	口縁部ヨコナデ、ほかはユビナデか？		内面黒色処理？
－5	須恵器	口縁部・脚端欠	灰白		回転ナデ、坏部外面下半回転ヘラケズリ	＋30cm	
－6	須恵器	脚柱1/2・口縁部欠	灰	脚8.8	回転ナデ		
－7	土師器	脚柱1/8・口縁部欠	淡黄	脚（10.6）	口縁部・脚部裾ヨコナデ、体部以下外面ヘラケズリ、体部内面暗文風のタテミガキ		
－8	土師器	1/2残	にぶい黄橙	口18.2　高（9.6）　底（4.5）	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
－9	土師器	脚部完形	赤	台12.0	脚部裾ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	顕著な重弧痕
－10	土師器	胴部以上1/3欠	橙	口12.2　高12.9　底7.6	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	覆土上層	製作者左利き
－11	土師器	胴部中位以上は完形	にぶい黄橙	口13.5	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
110－1	土師器	1/3残	橙	口（12.2）　高（4.9）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ→全面粗いヨコミガキ・内面暗文		
－2	土師器	1/2残	淡黄	口（13.0）　高4.8　底8.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ユビナデ、底部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	＋20cm	やや粗製
－3	土師器	底部完形	にぶい黄橙	底10.1	外面ヘラケズリ、内面ハケ・全面粗いヨコミガキ	床直	
－4	土師器	底部完形	橙	底10.5	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ→外面粗いヨコミガキ	床直	
－5	土師器	胴部中央以下1/2残	黄褐	底7.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	＋4cm	
－6	土師器	胴部中央以下完形	にぶい橙	底5.0	胴部外面ヘラケズリ、底部外面不明、内面ヘラナデ	床直	正立可能だが、全体だと不明やや極端な土器
－7	土師器	胴部以上1/4欠	にぶい橙	口（22.7）　高（39.0）　底6.1	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直～＋20cm	実測図の器高は復数痕低い正立可能
－8	土師器	胴部中央以上1/2残	明褐	口23.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	＋25cm	
－9	土師器	口縁部1/4欠	にぶい赤褐	口14.4　高15.3	〃	＋8～18cm	やや粗製な土器
111－1	土師器	口縁部1/3欠	淡黄	口10.2　高3.8　体9.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理
－2	土師器	口縁部1/4残	褐灰	口（10.2）　体（9.6）	〃		内面黒色処理
－3	須恵器	1/2残	灰	口（12.0）　高4.2	回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ		
－4	土師器	口縁部一部欠	橙	口12.6　高11.3　底4.9	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→底部外面を除きヨコミガキ	＋3cm	橙色土器
－5	土師器	口縁部1/2残	にぶい黄橙	口19.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直～＋10cm	
112－1	土師器	口縁部1/4残	橙	口（19.4）	ハケ→口縁部ヨコナデ→全面ヨコミガキ		赤彩

掲図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備考
112－2	土師器	底部1/4残	明赤褐	底 (3.6)	底部外面を除きハケ→底部・胴部下位ヘラケズリ		搬入品
114－1	土師器	1/2残	橙	□12.7　高4.6　体10.6	□縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面細かなヨコミガキ（粗い）→暗文		全面薄けた黒色処理 内湾口縁坏
－2	土師器	光形	橙	↕11.1　高3.3　体10.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		覆色土器
－3	須恵器	口縁部1/2残	灰白	↕10.4　体12.5	回転ナデ		
－4	須恵器	口縁部1/3残	灰	↕ (8.0)	回転ナデ		
－5	須恵器	口縁部1/3残	灰黄	□ (20.5)	回転ナデ	床直	
－6	土師器	1/3残	明赤褐	□ (11.9)　高 (9.7)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→口縁部内面ヨコミガキ、外面不明		内面黒色処理？
－7	土師器	胴部中央以上1/3残	にぶい黄褐	□ (16.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		やや歪曲な土器
－8	土師器	胴部上半以上1/3残	にぶい黄褐	□21.0	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→ハケ	床直	
－9	土師器	ほぼ完形	橙	□20.1　高33.3　底6.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、底部外面ナデ、胴部内面ヘラナデ	床直	正立可能
－10	礫石？	完形		長10.2　幅4.5　厚2.9	研磨痕	床直	角閃石輝石安山岩　209.96g
115－1	土師器	胴部上半2/3残	橙		全面ハケ→縦文→頸部外面タテミガキ、胴部外面左上ミガキ、頸部内面ヨコミガキ	床直	
－2	土師器	口縁部完形	赤	□8.5	外面タテミガキ、内面ヨコミガキ	床直	赤彩 北陸系か？
116－1	土師器	口縁部1/3欠	黒褐	□12.8　高4.3　体13.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面入念なヨコミガキ	床直	内外面（炭けた？）黒色処理
－2	土師器	胴部中央以上3/4残	橙	□23.1	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	口唇部面取り
117－1	土師器	口縁部1/3残	浅黄橙	□ (14.2)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		
－2	土師器	1/2残	淡黄	□11.6　体10.8	〃	床直	
－3	土師器	口縁部1/6欠	淡黄	□11.2　高3.8　体10.6	〃		
－4	土師器	完形	淡黄	□12.1　高4.5　体11.7	〃	床直	
－5	土師器	口縁部9/10欠	淡黄	□ (12.6)　高4.3　体12.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		
－6	土師器	1/3残	淡黄	□ (13.1)　高5.1　体 (11.2)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→内面粗いヨコミガキ		内湾口縁坏に似るが在地品　内面黒色処理
－7	土師器	ほぼ完形	淡黄	□12.9　高5.6　体12.9	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	＋10cm	飛鳥の模倣
－8	土師器	ほぼ完形	淡黄	□12.2　高4.8　体13.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→内面ヨコミガキ（外面もか？）	床直	飛鳥の模倣
－9	土師器	3/4残	橙	□10.9　高 (4.6)　体10.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		覆色土器
－10	土師器	9/10残	明褐	□14.0　高 (9.3)	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→内面ヨコミガキ	＋8cm	内面黒色処理
－11	土師器	口縁部1/8残	赤	↕ (12.3)　高 (11.2)　底6.0	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		実測図の器高・器形は信頼度低い　内面黒色処理
－12	土師器	ほぼ完形	橙	↕15.6　高9.3	〃	＋4cm	群馬系譜からの搬入品か？
－13	土師器	口縁部2/3欠	淡黄	□ (19.8)　高13.3　底7.2	〃	床直	
－14	土師器	口縁部1/4残	浅黄橙	□ (23.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	＋5cm	
－15	土師器	口縁部1/3残	橙	□ (19.4)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラナデ、胴部内面ハケ→全面ヨコミガキ	＋5cm	
－16	土師器	ほぼ完形	にぶい黄橙	□17.4　高 (37.2)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→胴部外面タテミガキ、ほかはヨコミガキ	床直	
118－17	土師器	ほぼ完形	黄橙	□23.1　高39.3　底4.6	口縁部ヨコナデ、胴部以下外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド構築材？	正立不可能

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
118－18	土師器	口縁部1/2残	浅黄橙	□21.0	〃	+10cm	
－19	土師器	口縁部1/2残	明褐	□17.6	〃		
－20	土師器	口縁部完形	黄橙	円13.4	〃	床直	
－21	土師器	口縁部1/3残	橙	□ (8.4)	〃	+6cm	武蔵型
－22	土師器	口縁部1/2欠	淡黄	⊔10.4　高4.9　底5.5	口縁部ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、底部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	16度上	内面黒色処理 やや稚拙な土師
－23	土師器	脚部欠	黄橙	□7.0	口縁部ヨコナデ、ほかはユビナデ	床直	やや稚拙な土師
－24	刀子	関部のみ					レントゲン撮影
－25	鉄製品	一部のみ					レントゲン撮影
119－1	土師器	胴部上半以上1/2残	橙	□ (18.3)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
120－1	土師器	完形	橙	□12.6　高4.7　底6.9	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	+7cm	内面黒色処理
－2	土師器	完形	橙	□11.8　高4.3　体12.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ	+3cm	
－3	土師器	口縁部1/5欠	明黄褐	□15.6　高6.0　体11.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	+8cm	
－4	土師器	口縁部1/4欠	淡黄	□11.2　高5.2　底6.8	口縁部ヨコナデ、体部以下外面ユビナデ、体部内面ヘラナデ→底部・体部ヘラケズリ→暗文	+3cm	
－5	土師器	底部欠	にぶい黄橙	⊔18.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ→胴部外面以外をヨコミガキ	床直	内面黒色処理
－6	土師器	口縁部1/2欠	灰白	□15.0　高11.6	口縁部ヨコナデ、体部外面以下ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ→全面ヨコミガキ	床直	内面黒色処理
－7	土師器	胴部下半以下1/2残	赤褐	底8.4	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ→外面左上ミガキ	+5cm	
－8	須恵器	口縁部欠	オリーブ灰		回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	+38cm	
－9	土師器	底部完形・口縁部1/4残	にぶい黄橙	円 (24.0)　高 (35.2) 底4.8	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	+30cm	正立不可能　実測図の器形・器高は信頼度低い
－10	土師器	口縁部1/3欠	浅黄橙	円5.6　高4.9　底5.6	内面ヘラナデ→全面ヨコミガキ	覆土上層	焼成前に底部1孔、体部対に2孔を穿孔
121－1	土師器	底部1/3残	にぶい黄橙	底 (18.0)	胴部内面ハケ→全面ミガキ（胴部は内外面ともタテミガキ）	床直	
－2	土師器	底部1/2残	橙	底4.0	体部外面タテミガキ、その他はヨコミガキ		
－3	土師器	底部1/3残	橙	底 (6.6)	胴部外面ハケ→全面ヨコミガキ		
－4	土師器	口縁部1/3残	橙	⊔ (18.0)	口縁部ヨコナデ、内面ヨコミガキ		
－5	土師器	口縁部1/6残	淡黄	□ (20.2)	口縁部ヨコナデ		北陸地方からの搬入品
－6	土製円板	完形	浅黄	長3.0	内外面ハケ		壺の胴部を転用
122－1	須恵器	ほぼ完形	灰	円14.0　高4.3　底5.9　見込5.9	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	転質
－2	須恵器	口縁部1/2欠	灰	□13.8　高4.6　底5.2　見込5.9	〃	カマド内	転質
－3	土師器	口縁部一部欠	にぶい黄橙	□13.6　高4.0　底6.3	回転ナデ、内面粗いミガキ、底部回転糸切り	床直	内面黒色処理
－4	土師器	口縁部1/2欠	橙	円11.7　高6.0　台6.6	回転ナデ、坏部内面ミガキ	+30cm	内面黒色処理？
－5	須恵器	口縁部欠	灰	台9.0	回転ナデ、底部回転糸切り		
－6	土師器	3/4残	橙	円11.9　高11.7　底6.3	回転ナデ、底部回転糸切り→底部外側から胴部下位の外側手持ちヘラケズリ	カマド内	
－7	鉄製品	一部欠				カマド内	8と同一個体か？
－8	鉄製品	一部欠				カマド内	7と同一個体か？
123－1	土師器	胴部以上1/2欠	暗褐	□ (10.7)　高12.8　底4.3	底部外面ユビナデ？、施文→胴部外面下半タテミガキ、内面ヨコミガキ		
124－1	土師器	坏部1/4残	橙	円 (26.2)	全面ヨコミガキ	+15cm	赤彩
－2	土師器	口縁部1/3残	赤	□ (16.2)	全面ヨコミガキ		赤彩

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備考
124－3	土師器	器受部1/4残	にぶい黄橙	□ (9.0)	□縁部ヨコナデ、器受部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		搬入品
－4	土師器	□縁部3/4残	橙	□13.6	施文→外面タテミガキ、内面ヨコミガキ		
－5	土師器	胴部中位以上1/3残	黄橙	□ (20.0)	施文→胴部外面ハケ、内面ヨコミガキ		
－6	土製円板	完形	浅黄	長5.2	外面タテミガキ、内面ヘラナデ 穿孔痕跡なし		盌の胴部を転用
125－1	土師器	口縁部一部欠	浅黄橙	□10.1　高12.0　台7.3	口縁部・胴部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→全面ヨコミガキ	貯蔵穴内	内面黒色処理
－2	土師器	底部完形	にぶい黄橙	底7.5	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ→底部外面を除きヨコミガキ		内面黒色処理か？
－3	土師器	体部上半以上1/3欠	明黄褐	□13.8　高10.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ→全面粗いタテミガキ	貯蔵穴内	
－4	土師器	底部欠	黄橙	□20.6	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	床直	
126－1	土師器	完形	にぶい黄	□13.0　高5.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ	床直	内面黒色処理
－2	土師器	口縁部1/4欠	浅黄	□13.6　高7.5	〃		
－3	土師器	ほぼ完形	浅黄	□13.8　高5.1	口縁部ヨコナデ、体部下半ヘラケズリ、暗文	床直	
－4	土師器	1/2残	明黄褐	□13.6　高6.5	〃		
－5	土師器	脚部上半完形	橙		脚部ヨコナデ、脚部上半ヘラケズリ→胴部外面上半タテミガキ 坏部内面ミガキ	支脚に転用	
－6	土師器	胴部1/3欠	浅黄橙	□13.2　高13.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラミガキ・全面ヨコミガキ	カマド内	
－7	土師器	完形	にぶい黄橙	□16.2　高11.8　底6.4	口縁部ヨコナデ、体部外面以下ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	＋25cm	やや精拙な土器
－8	土師器	口縁部3/4残	にぶい黄	□16.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ→口縁部ヨコミガキ、胴部外面タテミガキ→暗文	床直	
－9	土師器	口縁部ほぼ完形	にぶい黄橙	□18.1	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ・胴部内面を除きヨコミガキ	床直	
－10	土師器	底部完形	にぶい黄橙	底9.0	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ→内面ハケ	床直	この状態で使用した煮沸痕あり
－11	土師器	口縁部3/4残	にぶい黄橙	□21.4	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	＋20cm	やや稚拙な土師
－12	土師器	口縁部1/2欠	にぶい黄橙	□ (20.3)	〃	床直	
127－1	須恵器	ほぼ完形	淡黄	□14.4　高4.3　底7.0　見込6.6	回転ナデ、底部回転糸切り	＋5cm	転質
－2	須恵器	3/4残	灰	□13.3　高3.8　底5.5　見込なし	〃		転質
－3	土師器	3/4残	橙	□18.4　高5.8　底8.2	回転ナデ、内面ミガキ、胴部外面手持ちヘラケズリ	カマド内	内面黒色処理
－4	須恵器	口縁部1/8欠	オリーブ灰	□16.0　高3.4	回転ナデ、天井部回転糸切り→天井部外面一部回転ヘラケズリ	床直	
－5	須恵器	口縁部欠	暗緑灰	台7.4	回転ナデ、底部回転糸切り		
－6	土師器	口縁部1/10欠	浅黄橙	□ (12.2)　高2.1　台5.6	回転ナデ、底部回転糸切り、坏部内面ヨコミガキ		内面黒色処理
－7	土師器	底部完形	橙	底5.0	回転ナデ→胴部下半外面回転ヘラケズリ→胴部下半から底部外面手持ちヘラケズリ	＋15cm	
－8	土師器	体部上1/3残	にぶい橙	□28.2	回転ナデ→体部下半外面回転ヘラケズリ、体部内面ヨコミガキ	カマド内	体部内面黒色処理 火熱
－9	礫石	端部欠					砂岩（664.6g）
128－1	須恵器	口縁部一部残	灰		回転ナデ		施成前のヘラ記号あり
－2	土師器	接合部完形	橙		脚部ヨコナデ、外面ヘラケズリ→胴部内面ヨコミガキ、その他も入るが方向不明	＋20cm	坏部内面黒色処理か？
－3	石錘	完形		長12.6　幅5.6　厚3.6	磨耗痕	＋10～15cm	角閃石輝石安山岩　370g

神関番号	種　類	残　存	色　調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
128－4	石錘	完形		長15.0　幅7.5　厚5.3	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　733g
－5	石錘	完形		長12.7　幅7.2　厚4.8	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　663g
－6	石錘	完形		長12.1　幅7.3　厚5.5	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　772g
－7	石錘	完形		長12.0　幅5.6　厚5.7	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　585g
－8	石錘	完形		長11.9　幅7.9　厚3.6	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　470g
－9	石錘	完形		長10.8　幅7.0　厚4.9	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　462g
－10	石錘	完形		長11.7　幅6.5　厚5.0	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　573g
－11	石錘	完形		長11.2　幅7.9　厚6.4		+10～15cm	角閃石輝石安山岩　691g
－12	石錘	完形		長9.9　幅7.3　厚4.7		+10～15cm	チャート　591g
－13	石錘	完形		長11.5　幅7.0　厚3.1	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　445g
－14	石錘	欠損		長(9.1)　厚(3.0)	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　(223g)
－15	石錘	完形		長11.3　幅9.7　厚4.6	磨耗痕	－10～15cm	チャート　724g
－16	石錘	完形		長14.6　幅7.4　厚4.8	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　702g
－17	石錘	欠損		長13.0　幅8.1　厚(2.0)	磨耗痕	+10～15cm	角閃石輝石安山岩　(307g)
129－1	須恵器	ほぼ完形	灰	口13.2　高4.9　底5.6　見込なし	回転ナデ、底部回転糸切り		転質
－3	須恵器	完形	灰白	口14.1　高3.9　底7.0　見込5.7	〃		転質
－3	須恵器	1/3残	灰	口(14.0)　高4.0　底6.8　見込5.7	〃		転質
－4	須恵器	口縁部1/3欠	灰	口14.0　高4.1　底6.1　見込5.7	〃		転質
－5	土師器	1/2残	にぶい褐	口(16.8)　高5.2　底6.4	回転ナデ、底部回転糸切り→内面ミガキ		内面黒色処理
－6	土師器	口縁部2/3欠	浅黄	口(14.0)　高4.5　底6.7	回転ナデ、底部回転糸切り→内面やや粗いミガキ		内面黒色処理
－7	土師器	口縁部1/10欠	橙	口(13.8)　高4.0　底5.6	〃		内面黒色処理
－8	土師器	口縁部1/4欠	橙	口13.2　高3.6　底6.6	回転ナデ→底部から体部下位外面回転ヘラケズリ、内面ミガキ		内面黒色処理
－9	土師器	口縁部1/3欠	にぶい橙	口13.2　高3.7　底6.5	回転ナデ→底部外面手持ちヘラケズリ、内面不明		内面黒色処理
－10	土師器	2/3残	明褐	口12.9　高4.1　底5.9	回転ナデ→底部から体部下位外面回転ヘラケズリ、内面ミガキ		内面黒色処理
－11	土師器	口縁部2/3欠	にぶい橙	口(17.0)　高5.8　台7.4	回転ナデ、底部回転糸切り→坏部内面ミガキ	カマド内	内面黒色処理
－12	土師器	口縁部2/3・脚台部欠	橙	口(17.0)	〃		内面黒色処理
－13	土師器	口縁部2/3・脚台部欠	にぶい褐	口(15.0)	回転ナデ、底部回転糸切り→坏部内面粗いミガキ		内面黒色処理？ 器面土器ばが全体は不明
－14	土師器	口縁部欠	橙	台8.2	回転ナデ→坏部内面ミガキ		内面黒色処理
－15	土師器	口縁部欠	にぶい褐	台6.6	回転ナデ、底部回転糸切り→坏部内面ミガキ		内面黒色処理
－16	土師器	口縁部欠	黒	台7.7　体10.8	回転ナデ、底部回転糸切り→坏部内外面ヨコミガキ		内外面黒色処理
－17	土師器	1/3残	黒	口(12.4)　高3.0　台6.1	〃		内外面黒色処理
－18	土師器	口縁部1/5・脚台部欠	黒	口11.8	〃		内外面黒色処理
－19	須恵器	口縁部欠	灰	台9.7	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ		焼成悪いが火襷あり
－20	須恵器	口縁部1/8残	灰	口(16.0)	回転ナデ		転質
130－21	土師器	1/2残	橙	口25.8　高11.5　底11.0	回転ナデ→底部から体部外面下位手持ちヘラケズリ、内面ヨコミガキから粗いタテミガキ		内面黒色処理
－22	須恵器	底部完形	オリーブ灰	台11.9	回転ナデ、底部から胴部下位外面回転ヘラケズリ		
－23	土師器	口縁部1/4残	にぶい橙	口(22.8)　胴(23.0)	回転ナデ、胴部外面下半ヘラケズリ		
－24	土師器	胴部以上/5残	橙	口(12.6)　胴(14.4)	〃		
－25	土師器	底部4/5残	明赤	底7.6	回転ナデ、底部回転イトキリ、胴部外面ハケ	カマド内	
－26	土師器	1/2残	明赤褐	口(20.8)　胴22.4　高(25.7)　底4.2	口縁部ヨコナデ、胴部外面以下ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ	カマド内	
－27	土師器	完形	浅黄	口7.7　高4.5　底4.4	全面ユビナデ		種別な土器

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備考
130－28	刀子	身部先端欠					
－29	刀子	茎部先端欠					
－30	石錐	完形		長11.4　幅6.8　厚3.7	磨耗痕	－15～20cm	角閃石輝石安山岩　440g
－31	石錐	完形		長11.3　幅7.9　厚5.2	磨耗痕、縄掛け痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　694g
－32	石錐	完形		長13.1　幅8.8　厚5.4	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　871g
－33	石錐	一部欠？		長15.8　幅（7.9）　厚（4.4）	磨耗痕、縄掛け痕	＋15～20cm	流紋岩（686g）
－34	石錐	完形		長11.7　幅11.5　厚3.3	磨耗痕、縄掛け痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　694g
－35	石錐	完形		長12.7　幅6.4　厚5.5	磨耗痕	＋15～20cm	頁岩砂岩　807g
－36	石錐	完形		長12.2　幅7.2　厚3.9	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　507g
－37	石錐	完形		長14.0　幅7.3　厚5.4	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　804g
－38	石錐	完形		長14.0　幅8.1　厚5.9	磨耗痕、縄掛け痕	－15～20cm	角閃石輝石安山岩　938g
－39	石錐	一部欠		長（8.6）　幅6.7　厚3.9	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　（347g）
－40	石錐	完形		長12.4　幅7.0　厚5.0	磨耗痕	＋15～20cm	頁岩砂岩　662g
－41	石錐	完形		長11.6　幅8.5　厚5.3	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　641g
－42	石錐	完形		長11.4　幅6.3　厚5.0	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　508g
－43	石錐	完形		長13.7　幅9.4　厚4.3	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　856g
－44	石錐	完形		長11.5　幅7.3　厚4.2	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　612g
－45	石錐	完形		長11.6　幅7.7　厚4.1	磨耗痕	＋15～20cm	角閃石輝石安山岩　593g
－46	石錐	完形		長11.2　幅6.5　厚5.2	磨耗痕	－15～20cm	角閃石輝石安山岩　580g
131－1	土師器	1/3残	淡黄	口（12.0）　高（4.0）　体（10.6）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面入念なヨコナデ		内面黒色処理
－2	土師器	完形	淡黄	口10.8　高4.1　体9.9	〃		内面黒色処理
－3	土師器	1/2残	橙	口13.0　体11.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ		橙色土器
－4	土師器	1/2残	橙	口（12.4）　高5.1　体10.9	〃		橙色土器
－5	土師器	1/3残	橙	口（13.2）　高（4.2）　体（11.8）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→暗文		橙色土器
－6	土師器	口縁部欠	淡黄	脚10.4	口縁部・脚端部ヨコナデ、体部かき脚部上半外周ヘラケズリ→脚部外面タテミガキ、体部ヨコミガキ	床直	坏部内面黒色処理
－7	土師器	脚部上半以上1/2残	にぶい黄橙	脚16.2	口縁部ヨコナデ、脚部外面ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ→脚部内面を除き粗いヨコミガキ		
－8	土師器	脚部以上1/2欠	橙	口（17.1）　高19.1　底10.5	口縁部ヨコナデ、脚部外面以下ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ→脚部内面上半を除きヨコミガキ	カマド内	
132－1	土師器	口縁部1/2残	明黄褐	口（13.0）　体12.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、全面ヨコミガキ		内面黒色処理
－2	土師器	口縁部9/10欠	にぶい黄橙	口（12.8）　高5.4	底部回転糸切り→口縁部ヨコナデ、体部外面以下ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理 中や粗組な土器
－3	土師器	口縁部1/3残	橙	口（13.2）	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ→全面ヨコミガキ		
－4	土師器	脚部上半以上1/4残	明褐	口（20.4）	〃	＋8cm	
133－1	須恵器	口縁部欠	黒	底5.2　見込6.0	回転ナデ、底部回転糸切り		焼成悪いが火膨あり
－2	須恵器	口縁部欠	灰	底5.8　見込5.9	〃		軟質
－3	須恵器	口縁部欠	灰白	底6.4　見込7.2	〃		軟質
－4	須恵器	1/4残	暗緑灰	口15.8　高6.5　台（8.6）	〃		
－5	須恵器	底部1/2残	明灰	台7.4	〃		
－6	須恵器	口縁部9/10欠	灰	口（13.0）　高3.8　台8.0	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ		焼成悪いが火膨あり
－7	須恵器	2/3残	オリーブ灰	口16.5　高4.9	回転ナデ、天上部外面回転ヘラケズリ		
－8	土師器	脚部欠	浅黄橙	口11.7	口縁部ヨコナデ→坏部内面ヨコミガキ		内面黒色処理
135－1	土師器	完形	にぶい黄橙	口11.3　高4.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ→全面ヨコミガキ		内面黒色処理

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
135－2	土師器	体部以上3/次	にぶい黄	口21.4　高12.3　底13.0	口縁部ヨコナデ、体部外面以下ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ	＋5cm	内面黒色処理
－3	土師器	胴部中位以上1/2残	明赤褐	口（19.2）	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
－4	土製紡輪	完形	浅黄橙	径4.8　厚3.5	ユビナデ		69.96g
－5	石錘	完形		長10.0　幅6.3　厚3.4	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　261g
－6	石錘	完形		長8.8　幅7.4　厚3.2	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　337g
－7	石錘	完形		長7.7　幅5.9　厚2.9	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　220g
－8	石錘	完形		長8.6　幅5.6　厚2.0	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　172g
－9	石錘	完形		長8.9　幅5.8　厚2.3	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　233g
－10	石錘	完形		長9.5　幅5.9　厚3.4	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　308g
－11	石錘	完形		長9.3　幅5.5　厚3.4	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　318g
－12	石錘	完形		長10.9　幅6.5　厚3.1	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　374g
－13	石錘	完形		長11.1　幅6.5　厚3.1	磨耗痕、縄掛け痕	床直	結核岩　290g
－14	石錘	完形		長13.1　幅6.8　厚2.3	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　300g
－15	石錘	完形		長8.7　幅6.0　厚2.3		床直	角閃石輝石安山岩　168g
－16	石錘	完形		長11.5　幅6.2　厚4.7	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　476g
－17	石錘	完形		長11.8　幅5.1　厚4.6	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　424g
－18	石錘	完形		長11.4　幅6.4　厚2.9	磨耗痕、縄掛け痕	床直	角閃石輝石安山岩　334g
－19	石錘	完形		長10.3　幅5.5　厚3.4		床直	角閃石輝石安山岩　235g
－20	石錘	完形		長9.2　幅4.6　厚3.7	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　259g
－21	石錘	完形		長10.1　幅4.9　厚4.2	磨耗痕	床直	チャート　363g
－22	石錘	完形		長7.0　幅4.7　厚2.2		床直	角閃石輝石安山岩　101g
－23	石錘	完形		長9.3　幅4.5　厚3.1	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　243g
－24	石錘	完形		長9.1　幅4.8　厚4.8		床直	チャート　266g
－25	石錘	完形		長9.2　幅6.2　厚2.9	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　273g
－26	石錘	完形		長10.9　幅5.0　厚3.1		床直	流紋岩　252g
－27	石錘	完形		長13.4　幅7.5　厚4.8	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　642g
－28	石錘	完形		長10.7　幅4.1　厚2.4		床直	角閃石輝石安山岩　210g
－29	石錘	完形		長13.2　幅5.4　厚4.0	磨耗痕	床直	粘板岩　531g
－30	石錘	完形		長11.0　幅6.2　厚2.3	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　283g
－31	石錘	完形		長10.8　幅6.0　厚3.4		床直	チャート　351g
－32	石錘	完形		長13.7　幅5.9　厚4.1	磨耗痕	床直	角閃石輝石安山岩　383g
－33	石錘	完形		長13.1　幅6.9　厚6.6		床直	滑岩（丸山弾）427g
137－1	須恵器	口縁部欠	灰白	体13.6	回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	覆土上層	1号土坑
－2	土師器	体部以下3/4残	明黄褐	体9.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面磨滅		1号土坑 内面黒色処理
－3	鉄・鋤先	完形		長8.5　幅11.9			1号土坑　レントゲン撮影
137－1	須恵器	胴部3/4欠	オリーブ灰	口13.8　高6.2　脚（8.5）	回転ナデ→坏部底部外面回転ヘラケズリ→ヘラ記号	覆土上層	2号土坑
－2	須恵器	体部1/4残	灰		回転ナデ、体部下位以下外面回転ヘラケズリ		2号土坑
146－1	土師器	口縁部1/2欠	明黄褐	口14.3　高4.7　底7.0	回転ナデ、底部回転糸切り→内面ミガキ→暗文	C区	内面黒色処理
－2	土師器	口縁部1/2欠	橙	口16.0　高5.8　台7.9	回転ナデ、底部回転糸切り→坏部内面磨滅	C区	坏部内面黒色処理
－3	須恵器	底部1/2残	オリーブ灰	台10.0	回転ナデ→底部外面回転ヘラケズリ	C区	
－4	土師器	1/3残	にぶい黄橙	口（12.8）　高4.5　底（6.7）	回転ナデ、底部回転糸切り→内面ミガキ	D区	内面黒色処理
－5	土師器	底部完形	淡黄	台8.1	回転ナデ、底部回転糸切り→内面磨滅	D区	坏部内面黒色処理
－6	須恵器	口縁部1/3残	黒褐	口（42.0）	回転ナデ	D区	
－7	土師器	1/2残	淡黄	口13.7　高4.1　底6.0	回転ナデ、底部回転糸切り→内面ミガキ	E区	内面黒色処理

第14章　中平・田中島遺跡

第１節　遺跡の概観

北佐久郡浅科村大字御馬寄地籍に所在する。千曲川西岸に位置し、一般には蓼科山北麓に群がる遺跡のひとつとして数えられる。ここでは千曲川による段階的な河岸段丘が発達し、現状では4段からなる段丘が形成されている。この第2・3段丘面が調査の対象となったが、村教育委員会では第2段丘面を中平遺跡、第3段丘面を田中島遺跡として別個にしている。

この遺跡は、第13章に掲載した砂原遺跡の対岸に当たり、同じように第3段丘面には中山道が走り、また北方1km強には古東山道の渡河地点が存在したと考えられている。遺跡から外れた所だが、取り分け、交通面では重要な場所であった。また、「御馬寄」という地籍に位置するため、著名な「望月牧」の良馬選考地として活躍したことがうかがえる。ただし、これまで調査されたことはない。

第２節　調査の概要

平成5年度に第1次調査として約1,000㎡、平成6年度に第2次調査として約6,200㎡を調査した。

平成5年度には、千曲川橋梁橋台工事が最優先となり、第2段丘の東縁部が調査の対象になった。11月2日から開始したが、古墳時代前期の竪穴住居跡2棟、土坑１基を検出し、11月19日に終了した。

平成6年度は、5月9日から表土剝ぎを開始し、5月25日には作業員を投入して本格的な調査に入った。第3段丘面には、古墳時代前期の集落と方形周溝墓群が見つかり、併せて10世紀以降の平安時代集落も分布していた。第4段丘沿いには谷が走り、また北寄りの所は流出が激しく、古代の遺構も一部剝ぎ取られていた。縄文時代前期から後期の遺物もわずかに認められたが、そもそも包含層と呼べるような土壌が一切なく、すべて下部に流出したものと思われる。第2段丘には、上段から崩落した遺物包含層が認められ、多数の遺物が採集できた。併せて平安時代の竪穴住居跡を1棟確認した。9月28日に、すべての作業が終了した。

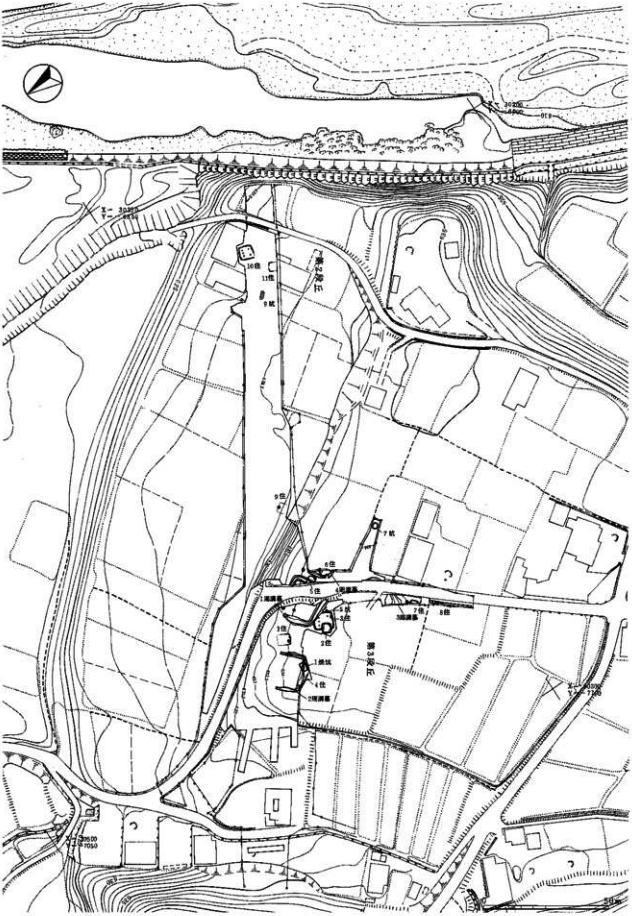
調査日誌抄

平成5年度

11月 2日　第2段丘東端部の表土剝ぎに着手。
11月 5日　作業員を投入。
11月19日　第1次調査終了。

平成6年度

5月 9日　表土剝ぎに着手。
5月20日　表土剝ぎ作業終了。
5月25日　調査に着手。
6月21日　作業中断。砂原遺跡に移動。
6月27日　作業再開。
7月11日　作業中断。砂原遺跡に移動。
8月21日　砂原遺跡とともに、現地説明会を実施。見学者101名。
8月29日　作業再開。
9月28日　第2次調査終了。


第4号住
第3号住
第2号住
1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
8住
9住
10住
11住
1掘立
2掘立
3掘立
4掘立
1竪穴
2竪穴
3竪穴
4竪穴
1陥穴
2陥穴
3陥穴
4陥穴
5陥穴
6陥穴
7陥穴
8陥穴
9陥穴
10陥穴
11陥穴
1土坑
2土坑
3土坑
4土坑
5土坑
6土坑
7土坑
8土坑
9土坑
10土坑
11土坑
1焼土
2焼土
3焼土
4焼土
5焼土
6焼土
7焼土
8焼土
9焼土
10焼土
11焼土
1溝
2溝
3溝
4溝
5溝
6溝
7溝
8溝
9溝
10溝
11溝
1ピット
2ピット
3ピット
4ピット
5ピット
6ピット
7ピット
8ピット
9ピット
10ピット
11ピット
1柱穴
2柱穴
3柱穴
4柱穴
5柱穴
6柱穴
7柱穴
8柱穴
9柱穴
10柱穴
11柱穴
1石敷
2石敷
3石敷
4石敷
5石敷
6石敷
7石敷
8石敷
9石敷
10石敷
11石敷
1埋甕
2埋甕
3埋甕
4埋甕
5埋甕
6埋甕
7埋甕
8埋甕
9埋甕
10埋甕
11埋甕
1墓
2墓
3墓
4墓
5墓
6墓
7墓
8墓
9墓
10墓
11墓
1井戸
2井戸
3井戸
4井戸
5井戸
6井戸
7井戸
8井戸
9井戸
10井戸
11井戸
1不明
2不明
3不明
4不明
5不明
6不明
7不明
8不明
9不明
10不明
11不明

第149図　遺構配置

第3節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺物

これらは、ほとんどのものが第2段丘面の第3段丘寄り幅10m前後から出土している。灰褐色シルト質を地山層と考えているが、その直上に溜まった黒色土中に包含されていた。この黒色土も幅10m程に限られ、第3段丘寄りに行けば行くほど層厚が増し、遺物の出方も多くなっている。ただし、土器でみれば層位的な所が一切なく、時期毎に拾えるようなことはなかった。また、第2段丘面にはこれ以外の遺物がなく、逆に第3段丘面にはわずかながら遺物が認められており、明らかに上段のものが下段に転落したものと考えられる。第3段丘面には、本来集落が存在したのであろうが、土砂の流出が激しく、現状では何もわかっていない。

(1)　土器（第150～156図、ＰＬ77～81）

縄文時代前期末葉（1～15）

1～7は櫛歯状工具による条線を地文とし、ボタン状突起や貝殻状突起を貼付する。1には焼成後の穿孔（補修孔）がある。8～11は半截竹管状工具？による平行２本条線を地文とし、貼付された細かい浮線の上を半截竹管状工具により連続刺突したもの（結節状浮線文）。12は8～11の地の条線文に似る。ゆるやかな波状の突起があり、その先端を刻む。13は外面全面が単節の縄文ＲＬによる横位回転で、口唇を粗く刻む。14は単節の縄文ＲＬによる横位回転。指頭による圧痕を上下交互に施された隆帯が貼付される。圧痕には微かに爪形の痕跡が見られる。15は半截竹管状工具による沈線文が施されるやや小形の土器。

縄文時代中期後葉（16～106）

縄文時代中期後葉の土器は、まずその大半を占める深鉢形土器を時期ないしは系統で大別し、深鉢形土器以外の器種や系統の不明確な土器は、最後に「その他の土器」として一括した。

縄文時代中期後葉１期（16～44）

16・17は口縁部を内湾する無文の口縁部。18は口縁部の把手。19～21は縦位の条線文を地文とし、さらに隆帯で懸垂文を描く。22～25は口縁部から頸部にかけて縦位ないしは斜位の条線文を地文として「ソーメン」状の浮線文が施される。22と25は混和材にとくに目立った鉱物はないが、胎土は全体に白っぽく軟質である。26～35は隆帯で区画文ないしは懸垂文を施した後、綾杉状などの斜行沈線文で充塡している。28・30～35は並行した隆帯間に刺突が施される。36・37は胴部の屈曲部に隆帯で渦巻を描く。38～44は地文に単節の縄文を横位回転した後に、区画文や懸垂文を施す。43・44は隆帯の上を浅く刻んでいる。

16～44は勝坂式（～井戸尻式）の範疇以降、加曽利ＥⅢ式以前（神奈川考古同人会1980）であろう。16～25は縦位の比較的細密な条線を地文として懸垂文を描いておりやや古手（曽利Ⅰ式期）、26～41は綾杉状の沈線文を充塡、ないしは単節縄文（横位回転）を地文とし、隆帯で懸垂文などを施している。この中ではやや新手（曽利Ⅱ式）の段階と考えた。18の突起もこの時期に下る可能性があるか。

縄文時代中期後葉２期（45～81）

45～58は口縁部を幅広の低い隆帯風に作りだして区画した後、縦位ないしは斜位沈線で充塡し、最後に隆帯の脇をなぞるように沈線で区画したもの。49のようにやや湾曲した魚鱗様の沈線文（鱗状短沈線文）で充塡するものもある。

59～81は、47～58に対応する胴部。64・73・76～81のように縦位に沈線を施して、綾杉文などの斜行沈

線を充塡するもの、60～63・65～67・70～72のような連続した円弧を描き、鱗状短沈線文で充塡するものや、61・69のような蛇行した沈線文を多用するものがある。

これらはいずれも口縁部文様帯に区画文を持ち、胴部に沈線文による縦位の区画が存在している点は、いずれも加曽利ＥⅢ式の文様構成に対応するもので、時間的な位置づけもほぼ同時期に位置づけられよう。また49・60～72のような鱗状短沈線文は望月町下吹上遺跡（福島・森嶋1978）などに見られる佐久地方に多いタイプという（百瀬1991）。

縄文時代中期後葉の加曽利Ｅ式系土器（82～94）

82・83は口縁部の区画内を斜行沈線文で充塡する。82は頸部が無文で、胴部は単節の縄文ＲＬを横位回転する。83は頸部に単節の縄文ＬＲを横位回転している。84～87は口縁部を隆帯で区画し、その中を縄文で充塡している。88も同様な意匠を描くものと考えられる。90は胴部を沈線で縦位で区画し、さらに上下２段の「Ｕ」字状の区画文を描く。91は中空の突起を口縁部に有するもの。89・92～94は口縁部文様帯を喪失したもの。

82・83は屈曲が著しく、頸部を作出する。82の頸部は無文である。おおよそ加曽利ＥⅡ式に並行する時期のものだろう。84～88は口縁部が区画文と渦巻文で構成されていて加曽利ＥⅢ式。89・90・92～94は口縁部文様帯を喪失した時期で、加曽利ＥⅣ式のやや古い時期か。94は縦位の結節縄文が施文され、下伊那地方に多い土器に似る（神村1978）。

縄文時代中期後葉のその他の土器（95～107）

95・96は刻み目をもつ隆帯を縦位に区画し、その間を波状の櫛歯状工具による条線で充塡されるもの。加曽利Ｅ式系の土器に伴う土器か。97は半截竹管状工具による平行２本沈線文が施される。この折り返したような意匠のものは管見では知らないが、混和材に軟質の円形褐色粒子や黒色で光沢のある長方形の自形を呈した鉱物（角閃石？）を多く含み、胎土自体は全体に黄白色を呈する点は、いわゆる「佐久タイプ」の鱗状短沈線文土器や圧痕隆帯文土器の混和材や胎土の特徴と共通するものなので、当該期の在地の土器か。98・99は口縁にほぼ並行する隆帯状を粗大に刻んだ土器（圧痕隆帯文土器）（綿田1988）で加曽利ＥⅣ式期か。100～102は櫛歯状工具による縦位の条線が密接して施された土器。

103：104は浅鉢形土器。103は内外面とも丁寧にナデられていて、堅緻。口縁が若干肥厚する。104は口縁部が折り返しの二重口縁様に肥厚し、内面には断面三角形の隆帯を作出する。胴部は単節の縄文ＲＬを縦位に密接回転される。

105・107は内外面ともに口唇部直下に隆帯を貼付ないしは作出し、とくに外面は隆帯の上方に刺突文を有する。106は隆帯の下方に刺突するもの。

縄文時代後期前葉（108・109）

108は平行2本沈線文が施された土器。称名寺式から堀之内Ｉ式期。109は頸部屈曲部に円弧の中心を刺突し、さらに両脇を刺突した単位文様をもつ土器。堀之内Ｉ式期。

小　結

前期から後期にかけての土器が中平・田中島遺跡から出土しているが、決して間断なく継続しているというよりは、ある特定の時期に遺物が集中しているようである。

まず前期末の資料がまとまっている。厳密にみれば諸磯ｃ式の古新を含んでいるかもしれないが、時間的な幅としては諸磯ｃ式（下島式）に大半が収まると考えた。

1～7は諸磯ｃ式、8～11は下島式、12～15も前期末に位置づけられる。結節状浮線文土器を皆新しい時期と考える見方もあるが、この手の結節状浮線文は中部高地では諸磯ｃ式と伴出する例も少なくなく、ほ

ぼ同時期の所産と考えた（赤塩・三上1994）。14は新潟県柿崎町鍋屋町遺跡などの前期末の遺跡で出土している（寺崎1993）ほか、東部町真行寺遺跡群にも略完形土器が出土していて前期末に位置づけられている（長野県埋蔵文化財センター1995）。

中期は、いわゆる勝坂式の範疇のものはなく、八ヶ岳編年の井戸尻式以降で、後葉の曽利式ないし加曽利E式の時間幅にほぼ収まるものばかりである。一部後期前葉に下るものがある。

この遺跡の中期後葉の様相は、千曲川中・上流域（いわゆる東信地方）の様相をほぼ的確に示していると考えられる。頸部文様帯がなく、磨消縄文をもつ加曽利E式の新手（神奈川編年のEⅢ式）以前と以後でかなり様相がかわる（本稿では前者を中期後葉1期、後者を2期とした）。つまり加曽利E式の古手（1期）の当初は、八ヶ岳西南麓の影響を少なからず受けた曽利Ⅰ式系統の土器が存在し、その後は唐草文土器を主体とする時期が存在するようである。この時期に加曽利EⅡ式の影響を受けた土器が多少搬入されるようではあるが、在地の土器に文様構成などでは大きな影響を与えていないようである。

中期後葉2期（加曽利EⅢ式以降）が本遺跡の縄文土器資料の大半を占める。従来唐草文系土器と呼称されたが、近年はとくに鱗状短沈線文土器を「佐久タイプ」の土器などとも呼ばれる資料である。たしかに沈線や区画隆帯の区画内を斜行沈線で充塡する手法は、加曽利EⅢ式以前の唐草文土器に多い手法である。しかしながら口縁部文様帯は横長に展開する区画文と、さらに区画文と区画文の間に渦巻文を配する（45～56）。胴部文様帯も一見不規則な楕円の区画文が多いが、これも基本的には縦位に大きく区画されている（60・70・76～81）。これらの特徴から、この土器群を何と呼称するかは別にして、加曽利E式の文様構成の影響を受けていることは否定できないことであろう。また沈線で区画文内を充塡するこれらの土器もしばし、一部に縄文が用いられることがあるほか50、東信地方では逆に加曽利E式とほとんど同じ文様構成をとり、区画文のほとんどが縄文で充塡されているのに、部分的に沈線文で充塡する区画文を持つ土器の存在が知られており（岩佐1967）、この時期の区画文内の沈線文は縄文と置換される文様かもしれない。いずれにせよ加曽利E式そのものではないにしろ、その影響を土器編年上認めないわけにはいかないだろう（山形1996）。さらに口縁部文様帯を消失した段階には、いわゆる曽利V式などと呼称される縦位の沈線区画文内を矢羽根状沈線で充塡するタイプの土器は見られないかわりに、加曽利EⅣ式が主体的に存在しているようだ。

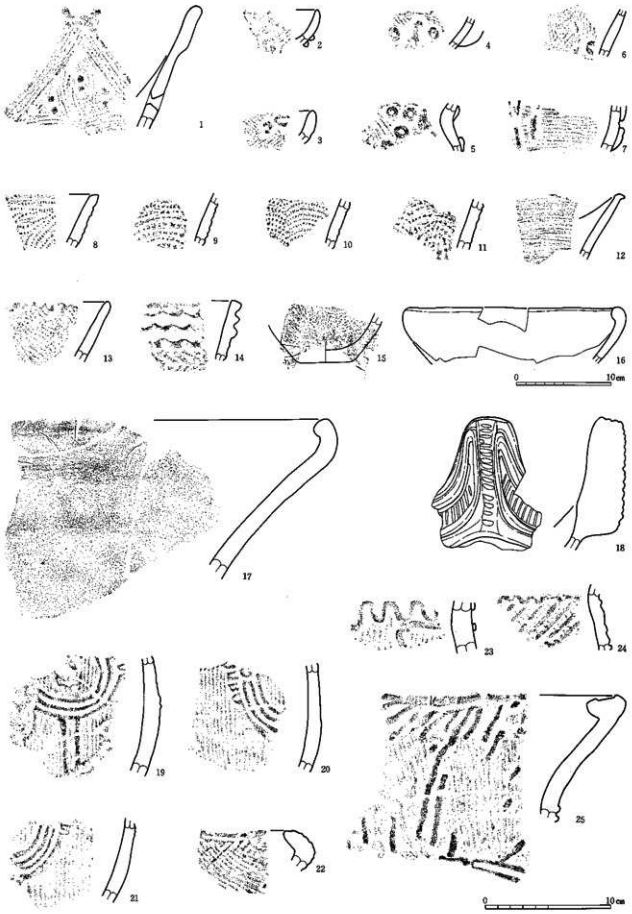
以上、中平・田中島遺跡の縄文土器資料を概観したが、本資料は佐久地方をはじめとする東信地方の様相を端的に示す資料と言えよう。

(2)　石器（第157～161図、PL82・83）

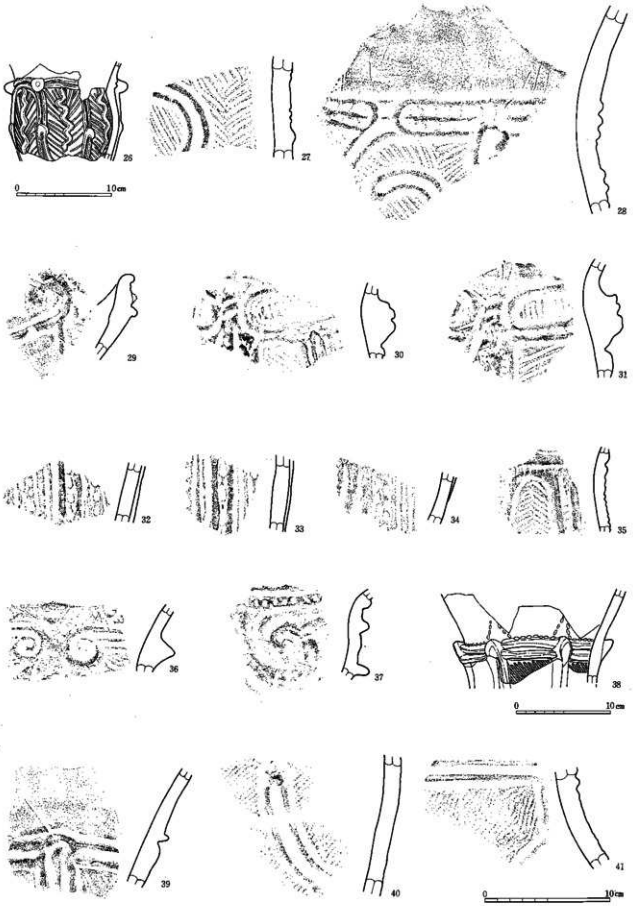
1～12が石鏃、13が石錐、14がピエス・エスキーユ、15～21が小剥離痕を有する剥片、22が各所に磨り面をもつもの、23・24は大形剥片石器、25が正体不明、26・27が磨製石斧、28～72が打製石斧、73が打製石斧の未製品か、74～84が磨石・凹み石、85が敲石、86・87が多孔石、88がいわゆる丸石である。

石鏃は約8割、小剥離痕を有する剥片は約7割、打製石斧・磨石・凹み石などは全体の55割程度を実測し、それ以外はすべて載せてある。

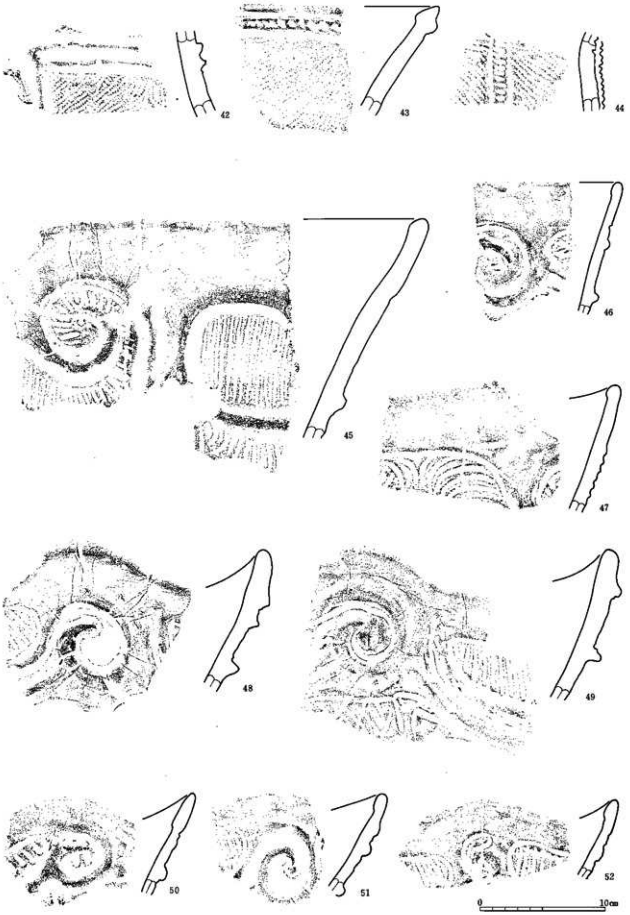
遺構外ないしは古代の遺構から出土したものである。



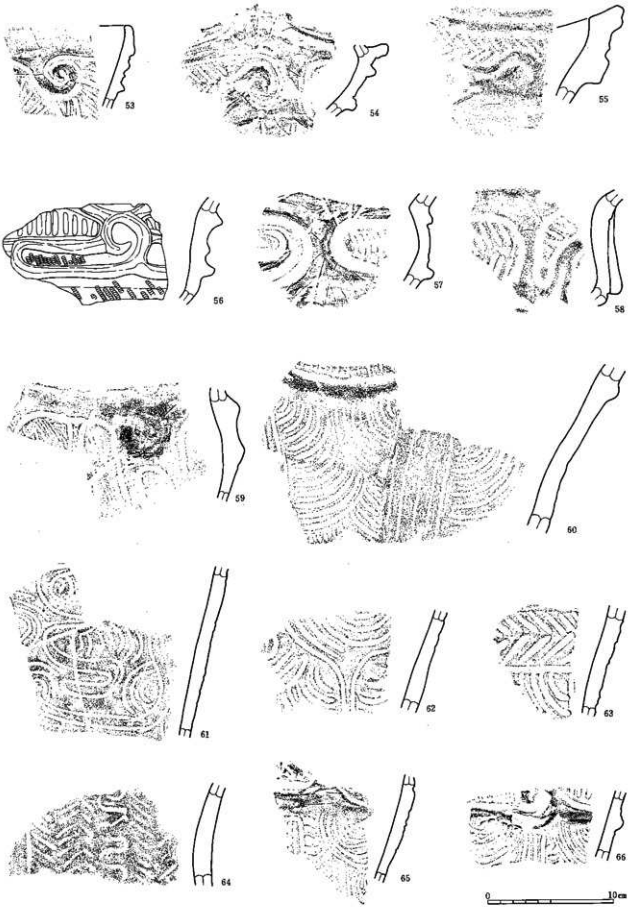
第150図　遺構外出土土器(1)



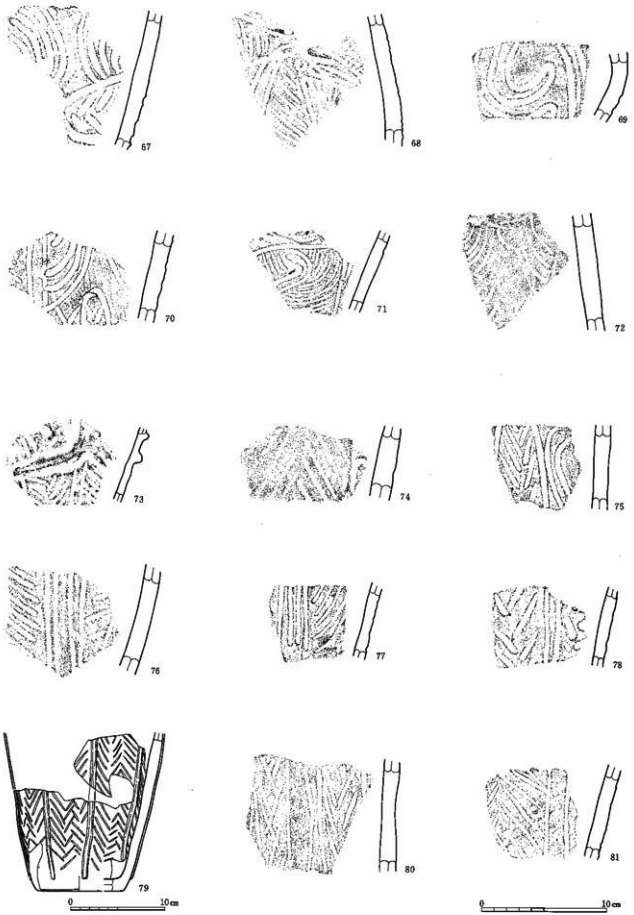
第151図　遺構外出土土器(2)



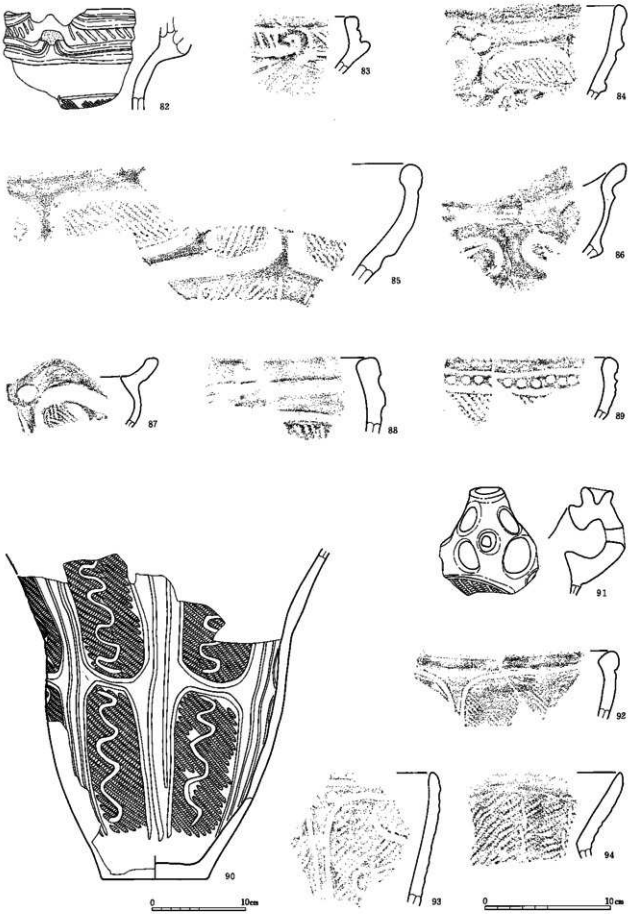
第152図　遺構外出土土器(3)



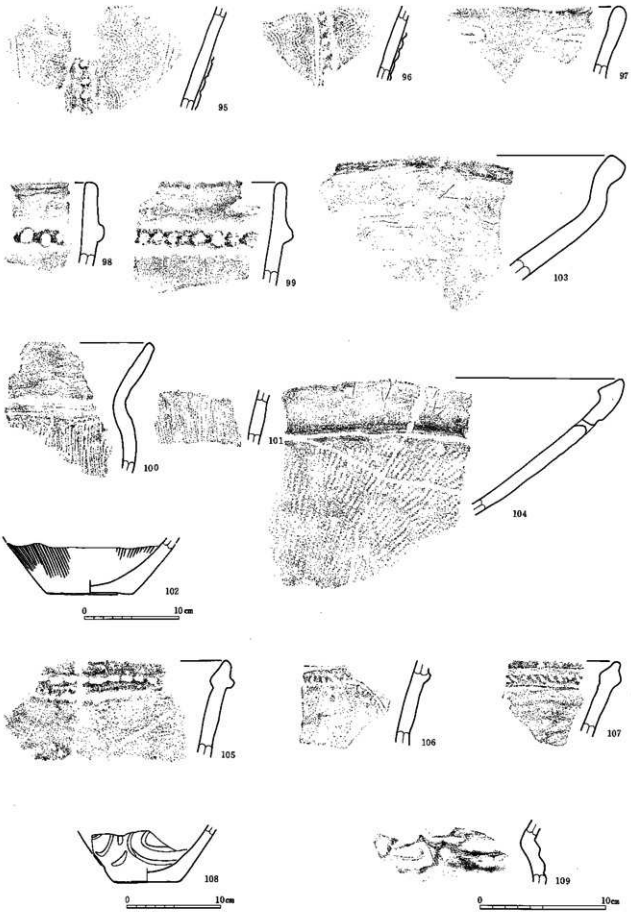
第153図　遺構外出土土器(4)



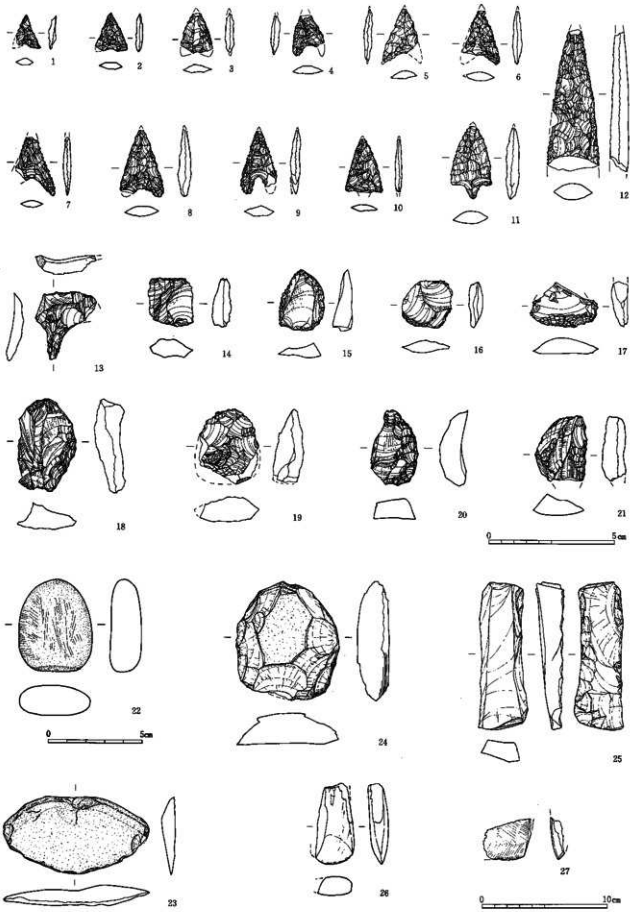
第154図　遺構外出土土器(5)



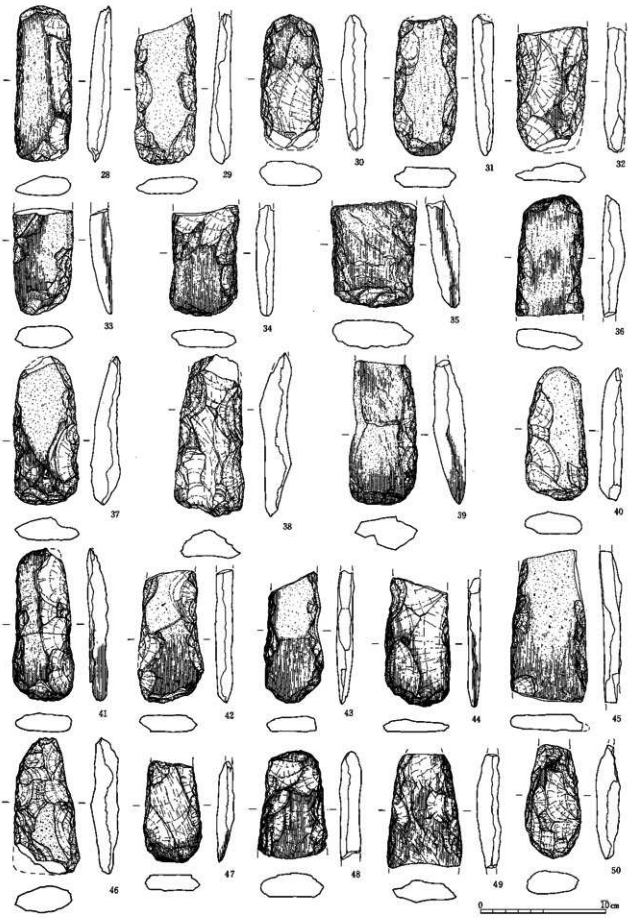
第155図　遺構外出土土器(6)



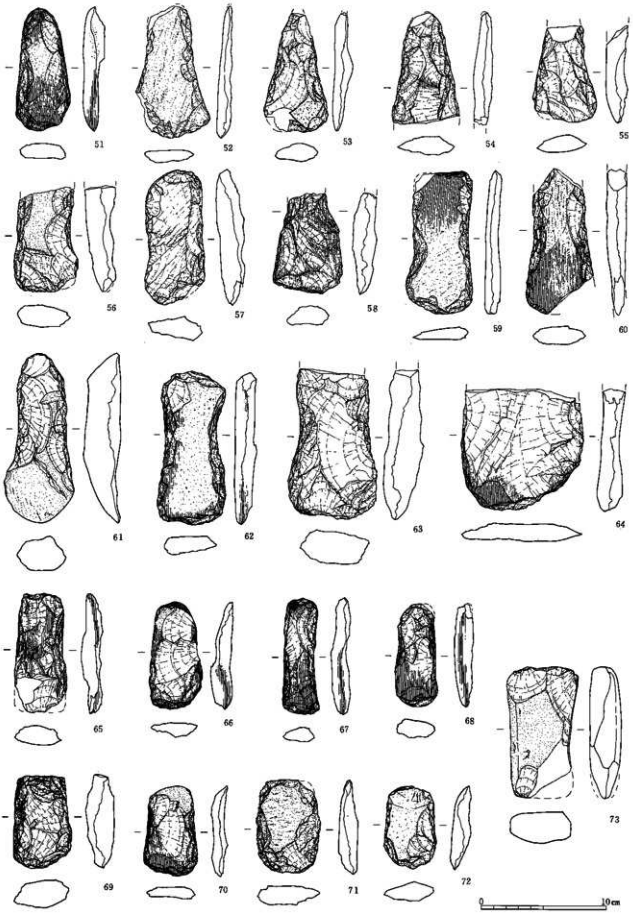
第156図　遺構外出土土器(7)



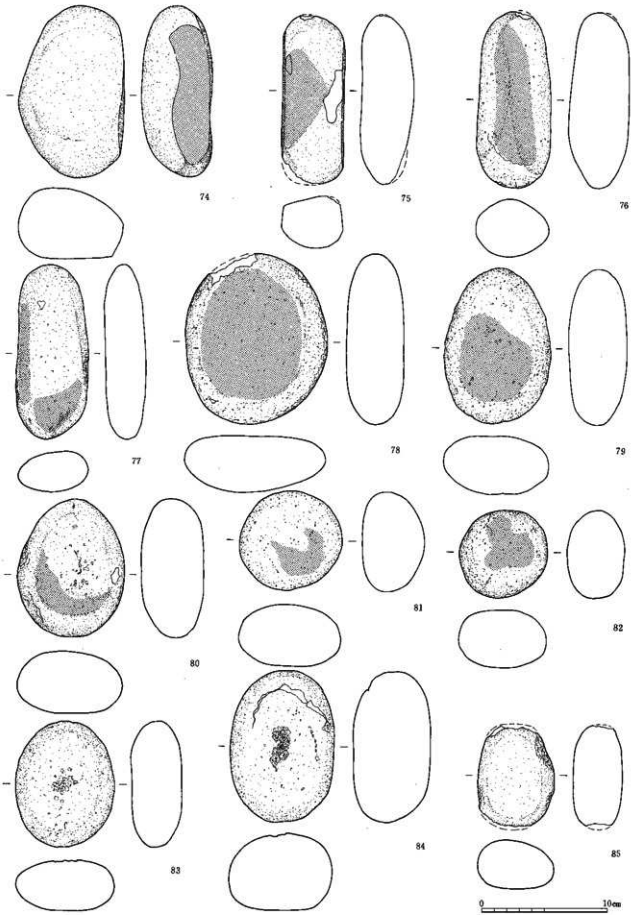
第157図　遺構外出土石器(1)



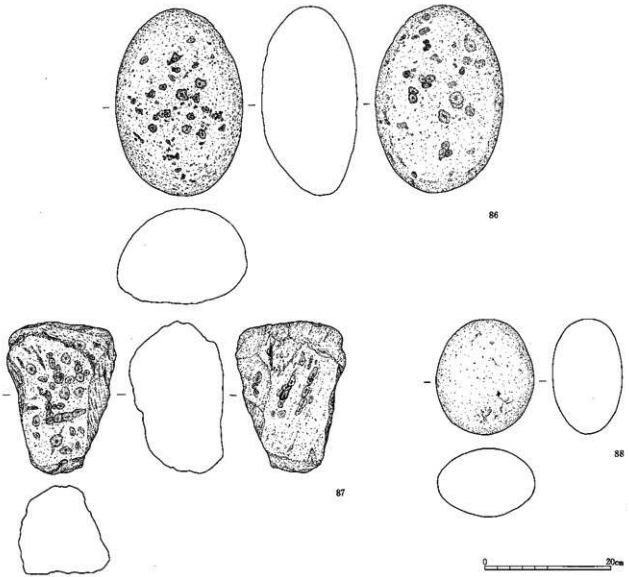
第158図　遺構外出土石器(2)



第159図　遺構外出土石器(3)



第160図　遺構外出土石器(4)



第161図　遺構外出土石器(5)

引用参考文献

赤塩　仁・三上徹也　1993 「中部高地における縄文前期末葉土器群の編年」『前期終末の諸様相』　縄文セミナーの会

赤塩　仁・三上徹也　1994 「下島式・晴ケ峯式の再提唱とその意義」『中部高地の考古学』Ⅳ

岩佐今朝人　1967 「小県郡東部町中原遺跡出土の人骨を覆う土器」『信濃考古』21

神村　透　1978 「結節縄文土器をつけた一群の土器－飯田地方縄文中期終末－」『中部高地の考古学』

神奈川考古同人会　1980 「縄文時代中期後半の諸問題－とくに加曽利E式と曽利式土器との関係について－」『神奈川考古』10

㈶長野県埋蔵文化財センター　1995 「真行寺遺跡群」『長野県埋蔵文化財センター年報』11

福島邦男・森嶋　稔　1978 『下吹上』　長野県考古学会

百瀬忠幸　1991 「吹付遺跡」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書２－佐久市内その２－』　㈶長野県埋蔵文化財センター

山形真理子　1996 「曽利式土器の研究（上）－内的展開と外的交渉の歴史－」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』14

綿田弘実　1988 「北信濃における縄文中期後葉土器群の概観」『長野県埋蔵文化財センター紀要』２　㈶長野県埋蔵文化財センター

2　古代の遺構と遺物

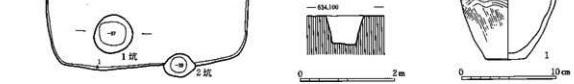
(1)　竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第162図、ＰＬ84）

20cm程の表土剝ぎを行うとすぐ地山層となるところだが、土砂の流出が進行し、ここでは住居跡北半が失われていた。最も標高が高い南側でも、6～7cmの壁高しか残っていない。

住居内には、ふたつの土坑が見られる。ともにデータを出しておいたが、おそらく本跡とは関連しないものであろう。掘方はない。

古墳時代前期初頭の時期である。



第162図　1号竪穴住居跡

2号竪穴住居跡（第163図、ＰＬ74・84）

3号竪穴住居跡と切り合い、本跡の方が新しい。ただし、床面は3号竪穴住居跡に等しい。

覆土は3層に別れているが、いずれも純粋な細砂土からなっており、とくに記すことはない。一応、自然埋没と考えておきたい。

カマドは、3号竪穴住居跡内に築かれているため、充分には把握されていない。煙道部も図化されているが、これは確かな情報ではない。礫はすべて安山岩系統である。カマド先端部は崩壊しているようだが、住居右隅にある安山岩系統の礫も火熱を受けているので、おそらくこれが先端部に置かれたものであろう。ただし、若干床から浮いている。掘方はない。

出土遺物から、平安時代、10世紀前葉の時期と考えられる。なお、いわゆる「武蔵甕」、あるいは須恵器精製の土器は一切出土していない。

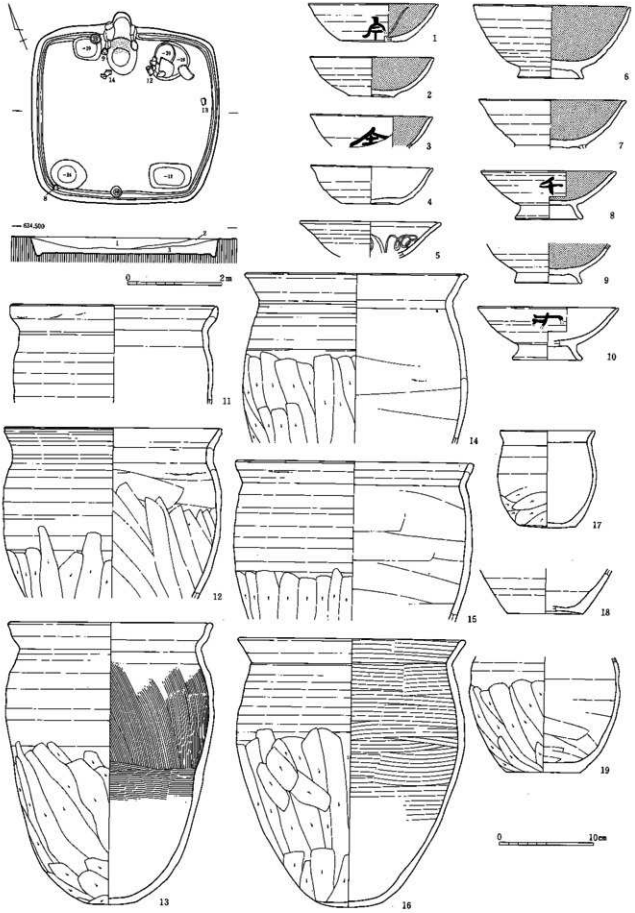
3号竪穴住居跡（第164～166図、ＰＬ74・85・86）

2号竪穴住居跡・1号方形周溝墓と切り合い、本跡の方がより古い。

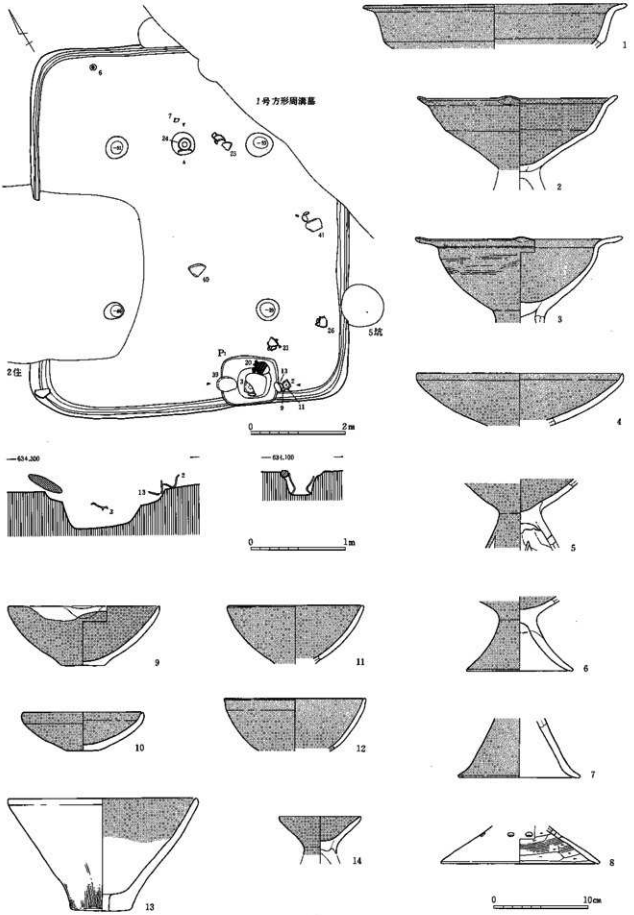
炉は、24を逆位に埋め込み炉体土器とし、住居手前には枕石を置いている。P_1は、「貯蔵穴」と呼ばれるものである。掘方は認められない。

39～41は、床面から出土した安山岩系統の礫である。すべて偏平なものを使用し、本来何かの使用目的があったのであろうが、使用痕は確認されていない。なおP_1から、30～32・34～36の礫群が出土している。ただし、出土状況はわかっていない。

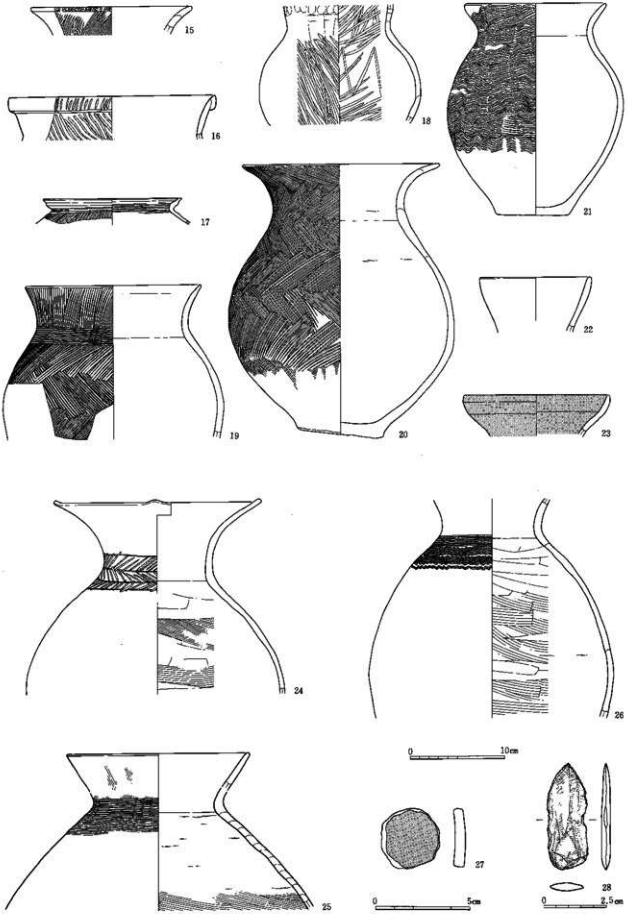
古墳時代前期初頭の所産である。8・14・17・18・22などは、明らかに外来系土器群であるが、8は在地の人間が作ったもの、17・22は在地の胎土ではないけれども伊勢湾沿岸とは異なるもの、18はおそらく群馬側からの搬入品と考えている。



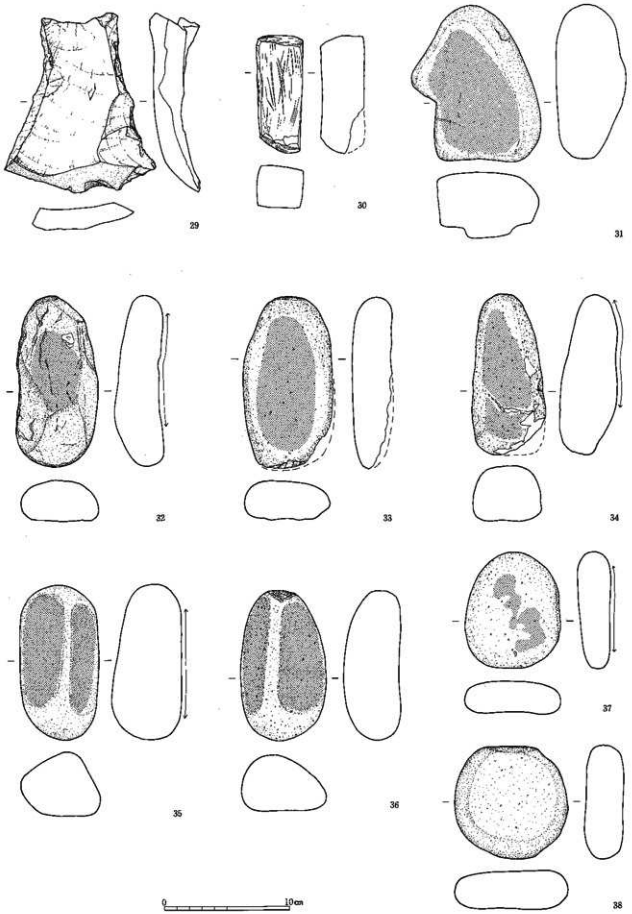
第163図　2号竪穴住居跡



第164図　３号竪穴住居跡(1)



第165図　3号竪穴住居跡(2)

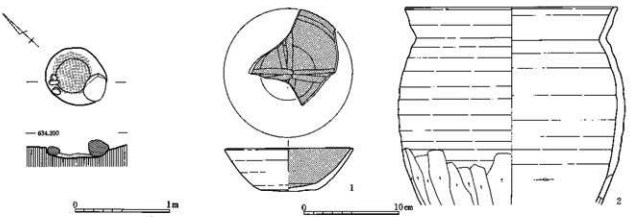


第166図　3号竪穴住居跡(3)

4号竪穴住居跡（第167図）

2号方形周溝墓の覆土最上層に認められたカマド煙床部である。掘り込みが浅く、ほかの構造についてはわかっていない。

カマド内から出土した土器から、平安時代、10世紀前葉の所産と考えられる。



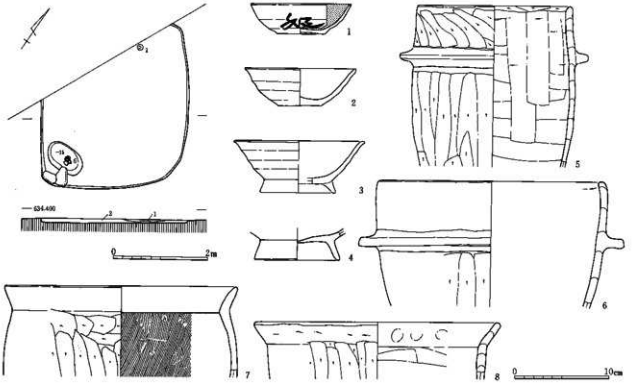
第167図　4号竪穴住居跡

5号竪穴住居跡（第168図、ＰＬ86）

1号方形周溝墓と切り合い、本跡の方が新しい。

覆土は、1層が焼土粒および炭化物層、2層が暗褐色細砂土である。1層については範囲が狭く、ここで何か焼かれたのか、それとも捨てられたのか良くわからない。

南隅には、カマドの残骸が残っている。僅かながら焼土粒と炭化物が認められ、またその外側にはカマド石の一部と思われるものが崩壊していた。掘方はない。平安時代、10世紀中葉の所産と考えられる。



第168図　5号竪穴住居跡

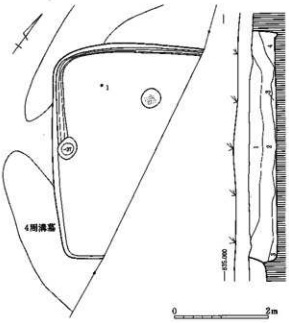
6号竪穴住居跡（第169図）

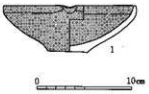
4号方形周溝墓と重複し、本跡の方がより古い。

覆土は、1層が暗褐色細砂土、ほかが黒色土と黄褐色土のブロック層である。

北辺には炉跡が認められれる。方形プランが考えられようか。掘方はない。

古墳時代前期初頭の時期である。





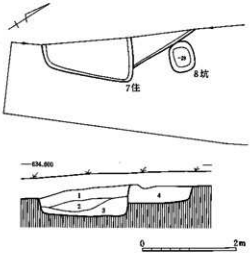
第169図　6号竪穴住居跡

7号竪穴住居跡（第170図）

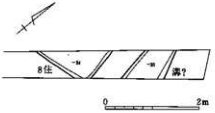
南北長が2m弱となり、竪穴住居跡ではないかもしれない。出土した遺物は一切なく、時期も不明である。北側には別の遺構が存在し、これを切って造られているが、これにも出土遺物はなかった。

8号竪穴住居跡（第171図）

南東コーナーを調査しただけで、住居跡かどうかは確認されていない。遺物も、破片すら認められていない。



第170図　7号竪穴住居跡

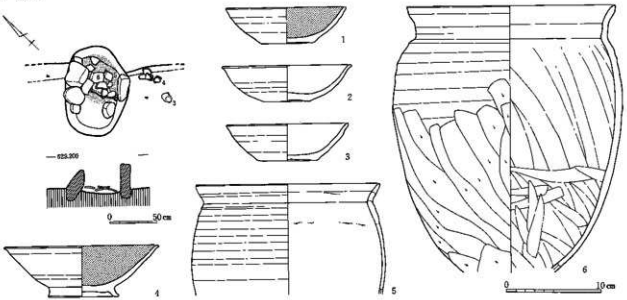


第171図　8号竪穴住居跡

9号竪穴住居跡（第172図、ＰＬ86）

縄文時代の遺物包含層を調査した際に発見されたものである。黒色土中に認められ、残念ながらカマド以外のものは確認できなかった。

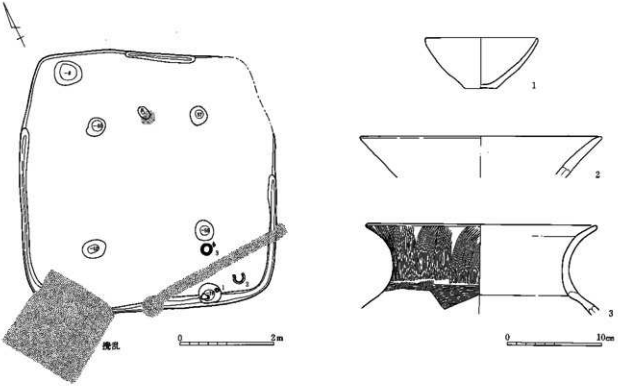
平安時代、10世紀前葉の時期である。なお、須恵器精製の土器群、いわゆる「武蔵甕」は一切出土していない。



第172図　9号竪穴住居跡

10号竪穴住居跡（第173図、ＰＬ74・86）

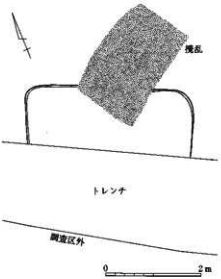
炉の痕跡が住居北側に認められる。南東隅にある土坑は、いわゆる「貯蔵穴」と呼ばれるものだろう。掘方はない。古墳時代前期初頭の時期である。



第173図　10号竪穴住居跡

11号竪穴住居跡（第174図）

住居南側をトレンチで切ってしまった。住居内には何もなく、まだ遺物も一切拾えていない。時期不明の遺構である。



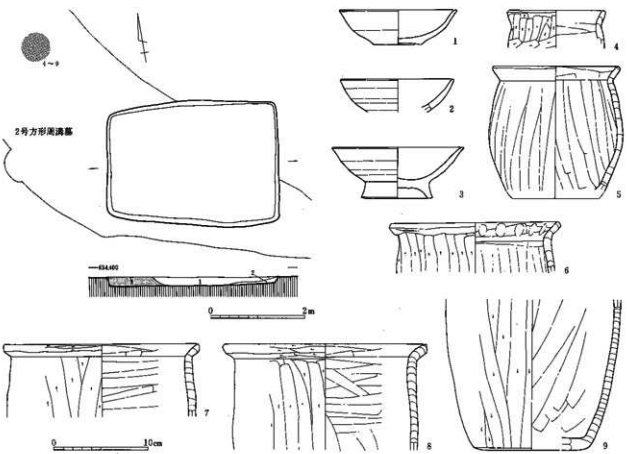
第174図　11号竪穴住居跡

(2)　土師器焼成坑

1号土師器焼成坑（第175図）

2号方形周溝墓と切り合い、本跡の方が新しい。

覆土は3層に分かれるが、その内の第3層が炭化物を多量に含んでいた。ただし、焼土はほとんど見えず、



第175図　1号土師器焼成坑

また焼土化した範囲も認められなかった。ただし、これと併せて基本形が台形となるところから、土師器焼成坑として認定した。

1～3が本跡から出土し、平安時代、10世紀中葉の所産と考えられる。ただ、これを焼いたのかどうかはわからない。4～9は、2号方形周溝墓の覆土最上層の位置から出ているが、いずれも焼成をミスした破損品ばかりであり、おそらく本跡と関連があるのだろう。

(3) 土　坑（第176図）

唯一、時期が判明した5号土坑、比較的大形の7・9号土坑のみを取り扱いたい。

5号土坑

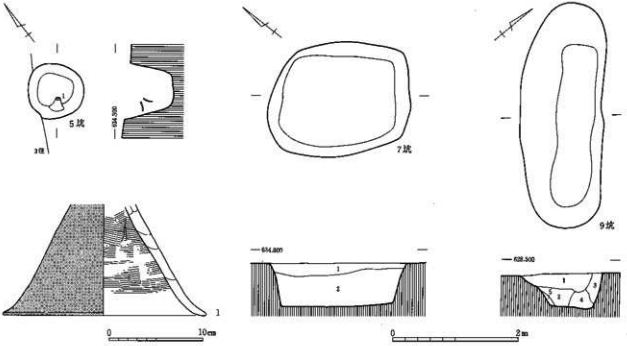
3号竪穴住居跡と一部切り合うが、新旧関係は不明である。内部には古墳時代前期初頭の土器群が出土しており、取り分け高坏の脚部が完存していた。

7号土坑

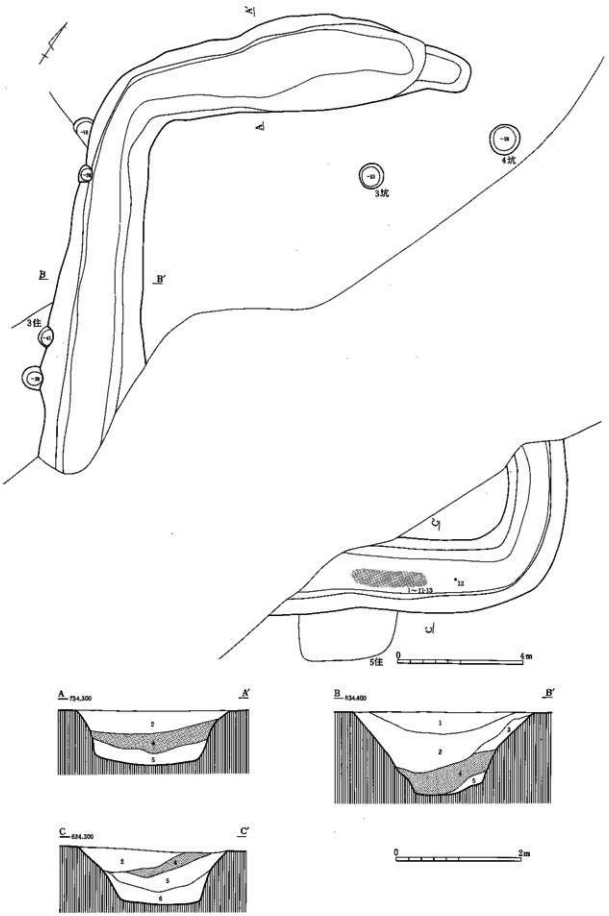
覆土は、1層が黒色細砂土、2層が暗褐色を呈し、地山の小ブロックを多数含んでいた。2層については埋め戻されたものか。遺物は一切出ていないので、時期不明である。

9号土坑

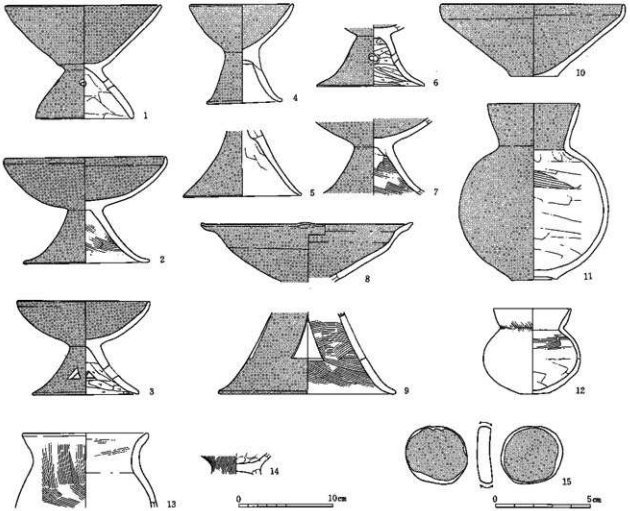
縄文時代の「陥し穴」ともとれるが、底面には何も見当たらない。遺物は出ておらず、時期は不明である。



第176図　5・7・9号土坑



第177図　1号方形周溝墓(1)



第178図　1号方形周溝墓(2)

(4)　方形周溝墓

1号方形周溝墓（第177・178図、ＰＬ75・76・87）

古墳時代前期初頭に位置付くものだが、3号竪穴住居跡よりは新しい。

長方形を呈し、北端にはブリッジを有している。北・東・南側の周溝は同じ深さで進むが、段差をもたないまま西側の周溝だけをさらに掘り窪め、中心部ではセクションＢ－Ｂ′のような状況になる。

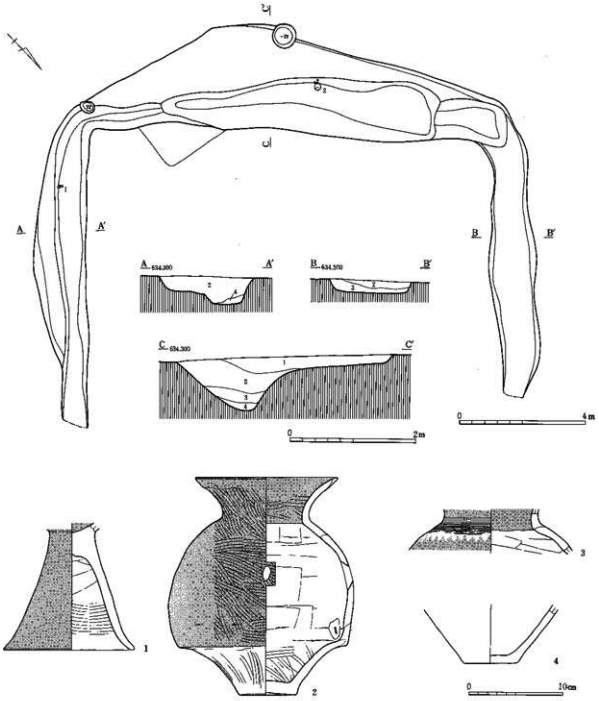
覆土は、1～3層が明らかに自然埋没土、4層が地山である黄褐色土のブロック層であり墳丘崩落土、4層が黒色土のブロックが主体となりこれも墳丘崩落土か、6層は純粋な地山のブロック層である。

供献された遺物は、南溝だけに認められた。いずれも4層直上に位置し、1～11・13は列状にならんでいた。12も含め、この時点で供献されたものと思われる。なお、1～11・13は在来の人間が作ったもので、また13は器台として転用されたものであろう。Ｓ字甕の14・土製円板の15については、出土地点を押さえていないが、少なくとも14については供献されたものではない。

2号方形周溝墓（第179図、ＰＬ76・87）

古墳時代前期初頭に位置し、4号竪穴住居跡・1号土師器焼成坑よりも古い。

ここでは土砂の流出が進行し、北半分が削り取られている。もちろん主体部も確認されていない。周溝は意外と細いが、これは底面だけの様子でしかない。南溝は一段深く、また中央部に向かうほど深さを増



第179図　2号方形周溝墓

している。

覆土は、1・4層が自然堆没土、2・3層がブロック層を多少含んでいるが墳丘崩落土かどうかわからない。

南溝の覆土中層から出土した2が、唯一供献された土器と言える。在来の人間が作った模倣品である。内・外面とも赤彩を施すが、すべての作業を終えて施しているため残りが非常に悪い。胴部中央に外面からの敲打による穿孔を開け、さらに下方にもノミのようなもので叩いた痕跡が残っている。西溝の覆土上層から出土した1については、供献されたものと考えているが、その根拠はない。また、3は焼成後、赤彩の一部を削り、パレススタイル壺に似せている。これも供献されたものか。ただし、位置は4同様に押さえていない。

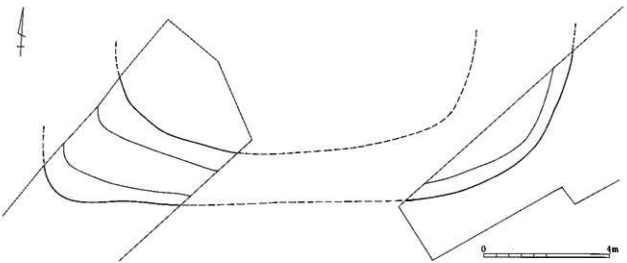
3号方形周溝墓（第180図）

南溝の一部だけを調査したが、遺物は破片も含めて出ていない。左右に別れているが、地山面から40～50cm程掘り下げたところで底面が現れてくるため、これを1対のものとし、方形周溝墓として認定した。

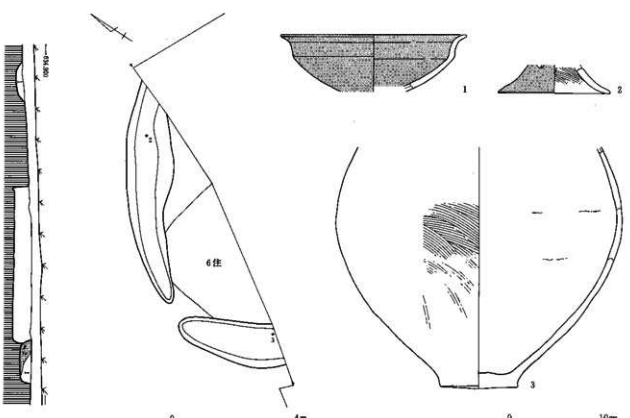
4号方形周溝墓（第181図、PL76）

古墳時代前期初頭の所産だが、同時期の6号竪穴住居跡よりも新しい。

ブリッジを有するものである。調査区北側には周溝が出てこないので、およそ小振りなものであろう。周溝の深さも竪穴住居跡より浅い。



第180図　3号方形周溝墓



第181図　4号方形周溝墓

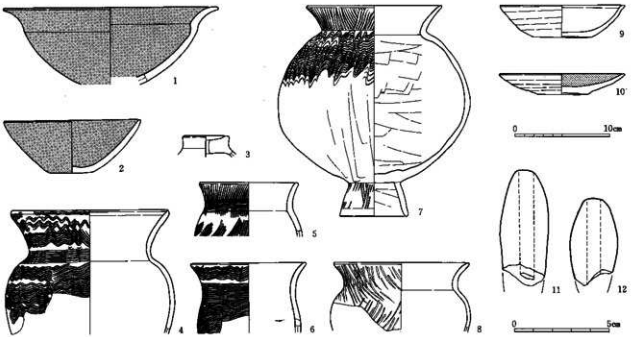
覆土は、1層が自然埋没土、2層が地山のブロックが主体で墳丘崩落土と考えられる。

遺物は、依存状態から2・3が供献されたものと考えられる。いずれも底面から浮いている。2に関しては脚部上半以上が重機掘削時に持ち去られたものだろう。3には、内部に赤褐色系の土壌がわずかに認められた。X線回折分析を実施したところ、ヘマタイトが見つかり、赤色顔料の「ベンガラ」と推定された。

(5)　遺構外出土遺物（第182図）

1～8が古墳時代前期初頭、9・10が平安時代（10世紀前葉）、11・12が不明である。

1～8・11・12が第2段丘の縄文時代の包含層から出土し、また9・10が3号方形周溝墓と7号竪穴住居跡の間から出ている。第2段丘については本来遺構が存在したのか、それともこの時代まで包含層が続くのか良くわからない。9・10については遺構が存在したのだろうが、平面プランは何も出てこなかった



第182図　遺構外出土遺物

第4節　小　結

縄文時代は、残念ながら遺構が検出されないまま終了した。ほとんどのものが上段から崩落したもので、無残な姿としか言えない。中期後半の遺物は極端に多く、さぞかし規模の大きい集落を経営したことだろう。第3段丘面をさらに広げれば、この時期の遺構が出てくるのかもしれない。

古墳時代前期の集落と墓域は、短期の内に終焉を迎えている。いわゆる「初頭」という時期であり、土器で見れば、小型丸底土器が現れず、まだ弥生土器的な様相を色濃く残しているものである。前後する時期については、破片すら認められていない。こうした傾向は各所に認められ、例えば県遺跡（第3章所収）や対岸の砂原遺跡（第13章所収）もそうであった。古墳時代の幕開けとともに成立した遺跡だが、ここでも終焉を迎えるのが早かった。

平安時代の集落は、いずれも10世紀代のものであった。破片も含めて、ここには須恵器や「武蔵甕」などが見当たらず、9世紀に遡るような遺物はない。律令崩壊後に現れたミニ集落と考えるのが無難だろう。

第24表　遺構一覧表

番号	主　軸	主軸長 (m)	副軸長 (m)	壁高 (m)
1住	N－24°－E		4.26	0.13
2住	N－28°－E	3.52	3.80	0.34
3住	N－26°－E	7.71	6.68	0.32
5住	N－57°－E	3.07	3.30	0.10
6住	N－8°－E	4.40		0.59
7住	N－35°－E	2.86		0.60
8住	N－15°－W			0.27
9住	N－48°－E			
10住	N－20°－E	5.45	5.55	0.09

番号	主　軸	主軸長 (m)	副軸長 (m)	壁高 (m)
11住	N－23°－E		3.49	0.04
1地	E－6°－S	3.51	2.00～2.45	0.23
5坑		上端0.91～0.94		0.80
7坑	N－35°－W	上端2.29	上端1.83	0.69
9坑	N－43°－W	上端3.59	上端1.30	0.57
1周	N－59°－E	内法11.60	内法13.84	
2周	N－47°－E		内法13.00	
3周	N－77°－E	内法 (11.00)		
4周	N－56°－E	内法 (7.50)		

第25表　遺物観察表

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大きさ (cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
157－1	石鏃	脚部一部欠		長1.3　幅 (1.1)　厚0.3			黒曜石　(0.16g)
－2	石鏃	脚部一部欠		長1.6　幅 (1.3)　厚0.3			黒曜石　(0.35g)
－3	石鏃	脚部・先端部欠		長 (1.6)　幅 (1.3)　厚0.4			黒曜石　(0.51g)
－4	石鏃	脚部一部・先端部欠		長 (1.6)　幅 (1.3)　厚0.3			黒曜石　(0.45g)
－5	石鏃	脚部一部・先端部欠		長 (2.1)　幅 (1.5)　厚0.4			玄武岩　(0.81g)
－6	石鏃	脚部一部・先端部欠		長 (2.1)　幅 (1.5)　厚0.4			黒曜石　(0.83g)
－7	石鏃	脚部一部・先端部欠		長 (2.3)　幅 (1.6)　厚0.3			硅岩　(0.56g)
－8	石鏃	脚部一部・先端部欠		長 (2.6)　幅 (1.7)　厚0.6			黒曜石　(1.33g)
－9	石鏃	脚部一部・先端部欠		長 (2.5)　幅 (1.4)　厚 (0.4)			赤色チャート　(1.00g)
－10	石鏃	茎部・先端部欠		長 (2.2)　幅1.5　厚0.4			黒曜石　(1.04g)
－11	石鏃	先端部欠		長 (2.8)　幅1.7　厚0.5			チャート　(1.86g)
－12	石鏃	基部・先端部欠		長 (5.5)　幅 (2.0)　厚 (0.8)			チャート　(7.91g)
－13	石鏃	刃部・基部欠		長 (2.7)　幅 (2.4)　厚 (0.7)			黒曜石　(2.45g)
－14	ピエス	完形		長1.9　幅1.8　厚0.7			黒曜石　2.08g
－15	小剥離剥片	完形		長2.4　幅1.8　厚0.8			黒曜石　2.04g
－16	小剥離剥片	完形		長1.9　幅2.0　厚0.6			黒曜石　1.76g
－17	小剥離剥片	側面部一部欠		長 (1.8)　幅2.7　厚0.6			黒曜石　(2.30g)
－18	小剥離剥片	完形		長3.7　幅2.3　厚1.0			黒曜石　8.38g
－19	小剥離剥片	側面部一部欠		長 (3.0)　幅 (2.3)　厚 (1.1)			黒曜石　(7.24g)
－20	小剥離剥片	完形		長3.0　幅1.8　厚0.9			黒曜石　4.75g
－21	小剥離剥片	側面部一部欠		長 (2.5)　幅2.1　厚 (0.9)			黒曜石　(4.37g)
－22	?	完形		長4.9　幅3.8　厚1.6			流紋岩　41.41g
－23	大形剥片石器	完形		長6.1　幅11.7　厚1.7			玄武岩　104.28g
－24	大形剥片石器	完形		長9.5　幅8.2　厚2.5			玄武岩　226.13g
－25	?	完形		長11.8　幅3.9　厚2.3			粘板岩　118.73g
－26	磨製石斧	刃部一基部一部欠		長 (6.4)　幅 (3.1)　厚 (1.5)			変質岩　(47.65g)
－27	磨製石斧	刃部一部残		長 (3.2)　幅 (3.8)　厚 (0.9)			チャート　(13.74g)
158－28	打製石斧	完形		長12.4　幅4.6　厚1.7			玄武岩　117.68g
－29	打製石斧	基端欠		長 (11.9)　幅4.8　厚1.7			角閃石輝石安山岩　(116.33g)
－30	打製石斧	刃縁欠		長 (10.6)　幅 (5.0)　厚1.9			角閃石輝石安山岩　(128.34g)
－31	打製石斧	基端欠		長 (10.9)　幅5.0　厚1.6			角閃石輝石安山岩　(144.28g)
－32	打製石斧	基部・刃縁欠		長 (9.4)　幅 (5.7)　厚 (1.5)			角閃石輝石安山岩　(119.73g)
－33	打製石斧	基部欠		長 (8.4)　幅 (4.7)　厚 (1.6)			玄武岩　(85.97g)
－34	打製石斧	基部欠		長 (8.8)　幅 (5.4)　厚 (1.4)			角閃石輝石安山岩　(108.42g)
－35	打製石斧	基部欠		長 (8.5)　幅 (6.8)　厚 (2.2)			角閃石輝石安山岩　(178.94g)
－36	打製石斧	刃部欠		長 (9.6)　幅 (5.4)　厚 (1.7)			角閃石輝石安山岩　(122.88g)
－37	打製石斧	基端欠		長 (11.9)　幅5.3　厚2.3			角閃石輝石安山岩　(152.37g)
－38	打製石斧	基端一部欠		長 (12.9)　幅5.5　厚2.2			玄武岩　(166.71g)

神図番号	種類	現存	色調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備考
158−39	打製石斧	基部欠		長(11.4) 幅5.4 厚2.6			角閃石輝石安山岩 (162.70g)
−40	打製石斧	基端・部欠		長10.6 幅5.0 厚1.8			角閃石輝石安山岩 (120.31g)
−41	打製石斧	基端一部欠		長12.1 幅5.0 厚1.6			角閃石輝石安山岩 (186.33g)
−42	打製石斧	基端欠		長(10.5) 幅5.3 厚(1.4)			角閃石輝石安山岩 (94.90g)
−43	打製石斧	基端欠		長(10.4) 幅4.8 厚(1.4)			角閃石輝石安山岩 (81.95g)
−44	打製石斧	基端欠		長(10.2) 幅5.2 厚(1.0)			角閃石輝石安山岩 (78.50g)
−45	打製石斧	基端・刃部欠		長(12.1) 幅(6.1) 厚(1.7)			角閃石輝石安山岩 (158.13g)
−46	打製石斧	刃縁欠		長(10.9) 幅(5.1) 厚2.1			玄武岩 (113.42g)
−47	打製石斧	基端欠		長(8.0) 幅4.7 厚1.5			粘板岩 (61.19g)
−48	打製石斧	刃部欠		長(8.7) 幅(3.5) 厚(1.9)			角閃石輝石安山岩 (120.33g)
−49	打製石斧	基端・刃部欠		長(9.1) 幅(6.0) 厚(1.8)			角閃石輝石安山岩 (121.54g)
−50	打製石斧	基端欠		長(9.0) 幅4.5 厚(1.9)			粘板岩 (99.25g)
159−51	打製石斧	完形		長9.8 幅4.3 厚1.6			砂砂岩 77.95g
−52	打製石斧	基端・刃縁一部欠		長(10.6) 幅(5.9) 厚1.1			砂砂岩 (70.48g)
−53	打製石斧	基端・刃縁一部欠		長(9.4) 幅5.1 厚1.4			玄武岩 (54.43g)
−54	打製石斧	基端・刃部欠		長(8.9) 幅(5.3) 厚(1.5)			玄武岩 (74.74g)
−55	打製石斧	刃縁一部・基端欠		長(9.7) 幅5.1 厚(1.5)			砂砂岩 (59.16g)
−56	打製石斧	刃縁・部・基端欠		長(8.4) 幅5.1 厚(2.4)			角閃石輝石安山岩 (113.76g)
−57	打製石斧	刃縁一部欠		長10.7 幅5.0 厚1.8			粘板岩 (120.70g)
−58	打製石斧	基端欠		長(8.6) 幅5.5 厚(1.6)			砂砂岩 (85.12g)
−59	打製石斧	基端一部欠		長11.3 幅5.8 厚1.2			角閃石輝石安山岩 (100.38g)
−60	打製石斧	刃縁一部・基端欠		長(11.6) 幅(5.4) 厚(1.4)			角閃石輝石安山岩 (105.40g)
−61	打製石斧	完形		長13.5 幅5.6 厚2.5			砂砂岩 225.67g
−62	打製石斧	完形		長12.1 幅5.5 厚1.2			角閃石輝石安山岩 131.09g
−63	打製石斧	基端欠		長(11.9) 幅7.6 厚2.5			角閃石輝石安山岩 (291.27g)
−64	打製石斧	基部欠		長(9.7) 幅(9.8) 厚(1.9)			角閃石輝石安山岩 (218.79g)
−65	打製石斧	刃縁欠		長(9.5) 幅(4.2) 厚(2.0)			粘板岩 (72.48g)
−66	打製石斧	完形		長8.5 幅4.3 厚1.2			粘板岩 55.55g
−67	打製石斧	完形		長9.2 幅2.4 厚1.2			粘板岩 45.75g
−68	打製石斧	基端一部欠		長8.2 幅3.5 厚1.5			粘板岩 (56.33g)
−69	打製石斧	完形		長7.3 幅5.6 厚2.2			砂砂岩 90.87g
−70	打製石斧	完形		長7.2 幅4.3 厚0.9			粘板岩 40.76g
−71	打製石斧	完形		長7.4 幅5.2 厚1.5			角閃石輝石安山岩 70.88g
−72	打製石斧	完形		長5.6 幅4.2 厚1.5			粘板岩 46.75g
−73	打製石斧	一部欠		長(10.4) 幅5.7 厚(2.4)			粘板岩 (202.37g)
160−74	磨石	完形		長13.7 幅8.3 厚5.6			角閃石輝石安山岩 989.0g
−75	磨石	周縁部一部欠		長(13.5) 幅4.8 厚3.9			粘板岩 (417.9g)
−76	磨石	周縁部一部欠		長14.1 幅5.9 厚4.5			角閃石輝石安山岩 (603.6g)
−77	磨石	完形		長13.9 幅5.6 厚2.9			角閃石輝石安山岩 498.50g
−78	磨石	周縁部一部欠		長13.7 幅11.2 厚4.5			角閃石輝石安山岩 (1,032.6g)
−79	磨石	完形		長12.5 幅8.5 厚4.5			角閃石輝石安山岩 643.7g
−80	磨石	完形		長11.0 幅8.2 厚4.5			角閃石輝石安山岩 646.6g
−81	磨石	完形		長7.9 幅8.3 厚4.8			角閃石輝石安山岩 351.38g
−82	磨石	完形		長6.9 幅7.0 厚4.4			角閃石輝石安山岩 299.12g
−83	凹み石	完形		長9.9 幅7.6 厚3.9			角閃石輝石安山岩 400.31g
−84	凹み石	完形		長12.2 幅8.5 厚5.8			角閃石輝石安山岩 836.6g
−85	敲石	周縁部一部欠		長(8.1) 幅6.2 厚3.7			花崗岩 (255.33g)
161−86	多孔石	完形		長29.5 幅20.7 厚15.0			角閃石輝石安山岩 10,400.3g
−87	多孔石	完形		長25.0 幅16.9 厚15.1			安山岩(火山礫) 5,603.3g
−88	丸石	完形		長18.4 幅15.5 厚10.9			花崗岩(大礫石) 4,160.5g

挿図番号	種類	残存	色調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備考
162－1	土師器	脚部1/4欠	黄橙	口10.2　器12.0　底4.2	脚部外面・頂部内面ハケ→施文→脚部下半外面タテミガキ、内面ヨコミガキ、（底部外面ユビナデ）	床直	
163－1	土師器	1/8残	明黄褐	口（13.8）　底4.0　高（7.0）	回転ナデ→底部外面手持ちヘラケズリ、口唇部内面ヨコミガキ→暗文		内面黒色処理 墨書土器 実測図の器形は信頼度低い
－2	土師器	口縁部1/3欠	橙	ｲ13.2　高4.3　底4.8	回転ナデ、底部回転糸切り→内面粗いミガキ	床直	内面黒色処理
－3	土師器	口縁部1/8残	橙	ｲ（13.0）	回転ナデ→口唇部内面ヨコミガキ		墨書土器 実測図の器形は信頼度低い
－4	土師質	3/4残	橙	ｲ13.0　高4.0　底6.1	回転ナデ、底部回転糸切り→内面粗いミガキ	右上杯穴内	
－5	土師器	口縁部1/4残	橙	ｲ（15.0）	回転ナデ→口唇部内面ヨコミガキ→暗文		火熱（内面黒色処理かは不明） 器形は復元できず
－6	土師器	口縁部3/4欠	橙	ﾚ（16.5）　高7.7　台7.0	回転ナデ→坏部内面粗いミガキ		内面黒色処理
－7	土師器	口縁部1/5・高台欠	橙	ﾚ（15.7）	〃	カマド内	内面黒色処理 火熱
－8	土師器	口縁部一部欠	橙	ｲ14.3　高5.2　台7.2	〃	床直	内面黒色処理、墨書土器
－9	土師器	口縁部欠	橙	台7.2	回転ナデ、底部回転糸切り→坏部内面粗いミガキ	床直	内面黒色処理
－10	土師器	1/2残	橙	ｲ14.9　高5.6　台7.2	回転ナデ→坏部内面粗いミガキ	カマド内	火熱（内面黒色処理かは不明） 墨書土器だが全体は不明
－11	土師器	口縁部1/3残	橙	ｲ（22.0）　脚（21.2）	回転ナデ	カマド内	
－12	土師器	脚部中位以下1/2残	橙	ﾚ23.0　脚23.2	回転ナデ→脚部下半外面ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ	床直	
－13	土師器	1/3残	橙	ﾚ（21.8）　脚（22.2）　高29.8	回転ナデ→脚部下半以下外面ヘラケズリ、脚部内面ハケ	床直	
－14	土師器	脚部中位以下1/3残	橙	ﾚ（23.6）　脚（23.8）	回転ナデ→脚部下半外面ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデ	床直	
－15	土師器	脚部中位以下1/3残	黄橙	ﾚ（25.4）　脚（25.7）	〃	カマド内	
－16	土師器	1/3残	橙	ﾚ（22.2）　脚（22.4）　高28.4	回転ナデ→脚部下半以下外面ヘラケズリ、内面ハケ		
－17	土師器	脚部以上1/2欠	にぶい黄橙	口（10.0）　脚10.5　高10.3　底6.1	回転ナデ→脚部下半以下外面ヘラケズリ		
－18	土師器	底部1/2残	橙	底3.0	回転ナデ、底部回転糸切り	カマド内	
－19	土師器	脚部中位以下2/3残	にぶい橙	脚16.2　底（8.0）	回転ナデ→脚部下半以下外面ヘラケズリ、脚部下半内面ヘラナデ	カマド内	
164－1	土師器	ﾚ縁部1/4残	赤	ｲ（48.0）	全面ヨコミガキ		赤彩
－2	土師器	坏部完形	赤	ｲ21.2	坏部外面下半タテミガキ、それ以外はヨコミガキ	床直	赤彩
－3	土師器	坏部2/3残	赤	ｲ（22.2）	坏部外面ハケ→脚部内面以外をヨコミガキ	貯蔵穴内	脚部内面を除き赤彩
－4	土師器	口縁部1/4残	赤	ﾚ（22.0）	全面ヨコミガキ		赤彩
－5	土師器	坏・脚接合部完形	赤		坏部ヨコミガキ、脚部外面タテミガキ、脚部内面ヘラナデ		脚部内面を除き赤彩 5孔の透かし孔
－6	土師器	坏口縁部欠	赤	脚11.4	〃	床直	脚部内面を除き赤彩
－7	土師器	脚部2/3残	赤	脚（13.1）	脚部ヨコナデ→外面タテミガキ	床直	外面赤彩
－8	土師器	脚部裾1/4残	橙	脚（17.0）	脚部内面ヘラケズリ→脚裾ヨコナデ→外面ヨコミガキ		供献品 2孔対で4か所に設定か？
－9	土師器	口縁部2/3欠	赤	ﾚ（16.2）　高6.3　底4.5	底部外面ユビナデか？、それ以外はヨコミガキ	床直	底部外面を除き赤彩
－10	土師器	口縁部3/4欠	赤	ﾚ（12.8）　高4.1　底3.3	全面ヨコミガキ	貯蔵穴内	赤彩
－11	土師器	口縁部1/3残	赤	口（14.6）	〃	床直	赤彩
－12	土師器	口縁部1/3残	赤	口（15.1）	口縁部ヨコナデ→ヨコミガキ		赤彩
－13	土師器	ﾚ縁部1/3欠	黄橙	ｲ20.3　高12.0　底6.5	口縁部ヨコナデ、その他ヘラナデ→体部下位外面ハケ→体部外面タテミガキ、体部内面ヨコミガキ	床直	ｲ1縁部内面赤彩
－14	土師器	脚受部3/4残	橙	口8.8	全面ヘラナデ→全面粗いヨコミガキ		粗い赤彩 模倣品

掲図番号	種　類	残　存	色　調	大きさ(cm)	整形の特徴	出土位置	備　考
165－15	土師器	口縁部1/8残	橙	□ (17.0)	口唇部ヨコナデ→施文、内面ヨコミガキ		
－16	土師器	口縁部1/8残	淡黄	□ (21.6)	〃		
－17	土師器	口縁部1/3残	浅黄	□ (14.8)	胴部外面・頸部内面ハケ→口縁部ヨコナデ		全部母孤入 搬入品だが伊勢湾沿岸でない
－18	土師器	頸部～胴部中央1/2残	にぶい黄橙		胴部ヘラナデ→口縁部外面を除きミガキ		群馬県側からの搬入品
－19	土師器	胴部中位以上1/4残	橙	□ (18.8)	口唇部ヨコナデ→施文、内面ヨコミガキ		
－20	土師器	口縁部1/10欠	橙	□21.0　高28.6　底9.2	口唇部ヨコナデ、胴部外面ハケ、底部外面エビナデ→施文→胴部下位外面タテミガキ、内面ヨコミガキ	貯蔵穴内	
－21	土師器	ほぼ完形	暗黄褐	□15.0　高22.4　底7.6	口唇部ヨコナデ、底部外面ユビナデ→施文→胴部下位外面タテミガキ、内面ヨコミガキ	床直	
－22	土師器	口縁部1/3残	淡黄	□ (12.0)	口唇部ヨコナデ、外面タテミガキ、内面ヨコミガキ	貯蔵穴内	搬入品だが製作地は不明
－23	土師器	口縁部1/3残	赤	□ (15.4)	口縁部下断外面タテミガキ、それ以外はヨコミガキ		赤彩
－24	土師器	胴部中位以上完形	明黄褐	□22.0	施文、胴部内面ハケ後ヘラナデ→外面・口縁部内面ヨコミガキ	炉体土器	
－25	土師器	胴部上半ほぼ完形 口縁部1/10残	明黄褐	□ (19.4)	口唇部ヨコナデ、全面ハケ→施文→外面タテミガキ、内面ヨコミガキ	床直	
－26	土師器	頸部～胴部中位1/3残	橙		外面ハケ、胴部内面ハケ後ヘラナデ→施文→外面タテミガキ、口縁部内面ヨコミガキ	床直	群馬県側からの搬入品か？
－27	土製円板	完形	赤	径3.2	外面ミガキ、内面ヘラナデ、破断面に研磨痕なし		赤彩された壺の胴部を転用 7.18g
－28	磨製石斧	完形		長4.3　幅1.7　厚0.3			チャート　2.53g
166－29	打製石斧	基端欠？		長14.3　幅12.0　厚1.7			結板岩　349.30g
－30	砥石	端部一部欠		長9.4　幅3.8　厚3.4		貯蔵穴内	凝灰岩（グリーンタフ） (128.1g)
－31	石錘	完形		長12.3　幅10.3　厚5.6	磨耗痕	貯蔵穴内	角閃石輝石安山岩　835.5g
－32	石錘	完形		長13.9　幅6.6　厚3.4	磨耗痕	貯蔵穴内	チャート　431.2g
－33	石錘	完形？		長13.7　幅7.1　厚3.1	磨耗痕、上下に敲打痕		角閃石輝石安山岩　399.4g
－34	石錘	完形？		長12.8　幅5.9　厚4.4	磨耗痕、下に敲打痕	貯蔵穴内	角閃石輝石安山岩　440.6g
－35	石錘	完形		長12.3　幅6.3　厚5.5	磨耗痕	貯蔵穴内	角閃石輝石安山岩　615.0g
－36	石錘	完形		長11.9　幅6.8　厚4.4	磨耗痕、上に敲打痕	貯蔵穴内	角閃石輝石安山岩　465.4g
－37		完形		長9.3　幅7.7　厚2.6	磨耗痕、右に敲打痕		角閃石輝石安山岩　279.2g
－38		完形		長9.0　幅9.1　厚3.1	両面・上に磨耗痕		花崗岩　401.42g
167－1	土師器	1/4残	にぶい黄橙	□ (13.8)　高4.6　底 (6.0)	回転ナデ→底部外周手持ちヘラケズリ、口唇部内面ヨコミガキ→暗文	カマド内	内面黒色処理
－2	土師器	胴部中位以上1/3残	橙	□ (22.6)　胴 (24.0)	回転ナデ→胴部中位以下外面ヘラケズリ	カマド内	
168－1	土師器	完形	橙	□10.7　高3.2　底5.1	回転ナデ、底部回転糸切り、内面ミガキなし	床直	内面黒色処理 粗雑土器
－2	土師質	口縁部1/3欠	橙	□11.8　高4.0　底4.6	〃		
－3	土師質	坏部1/2残	明橙	□14.0	〃		
－4	土師質	高台部1/2残	橙	台9.0	〃		
－5	土師質	胴部中位以上1/3残	明橙	□ (16.4)	外面ヘラケズリ、内面ヘラナデの後口唇部ヘラケズリ	板上上層	
－6	土師質	口縁部1/6残	橙	□ (24.0)	刻苗下位外面ヘラケズリ	カマド内	
－7	土師質	口縁部1/8残	明赤褐	□ (25.0)	口縁部ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ハケ		
－8	土師質	口縁部1/6残	橙	□ (26.4)	胴部外面ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ		
169－1	土師器	完形	赤	□14.0　高5.0　底4.1	全面ヨコミガキ	床直	底部外面を除き赤彩
172－1	土師器	口縁部3/4欠	橙	□ (12.8)　高3.8　底5.6	回転ナデ、底部回転糸切り→内面粗いミガキ		内面黒色処理
－2	土師質	口縁部1/5欠	橙	□13.8　高3.8　底4.9	回転ナデ、底部回転糸切り、内面ミガキなし		

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大　きさ(cm)	整　形の特　徴	出土位置	備　　考
172－3	土師器？	口縁部4/5欠	橙	□（13.0）　高3.9　底6.4	回転ナデ、底部回転糸切り→内面粗いミガキ	床直	内面黒色処理かは不明
－4	土師器	口縁部1/3欠	橙	□16.5　高5.4　台7.5	回転ナデ、底部回転糸切り、坏部内面ミガキなし	床直	坏部内面黒色処理
－5	土師器	口縁部1/2残	橙	□19.6　脚20.6	回転ナデ	カマド内	
－6	土師器	脚部以上1/2残	橙	Ｌ（22.2）　脚24.2	回転ナデ→脚部下半外面ヘラケズり、脚部内面ヘラナデ	カマド内	
173－1	土師器	1/2残	明黄褐	Ｌ（12.0）　高5.4　底3.4	全面ヨコミガキ	貯蔵穴内	
－2	土師器	口縁部3/4残	黄褐	□25.8	□唇部ヨコナデ→ヨコミガキ	床直	器種不明、上下逆転か？
－3	土師器	口縁部完形	明黄褐	□24.6	□唇部ヨコナデ、外面ハケ→端丈、内面ヨコミガキ	床直	
175－1	土師質	1/4残	にぶい橙	□（12.6）　高3.7　底5.1	回転ナデ、底部回転糸切り、内面ミガキなし		
－2	土師質	口縁部1/3残	橙	□（12.0）	回転ナデ、内面ミガキなし		
－3	土師質	口縁部3/4欠	橙	Ｌ（14.2）　高5.4　内7.6	回転ナデ、底部回転糸切り、坏部内面ミガキなし		
－4	土師質	口縁部1/3残	黄橙	Ｌ（10.4）	外面ヘラケズり、内面ヘラナデ		
－5	土師質	脚部以上1/2残	黄橙	□（13.0）	全面ヘラナデ		
－6	土師質	口縁部1/4残	にぶい黄橙	□（18.2）	脚部外面ヘラケズり、内面ヘラナデ		
－7	土師質	口縁部1/3残	黄褐	□（20.8）	外面ヘラケズり、内面ヘラナデ		
－8	土師質	口縁部2/3残	黄橙	Ｌ21.5	〃		
－9	土師質	脚部ド半完形	にぶい褐	底12.0	脚部外面ヘラケズり、内面ヘラナデ、底部外面不明		
176－1	土師器	脚部完形	赤	脚21.6	脚部内面ハケ→脚裾ヨコナデ→脚部外面タテミガキ	覆土中層	外面赤彩
178－1	土師器	ほぼ完形	赤	□16.5　高12.1　脚10.4	坏・脚接合部外面ハケ、脚部内面ヘラナデ→脚部内面を除きヨコミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩 模倣品
－2	土師器	ほぼ完形	赤	□17.0　底11.2　脚13.4	脚部内面ハケ→脚裾ヨコナデ・坏部全面ヨコミガキ、脚部外面タテミガキ後に脚裾ヨコミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩
－3	土師器	ほぼ完形	赤	□14.0　高10.0　脚11.3	脚部内面ヘラケズり→坏部全面ヨコミガキ、脚部外面タテミガキ後に脚裾ヨコミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩 透かし孔4孔
－4	土師器	ほぼ完形	赤	□11.0　高10.5　脚8.3	外面タテミガキ後に口縁部・脚裾部ヨコミガキ、内面ヨコミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩
－5	土師器	脚裾部2/3・坏部欠	赤	脚（12.6）	内面ヘラナデ→脚裾ヨコナデ→外面タテミガキ→底外面ヨコミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩
－6	土師器	坏部欠	赤	脚11.4	脚部内面ヘラケズり→脚部内面を除きヨコミガキ後に脚部外面タテミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩
－7	土師器	脚頂・口縁部欠	赤		脚部内面ハケ→脚部内面を除きヨコミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩
－8	土師器	坏部1/4残	赤	□22.4	全面ヨコミガキ	覆土上層	赤彩
－9	土師器	脚裾部1/4残	赤	脚（19.0）	内面ハケ→脚裾ヨコナデ→外面タテミガキ→底部外面ヨコミガキ	覆土上層	脚部内面を除き赤彩
－10	土師器	ほぼ完形	赤	□19.4　高7.7　底5.1	底部外周ヘラケズり、それ以外はヨコミガキ	覆土上層	底部外周を除き赤彩
－11	土師器	ほぼ完形	赤	□9.7　高18.7　底4.8	脚部内面ハケ後ヘラナデ、それ以外はヨコミガキ	覆土上層	底部外周・脚部内面を除いて赤彩、模倣品
－12	土師器	口縁部1/2欠	橙	□8.2　高9.1　底3.0	脚部以下外面ヘラケズり、脚部内面ヘラナデ後口縁部内面までハケ→口縁部ヨコナデ→脚部外面粗いヨコミガキ、脚部外周ハケ	覆土上層	嵌入品ないしは外来の人間が製作したもの
－13	土師器	口縁部完形	明黄褐	□13.4	口縁部内面から外面ハケ、脚部内面ヘラナデ→口唇部ヨコナデ→脚部外面の一部タテミガキ、内面ヨコミガキ	覆土上層	
－14	土師器	脚・脚接合部完形	褐		外面ハケ、脚部内面ヘラケズり		金雲母・石英を混入 ただし伊勢湾起源かもしれない
－15	土製円板	完形	赤	径3.3	全面ミガキ、割れ面に研磨痕あり		在来の高坏の口縁部を利用

挿図番号	種　類	残　存	色　調	大　き　さ (cm)	整　形　の　特　徴	出土位置	備　　考
179　1	土師器	脚部9/10・坏部欠	赤	脚 (13.9)	脚部内面ハケ後ヘラナデ→裾部ヨコナデ・脚部外面タテミガキ、坏部内面不明	覆土上層	脚部内面を除き赤彩
－2	土師器	完形	橙	口15.2　高23.1　底6.1	底部外面ユビナデ、胴部以上外面ハケ、内面ハケないしヘラナデ・口唇部ヨコナデ	覆土上層	胴部外面上半から口縁部内面までわずかに赤彩 模倣品、胴部に2孔穿孔
－3	土師器	胴部1/2残	赤		胴部内面ヘラナデ、施文→外面およびD縁部内面ヨコミガキ		施文以外の外面およびD縁部内面を赤彩 模倣後赤彩された胴部外面を除りパレススタイル壺に近似
－4	土師質	底部完形	明黄褐	底5.8	底部外面不明、胴部外面タテミガキ、胴部内面ヨコミガキ		
181－1	土師器	坏部1/2残	赤	口 (19.8)	全面ヨコミガキ		赤彩
－2	土師器	脚裾部完形	赤	脚11.8	内面ハケ→裾部ヨコナデ→外面タテミガキ	＋13cm	外面赤彩
－3	土師器	胴部中央以上欠	橙	底8.3	底部外面ヘラケズリ、胴部外面ハケ後下半のみタテミガキ、胴部内面ヘラナデ後ヨコミガキ	＋10cm	
182－1	土師器	坏部1/2残	赤	口 (23.0)	全面ヨコミガキ		赤彩
－2	土師器	D縁部1/2欠	赤	口14.6　高5.6　底4.6	内面ハケ→D唇部ヨコナデ→ヨコミガキ（底部外面は不明）		底部外面を除き赤彩
－3	土師器	天井部完形	橙	天5.0	天井部外面ユビナデ、体部外面ヘラナデ後ヨコミガキ（体部内面は不明）		
－4	土師器	胴部中位以上1/2残	赤褐	口16.4	胴部内面ヘラケズリ、口唇部ヨコナデ→施文→胴部下半外面タテミガキ、内面ヨコミガキ		石英・金雲母多混
－5	土師器	D縁部1/3残	黄橙	D (10.5)	内面ヨコミガキ		
－6	土師器	口縁部3/4残	によい黄橙	口12.4	口唇部ヨコナデ→施文、内面ヨコミガキ		
－7	土師器	5/6残	橙	口14.2　高22.3　台7.2	全面ヘラナデ→口唇部・脚裾部ヨコナデ→施文、口縁部内面ヨコミガキ		模倣品
－8	土師器	D縁部1/2残	橙	D14.4	D唇部ヨコナデ・施文、内面ヨコミガキ		
－9	土師質	完形	橙	口13.2　高3.5　底6.0	回転ナデ→底部外面手持ちヘラケズリ、内面ミガキなし		
－10	土師器	D縁部3/4欠	橙	口 (13.4)　高2.2　底5.3	回転ナデ、底部周転糸切り、内面ミガキなし		内面黒色処理
－11	土錘	一端欠	橙	径2.6			
－12	土錘	一端欠	橙	径2.6			

第15章　土合遺跡

第１節　遺跡と調査の概要

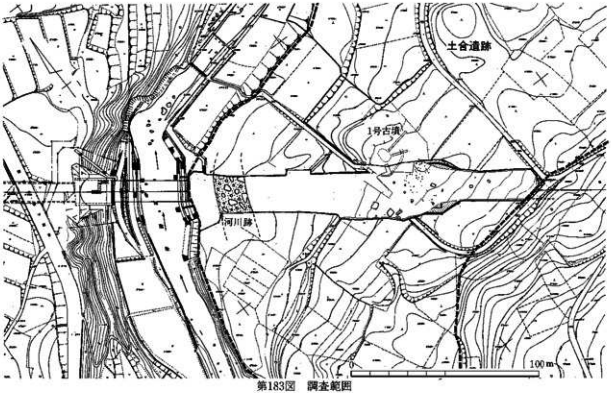
1　遺跡の概要

本遺跡は、北佐久郡浅科村大字甲字土合1713-1番地ほかに所在し、蓼科山に源を発する布施川右岸の河岸段丘に立地する。これまで遺跡は、縄文時代中期と平安時代の遺物が散布すること、また、土合古墳群として複数の古墳（遺跡台帳には4基が記載されているが、現存するのは3基）が存在することで知られてきたが、発掘調査例としては、明治32年と昭和44年に1号古墳が調査されただけである。この古墳からは多くの副葬品が出土し、中でも銀象眼を施した2点の八窓倒卵形の鍔は注目されている。

今回の調査対象地は遺跡の西端で、河岸段丘の第2～第4段目に当り、標高652～642ｍ前後である。当初は側道建設用地に石室の一部がかかる計画であった1号古墳（昭和25年、村指定文化財）は、鉄建公団・県教委文化課・村教委・埋文センターの保護協議により設計変更されて現状保存を図ることとなり、調査対象から除外された。ただし、用地内に確認された1号古墳の周溝については、一部が調査の対象となった。

2　調査の概要

発掘調査は平成4年度（第1次）と5年度（第2次）の2ケ年にわたって実施し、調査面積は4年度が 4,000



第183図　調査範囲

m²、5年度が200m²の計4,200m²である。また、5年度には工事計画の変更に伴う坑口付近の拡幅部分と新幹線用地外の坑外施設部分で立会調査を実施したが、遺構遺物は検出されなかった。

さらに、6年度に至っては、工事用道路部分についても同様に立会調査を実施したが、遺構等は検出されなかった。

事前踏査では遺物がごくわずかしか採集されず、遺構の存在が希薄であることが予想されたが、発掘調査の結果、第2段丘面から、竪穴住居跡2軒（縄文時代中期初頭1軒・古墳時代前期1軒）・土坑14基（縄文時代前期1基・同後期2基・中世3基・不明8基）・1号古墳周溝・ピット63などすべての遺構が検出され、各時代をとおして生活の場となっていたことが判明した。

また、下段の段丘面は耕作土直下が砂礫層であり、特に第4段丘面には縄文時代後期（称名寺式～堀之内式期）の土器片が多量に包含されていた。このことから、第4段丘面は、該期は布施川の旧河床であり、その上流にはかなり大規模な同時期の集落が存在することが推測された。

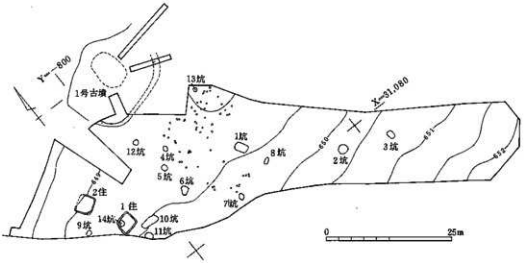
なお、本調査と並行して、遺跡全体の試掘調査が浅科村教育委員会によって実施されたが、縄文時代中期から後期および平安時代の集落の存在が確認され、本遺跡の中心部は遺跡範囲の中央北寄りに当ることが判明した。

調査日誌抄

平成 4年10月26日　立木伐採・上物撤去作業開始
10月29日　重機によるトレンチ調査開始
11月 3日　表土はぎ開始
11月 9日　作業員従事、第1次本調査開始
11月10日　遺構検出開始
11月12日　縄文後期土器片散布域の掘り下げ
11月16日　古墳周溝部分の掘り下げ
11月20日　測量基準杭設置
12月 4日　遺構完掘
12月14日　測量残務終了
12月17日　村教育委員会と共催で現地説明会を実施

平成 5年 4月 5日　第2次調査開始　測量基準杭設置
4月 6日　古墳および周辺の清掃
4月 8日　古墳平面図作成
4月12日　軽井沢町教育委員会の土屋長久氏の指導
4月20日　高所作業車で全景写真撮影
4月27日　古墳および墳丘トレンチ埋め戻し
5月 7日　測量残務終了
7月 8日　坑口付近拡幅部分および坑外施設部分の表土はぎ立会調査

平成 6年11月18日　工事用道路部分の立会調査



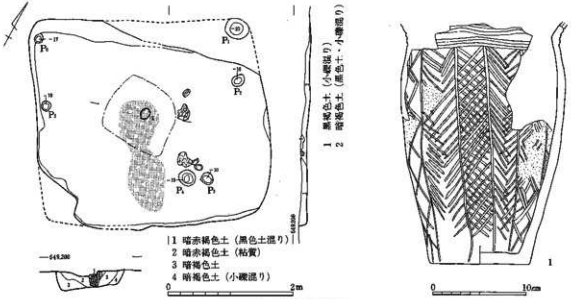
第184図　遺構配置

第2節　遺構と遺物

1　縄文時代の遺構と遺物

2号竪穴住居跡（第185図、ＰＬ89・91）

平面プランは3.70×3.25ｍの長方形である。残存する壁高は最大で13cmしかなく、住居跡の上部と南北コーナーは後世の耕作などにより削平されていた。柱穴は6個検出されたが、配置は不規則で、あえて上屋構造と関連付けるなら、コーナーに位置するP_1・P_6と壁際に位置するP_2・P_5から見て、本来四隅と壁際に柱を配したものかも知れない。炉は住居のほぼ中央に設けられた埋甕炉で、口縁部と体部の一部を欠損した深鉢形土器を埋設して炉体としたものである。炉の周辺の床面は、焼土が60×180cm範囲に散布し、埋甕炉を中心に約１ｍ四方で深さ30cmの掘方が認められた。

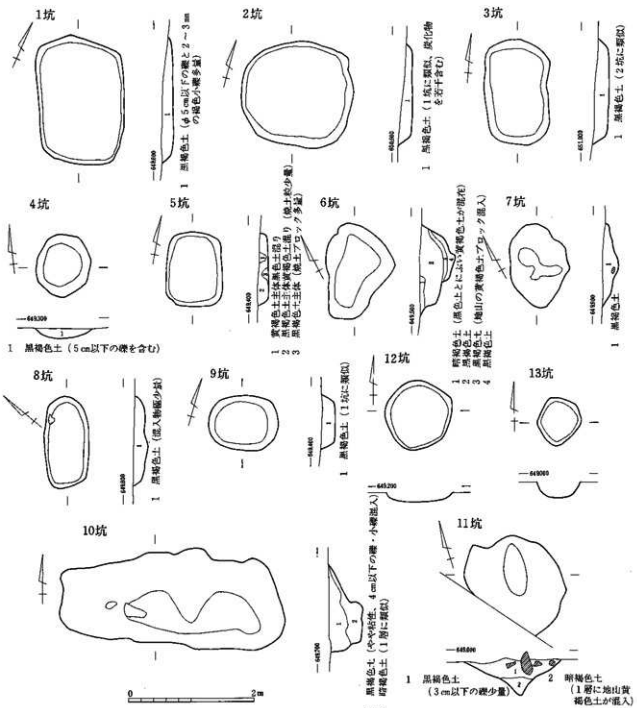


第185図　２号竪穴住居跡

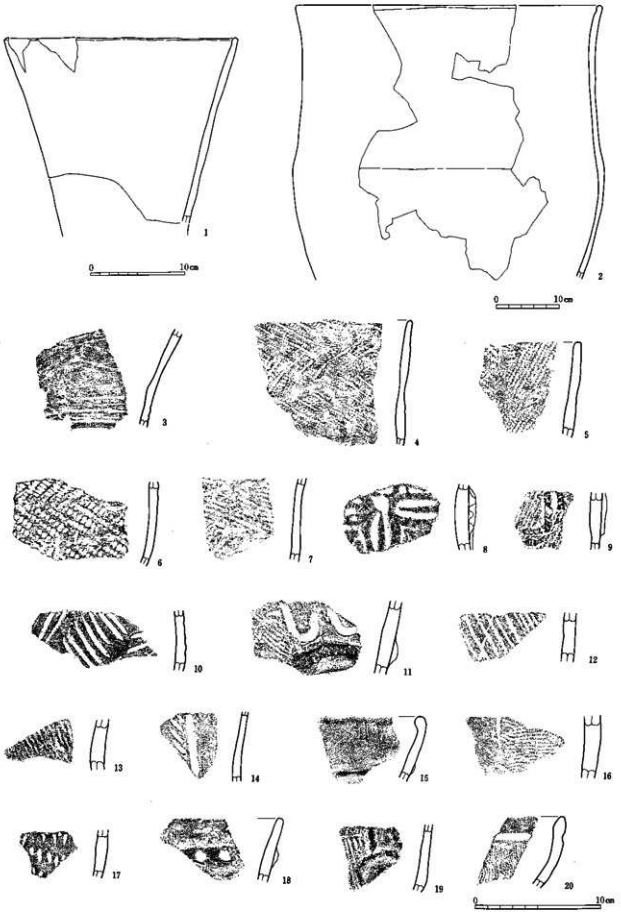
出土遺物は、深鉢形土器（炉体土器）と黒曜石の剥片3点である。1は残存高25.3㎝で、口縁部を欠く。頸部には浅い沈線を横位に数条施し、胴部は縦位に区画した中を交互に綾杉状と格子目状の文様を施している。この深鉢形土器は、千曲川流域の東信地方に分布する中期初頭の五領ヶ台式併行のものである。

12号土坑（第186図、ＰＬ89・92）

径 110㎝の不整円形で、検出面からの深さは15㎝である。横位に羽状縄文を施した有尾式口縁部破片（第187図４）が出土している。



第186図　土坑



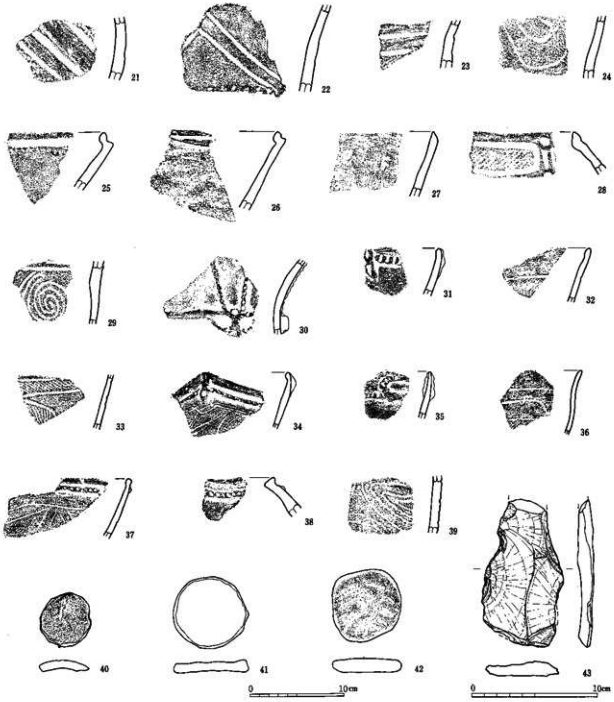
第187図　縄文土器

10・11号土坑（第186図）

両土坑は南北に１ｍ離れて位置し、10号土坑は 350×150cmの不整楕円形で深さ55cm、11号土坑は175×130cmの不整楕円形で深さ55cmである。両土坑とも覆土が類似し、１層黒褐色土と2層暗褐色土に分層できる。出土遺物はない。覆土から判断して縄文時代の土坑と考えたいが、時期不詳である。

遺構外出土遺物（第187・188図、ＰＬ91・92）

第3～第4段丘面にかけて確認された河川跡から、縄文中期後半～後期前半の土器片・土製円板・打製石斧が出土している。土器片は摩滅が著しい。図示した1・2は摩滅により文様が消失しているが堀之内式の深鉢形土器である。



第188図　縄文土器・土製円板・石斧

2　古墳時代の遺構と遺物

1号竪穴住居跡（第189図、ＰＬ89・92）

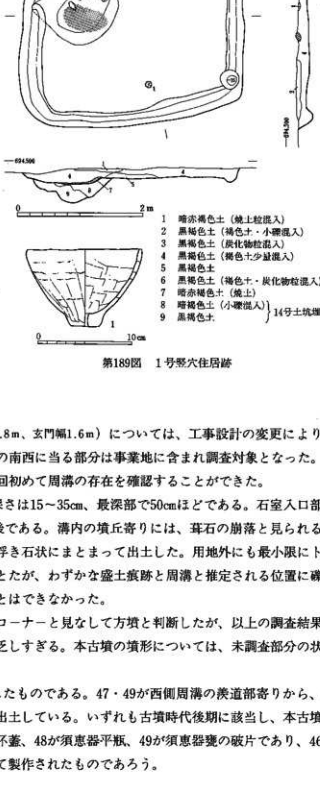
3.50×3.28ｍの方形に近いプランで、北西の一角を除き深さ10cmの周溝が巡っている。残存壁高は15cmほどで、2号住居跡と同様に上部が削平されているものと見られる。

柱穴は南東隅の1箇所に認められただけであるが、本住居跡に伴うものか不明である。

炉は中央西寄りに焼土が厚さ5cmで70×35cm範囲に堆積する部分があり、炉の痕跡を認めることができた。

出土遺物は、南壁近くの覆土から出土した口径14.2cmで器高 8.2cmのほぼ完形の有孔土器（1）と、赤色塗彩された小片のみである。

北西隅の床面下に検出された 1.8×1.0ｍの不整形な落ち込みは、本住居跡に関連するものではなく、本跡に切られた14号土坑（時期不詳）として扱った。



第189図　1号竪穴住居跡

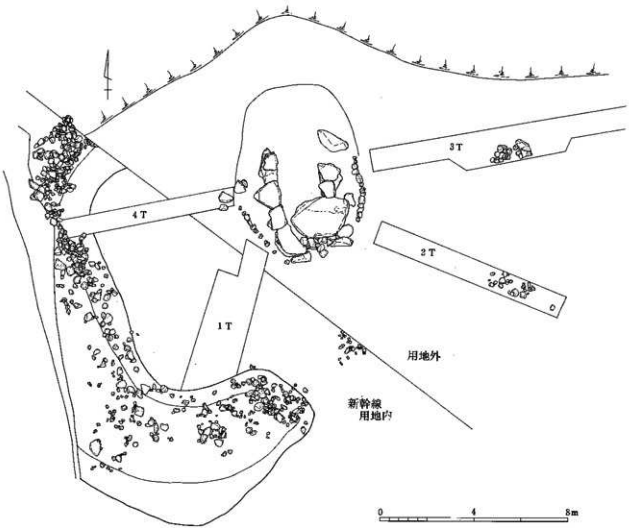
1号古墳周溝（第190図、ＰＬ91）

石室（玄室長5.0ｍ、奥壁幅1.6ｍ、玄室中央幅1.8ｍ、玄門幅1.6ｍ）については、工事設計の変更により事業地から除外され現状保存が図られたが、墳丘の南西に当る部分は事業地に含まれ調査対象となった。1号古墳の既存調査は石室のみの調査であり、今回初めて周溝の存在を確認することができた。

検出された周溝は幅約5ｍ、検出面からの深さは15～35cm、最深部で50cmほどである。石室入口部に当る南側が開口し、推定半径は10ｍ（内法）前後である。溝内の墳丘寄りには、葺石の崩落と見られる径10～40cm大の自然礫が溝底から10cmほど離れて浮き石状にまとまって出土した。用地外にも最小限にトレンチを設定して墳丘の盛土と周溝を確認しようとたが、わずかな盛土痕跡と周溝と推定される位置に礫群が認められたにすぎず、その全容をとらえることはできなかった。

発掘調査時には、周溝の平面形状の一部をコーナーと見なして方墳と判断したが、以上の調査結果を再検討すると、方墳と断定するには判断材料が乏しすぎる。本古墳の墳形については、未調査部分の状況が明らかになるまで、課題としたい。

遺物は、第191図46～49が本古墳から出土したものである。47・49が西側周溝の羨道部寄りから、46・49が古墳本体から1～2ｍ離れた古墳正面から出土している。いずれも古墳時代後期に該当し、本古墳に供献されたものと考えられる。46・47が須恵器坏蓋、48が須恵器平瓶、49が須恵器甕の破片であり、46・47からすると、7世紀中葉から第3四半期にかけて製作されたものであろう。



第190図　土号1号古墳

3　平安時代の遺物

表土中から平安時代の土師器坏（50）と須恵器長頸瓶の底部（51）が出土している。坏は口径14cmで器高4.3cm、内面が黒色処理されたもので、9世紀後半に位置付けられる。51は時期不詳である。

浅科村教育委員会が行った遺跡全体の試掘調査によると、本遺跡の中央北寄りで平安時代前半の竪穴住居跡が3軒確認されているので、これらの遺物も同期の集落とかかわるものであろう。

4　中世の遺構と遺物

3号土坑

唯一中世の遺物を伴出した遺構である。1.65×1.00mの不整な長方形で深さ22cm、底面は平坦である。覆土から古瀬戸のおろし皿片が1点出土した。

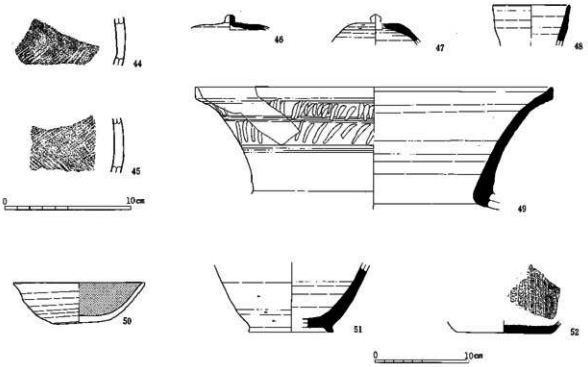
1・2号土坑

1号土坑は2.05×1.35mのほぼ長方形で深さ20cm、2号土坑は1.8×1.65mの不整方形で深さ18cmである。

両土坑とも覆土が黒褐色土の単層で3号土坑と酷似することから、出土遺物はないが中世遺構と推定した。

ピット

63基のピットは、ほとんどが1辺20～30cmの方形を基調とし、黒褐色の覆土で、10×20mの範囲に集中して検出された。規則的な配置こそ認められなかったが、ピット群の範囲内に前述の1号土坑も含まれることから、何らかの構築物が想定されよう。

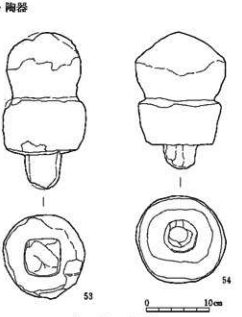


第191図　土師器・須恵器・陶器

5　時期不明の遺構・遺物

4～9・13・14 号土坑の8基については、時期を推定する所見が得られなかった。形態差や覆土の相違から見ると、縄文から中世に至る時代のものが混在していそうである。

53と54は、1号古墳の墳丘表土中から出土した五輪塔の空風輪で、浅間山起源の軽石製である。在地の最も加工しやすい石材を利用したものである。現在も1号古墳の天井石には、周辺から出土した五輪塔が祀られているが、本資料も同様の事情によって収集されたものの一部であろう。



第192図　五輪塔

第3節　小結

土合遺跡は、以前から縄文時代中期後半の土器・石器や平安時代の土師器・須恵器などが多量に採集され、土合1号古墳とともに注目されてきた遺跡である。今回の発掘調査は、遺跡の中心部分からはずれた地点が調査対象となったが、浅科村教育委員会の遺跡全体の試掘調査結果とも合わせ、本遺跡が縄文時代から中世に及ぶ、村内でも有数の複合遺跡であることが判明した。

とくに縄文時代では、若干ながらも新たに前期前半の土器が発見され、中期初頭にあっては小規模ながらも集落が形成されるなど、本遺跡の年代が予想以上に古くなることが明らかとなった。また、試掘調査では中期後半の竪穴住居跡が確認されたほか、新幹線用地内では河川跡から後期前半の土器群が一括出土し、付近に該期の集落跡の存在が想定されるなど、間断はあるが、前期から後期にかけて布施川の段丘面が盛んに利用されたことがわかる。

古墳時代以降は、中平・田中島遺跡にも見られたように、前期初頭に竪穴住居が出現するが、以後は継続することなく、後期になって古墳（現存3基）が築かれるだけの場所となる。平安時代になると一定のまとまりを持つ集落が形成されるが、中世に至り、室町時代ごろには再び墓域となるようである。

参考文献

畠山忠雄　1970　「浅科村土合一号墳の調査」『長野県考古学会誌』9
土屋長久　1982　「土合1号古墳」　『長野県史考古資料編　全1巻(2)　主要遺跡（北・東信）』

第16章　結語

平成４年度に着手した北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査事業は、足掛け６年の歳月をかけ、高崎長野間の新幹線が開業し冬季長野オリンピックが開催された平成９年度をもってすべての業務が完了することとなった。

佐久管内における発掘調査は、並行して実施した上信越自動車道の発掘調査に比べると対象面積が半分程度であったため、容易に終了するものと見込まれていた。ところが、実際には用地買収や工事工程との調整を余儀なくされ、その結果、新たな対象遺跡の浮上や調査着手時期の遅延があったり、一つの遺跡を幾度かに分割調査するなど、調査計画の変更から発掘終了時期が大幅にずれ込んだ遺跡もある。しかしながら、関係機関の迅速な対応により、比較的短期間に15遺跡およそ８万㎡の発掘調査を円滑に実施することができた。整理作業では予期せぬ事態もあったが、ここに、当初の計画どおり調査成果を報告書として刊行できるのは、関係者の並々ならぬ努力があったからにほかならない。

今回の調査によって得られた成果は、旧石器・弥生・奈良時代の関係資料は欠くものの、当地域におけるこれまでの歴史像を補強し一層鮮明にするものであった。時代別にみた主な調査成果の概要は、次のとおりである。

縄文時代

遺構に伴う資料は少なかったが、中金井遺跡群（佐久市）は早期から中期にかけての土器片が出土し、居住空間とは異なる湯川段丘面で何らかの生業活動が行われたものとみられるが、この傾向は湯川流域に立地する縄文時代遺跡のあり方とほぼ一致する。

砂原遺跡（浅科村）では中期前葉から後葉までの土器がほぼ全型式にわたって出土し、千曲川を挟んで対岸に位置する中平・田中島遺跡（浅科村）では前期末葉から後期前葉の土器が出土するなど、東信地方の様相を知る上で好資料が得られた。特に砂原遺跡の「焼町土器」に比定された一群については、御代田町川原田遺跡出土例に装飾・胎土が類似することから、土器の動きが注目される。また、石器は石鏃や石錐は一切認められなかったが、打製石斧と磨石類が多量に出土した。中でも打製石斧については未製品とともに石核や剥片も出土し、石器製作が行われていたことが裏づけられた。

布施川石岸の段丘に立地する土合遺跡（浅科村）は調査箇所が遺跡の縁辺部であったが、中期前葉の竪穴住居跡のほかに前期から後期にかけての土器片も認められ、遺跡内には該期の集落が存在するものと推定された。

古墳時代

県遺跡（軽井沢町）、前田遺跡群（佐久市）、砂原遺跡、中平・田中島遺跡、土合遺跡で、前期初頭の竪穴住居跡が発見され、中平・田中島遺跡では方形周溝墓群からなる墓域も明らかとなった。これらの遺跡は、古東山道の推定ルート沿いに所在し、出土土器には、関東・北陸・東海地方などの影響を受けた外来形土器や搬入品が含まれている。忽然と出現し、短期間のうちに終焉を迎えた集落であるが、おそらく政治的背景を色濃く反映しているものと見られる。近年、当地域ではこの時期の調査例が飛躍的に増加しつつあり、総合的な検討が望まれるところである。

平安時代

砂原遺跡では、9世紀第4四半期に洪水砂で覆われた周堤帯を残す竪穴住居跡が、大小の畦畔で区画された水田跡や整然と畝立てされた畑跡などとともに発見され、当時の農村景観が実像として把握された。この洪水砂については、文献に見られる「仁和の大洪水」(仁和4年：888年)に時期・季節がおよそ一致し、当時の災害記録を検証する上で有力な情報となろう。

このほか、律令制の崩壊期もしくは崩壊後の小規模集落が、池尻遺跡（御代田町）、中金井遺跡群・栗毛坂遺跡群（佐久市）、中平・田中島遺跡で調査された。池尻遺跡では、直接被災したものではなかったが、浅間南麓一帯に流出した追分火砕流（天仁元年：1108年）に覆われた竪穴住居跡が発見された。浅間南麓は東山道が通過していた地域でもあり、今回の調査では確認できなかったが、追分火砕流によって一瞬のうちに埋もれてしまった道路や村の跡が将来発見されることも考えられる。

中世

かつて佐久市教育委員会によって大規模調査が行われ、構造的理解が可能な県内でも有数の城郭として注目されてきた金井城跡は、新幹線部分の調査によって主郭を除く城郭のほぼ全域が調査されたことになった。このため、新幹線部分の調査結果については、事実記載にとどまらず城郭全体の中で改めてとらえ直すこととした。遺構と遺物の分析によって明らかとなった金井城の全体像は、防御的施設を備えた球心的な構造で、16世紀第2四半期から第3四半期にかけ極めて短期間に複数の階層の集団が曲輪単位に居住し、集落的要素を強く持った城郭であることが浮き彫りとなった。しかしながら、今回の分析結果で金井城の構造と性格が決定づけられたわけではない。前提条件や分析視点が異なれば、様々な解釈が成り立つことも事実である。発掘結果を考古資料としていかに駆使できるか、今回の報告はその試みの一つにすぎず、金井城の解釈については今後に継続する課題である。大方の論議を期待したい。

前田遺跡群では、竪穴状遺構や鍛冶関連遺物のほか、渡来銭を一括埋納した備蓄銭土坑が発見された。時期を決定する資料が乏しいが、中世の生産や流通に関する資料を得ることができた。

近世

常田居屋敷遺跡群（佐久市）では詳細な時期は特定できないものの、渇川の氾濫による洪水砂で覆われた水田跡が発見された。近接している渇り遺跡では平安時代の水田跡が調査されており、渇川流域で洪水砂が同様に堆積している箇所では、今後、弥生時代までさかのぼるような水田遺構が確認される可能性もある。

渇川と千曲川の合流地点に近い砂原遺跡では、千曲川の洪水砂が厚く堆積していたが、この砂層を掘り込んで埋葬した庶葬墓が発見された。出土人骨は年代が新しく、遺跡も砂地で保存状態が良かったため、江戸時代と推定される庶民の形質を探る上で貴重な情報の提供者となっている。

以上、時代別に主な調査成果を取り上げてみたが、これらは現時点で認識できる成果の一端であり、本書に掲載された資料にはさらに多くの成果が内在するものと思われる。

報告内容に不備や不十分な点があることは否めないが、発掘調査から整理分析に至るまでの方法や資料解釈にかかわる問題点などについては忌憚のない御意見・御批判をいただきたい。

本書が今後多方面にわたって活用されることを念願し、結びとする。

写 真 図 版

左　A区試掘状況

右　A区全景

左　試掘トレンチ内浅間B軽石堆積状況

右　1号竪穴住居跡検出面

左　1号竪穴住居跡調査風景

右　同

1号竪穴住居跡土層

左　1号竪穴住居跡調査風景

右　遺物出土状況

左　甕形土器（9）出土状況

右　完掘

1号竪穴住居跡出土土器

1号竪穴住居跡出土
土器

5

7

9

8

10

11

12

13

14

水田地帯試掘状況

左　尾根部試掘状況

中　谷部試掘状況

右　同試掘トレンチ内道分火砕流堆積状況

左　尾根部道分火砕流堆積状況

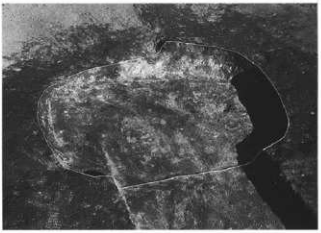
右　尾根部の表土剥ぎ取り

右　1号竪穴住居跡調査風景

1号竪穴住居跡土層
覆土上部は道分火砕
流堆積層

左　遺物出土状況

右　完掘



左　カマド部分遺物
出土状況

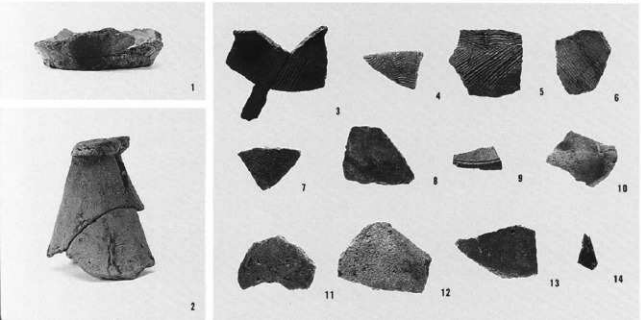
右　炭化種子
（コナラ・トチ）

出土土器

調査区全景

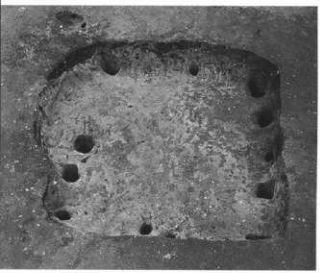
基本層序

遺構外出土遺物



発掘調査航空写真
（垂直モザイク）
新幹線用地を除く写真は佐久市教育委員会提供

南方上空から見た金井城跡全景
（平成４年７月20日）



二郭
左　90号竪穴建物跡

右　91号竪穴建物跡土層

右　91・115号竪穴建物跡完掘

左　91号竪穴建物跡突出部土層

右　110号竪穴建物跡

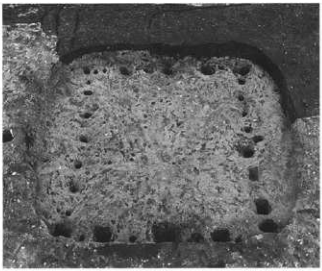
左　112号竪穴建物跡

右　110号竪穴建物跡内耳鍋出土状況

左　113号竪穴建物跡

左　114号竪穴建物跡

右　116号竪穴建物跡



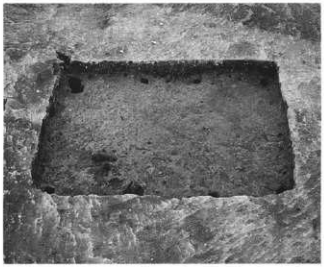
三郭

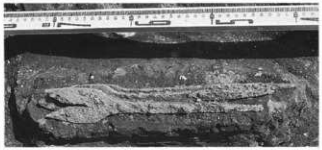
左　1号竪穴建物跡

右　2号竪穴建物跡
遺物出土状況

左　2号竪穴建物跡

右　同鉄鏃出土状況





左　3号竪穴建物跡

右　20～23・60号竪穴建物跡

左　16～19号竪穴建物跡検出状況

右　同完掘

左　26・30・48号竪穴建物跡および1号土坑

右　35号竪穴建物跡

右　28・51号竪穴建物跡および4号土坑

左　27号竪穴建物跡遺物出土状況

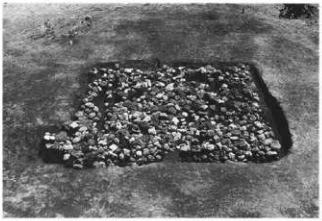
左　43・59・62号竪穴建物跡

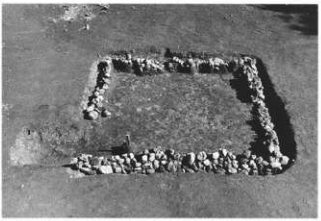
右　47号竪穴建物跡

北郭

左　70号竪穴建物跡
覆土中の石分布
状況

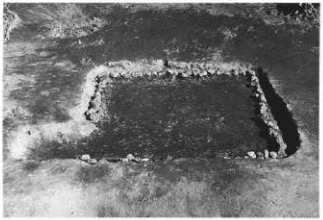
右　同石積み部分





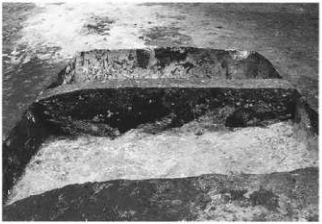
左　同石積みの根石
部分

右　同完掘(掘方)

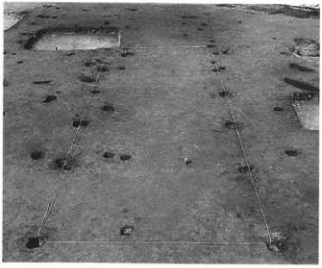


左　73号竪穴建物跡
土層

右　76号竪穴建物跡

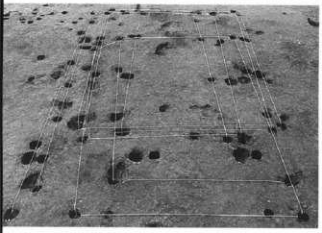


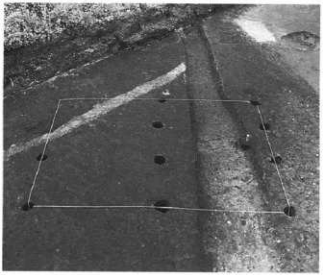
73号竪穴建物跡から
3号堀底への通路状
遺構



二郭
左　6号掘立柱建物跡

右　7号掘立柱建物跡





左　11～14号掘立柱建物跡および37～39号柱穴列

三郭
右　4号掘立柱建物跡

二郭
左　77号土坑

右　98・128号土坑

左　80・132土坑

右　119号土坑

二郭
左　102・127号土坑

右　141号土坑

三郭
左　2号土坑

右　3号土坑

左　13・37・39号土坑

右　16号土坑

左　17号土坑

北郭
右　44号土坑

左　3号堀（二郭と北郭を画す）土層

右　1号堀（三郭内）土層

左　3号堀完掘

右　1号堀完掘

左　1号堀洗い場遺構

右　同

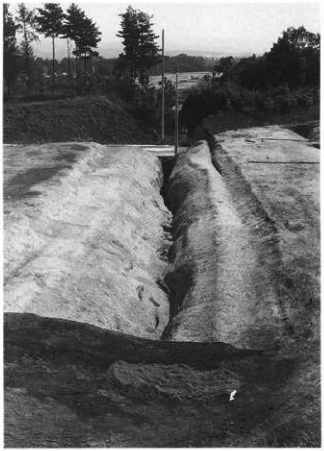
8号堀底の柱穴列（橋脚跡）

左　7号堀（三郭と外郭を画す）土層

右　6号堀（外郭内）土層

左　7号堀

右　6号堀



土塁断面（二郭）

2

4

8

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

内耳鍋

2　110号竪穴建物跡

4　113号竪穴建物跡

8　90号竪穴建物跡

カワラケ

14・19　118号竪穴建物跡

15　48号ピット

16　7号堀

17・23　116号竪穴建物跡

18・25　1号堀

20・22　94号竪穴建物跡

21　3号堀

24　16号土坑

26　18号土坑

香炉

27　28号竪穴建物跡

陶磁器

青磁碗
1　1220号ピット

青磁鉢
2　1号堀

白磁皿
3　60号竪穴建物跡

青花皿
4　136号土坑

古瀬戸鉢
5　7号堀

輸入茶壺（褐釉壺）
6　133号土坑

瓦質風炉
7　91号竪穴建物跡

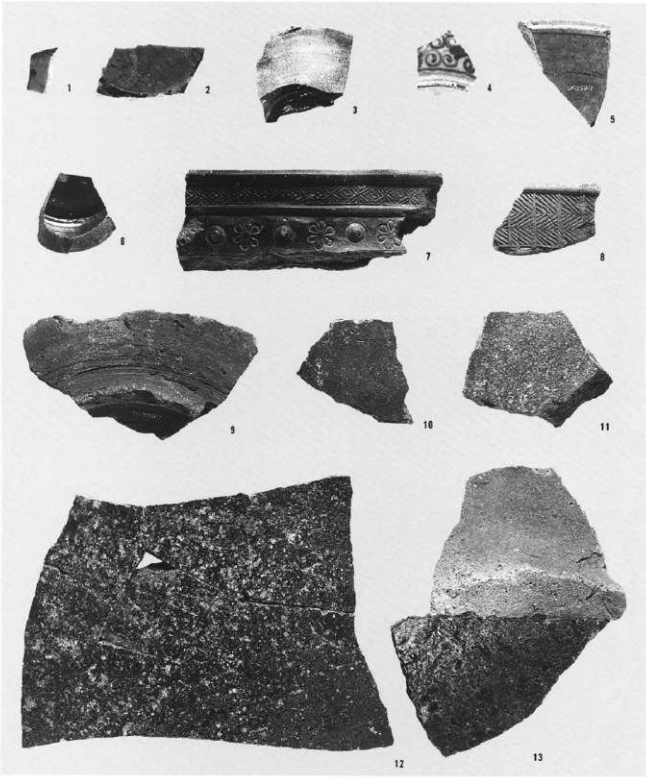
火鉢
8　141号土坑

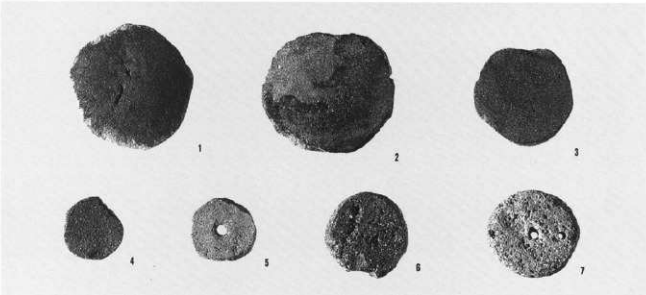
山茶碗系擂鉢
9　7号堀

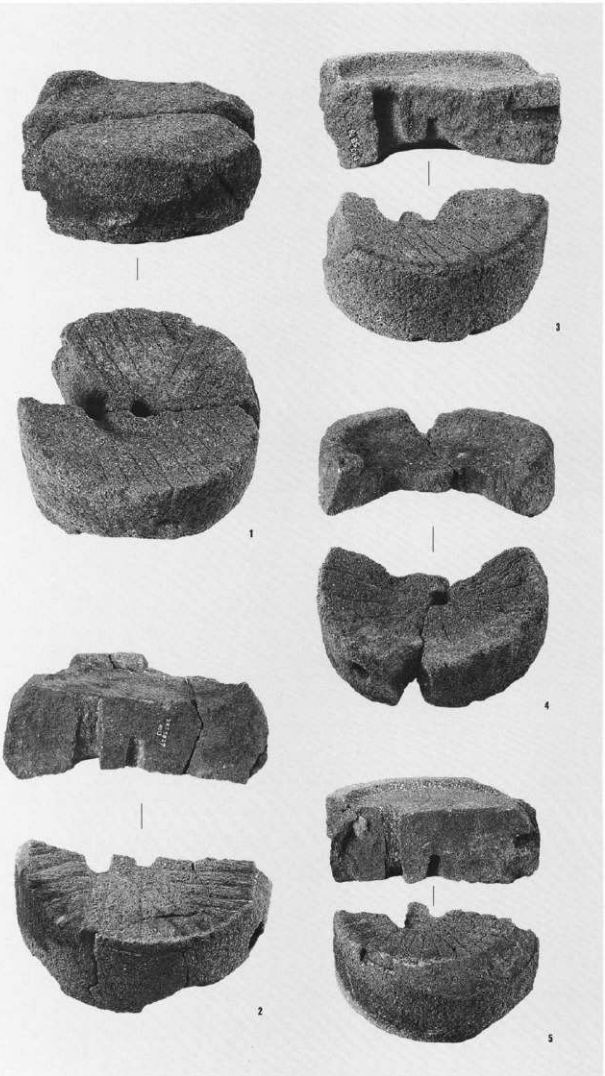
常滑甕
10　24号竪穴建物跡
11　表土中
12　351号ピット
13　3号堀

土製円板
1・2・5　1号堀
3・4　3号堀

軽石製円板
6　3号堀
7　1号堀







石臼

粉挽き臼(上臼)

1 80号土坑

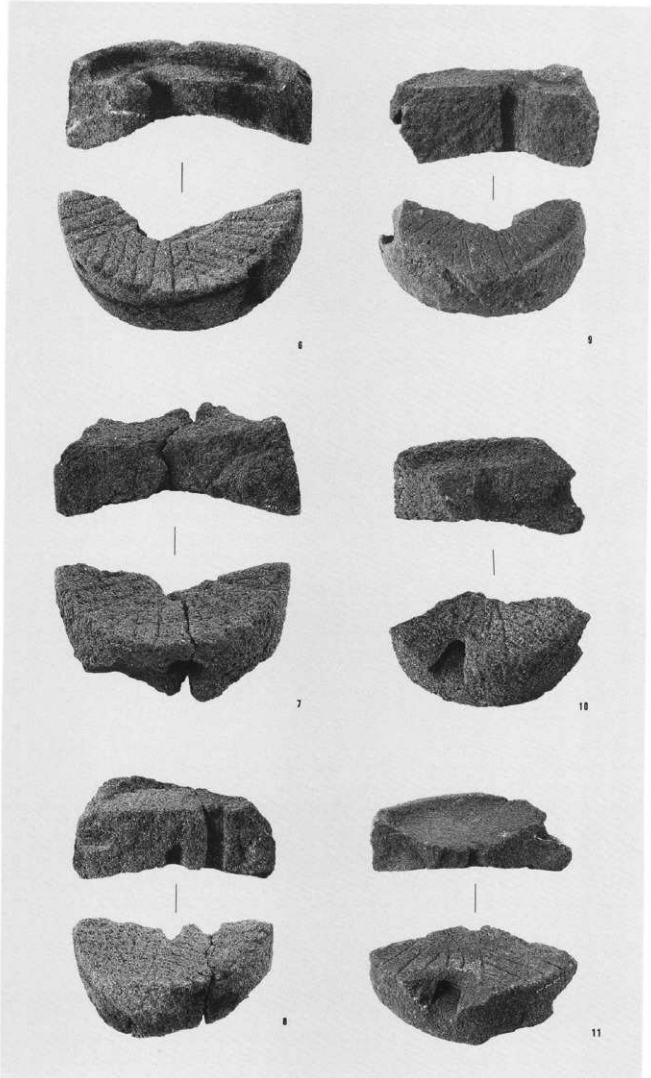
2 27号竪穴建物跡と1号堀接合

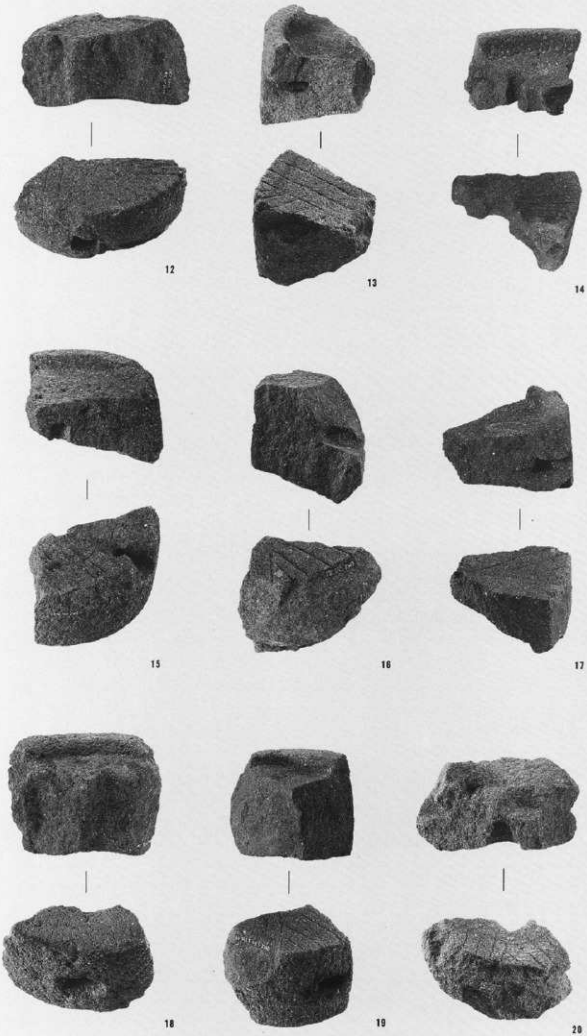
3 76号竪穴建物跡

4 1号堀

5 13号土坑

6 13号土坑
7 119号土坑
8 58号竪穴建物跡
9 1号堀
10 98号土坑
11 2号土坑

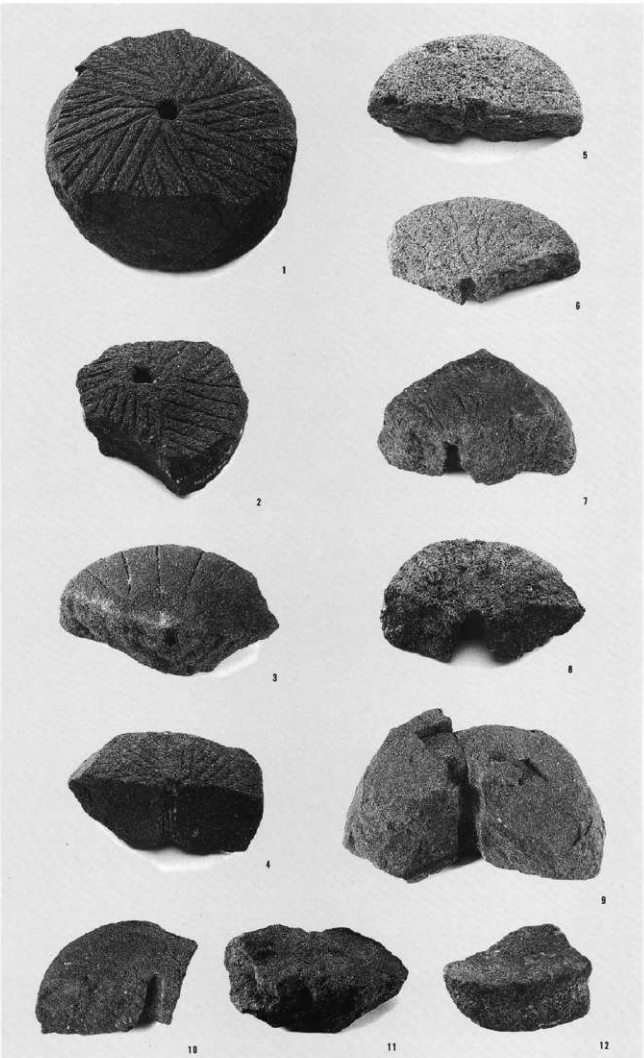


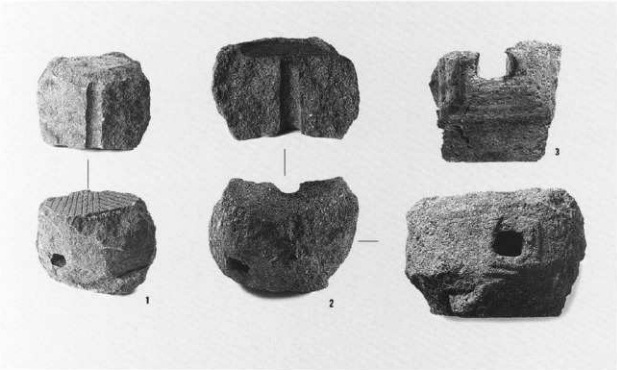


12・14・15・16・18・19・20　1号堀
13　17号土坑
17　8号堀

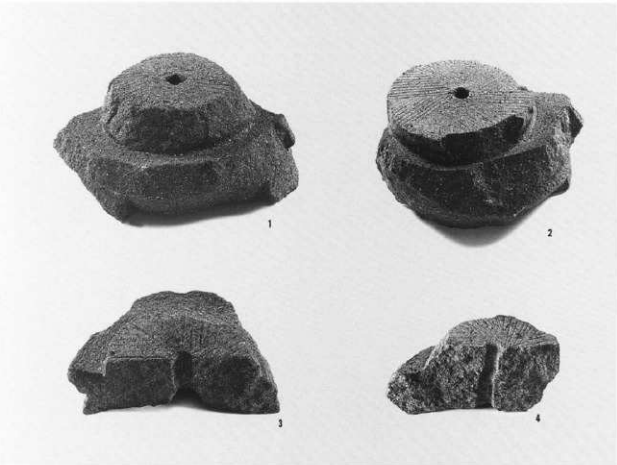
粉挽き臼（下臼）

1・4・6　1号堀
5　3号堀
2　2号竪穴建物跡
7・9・11　27号竪穴建物跡
3　IR15グリッド
8　1号竪穴建物跡
10　48号竪穴建物跡
12　8号堀

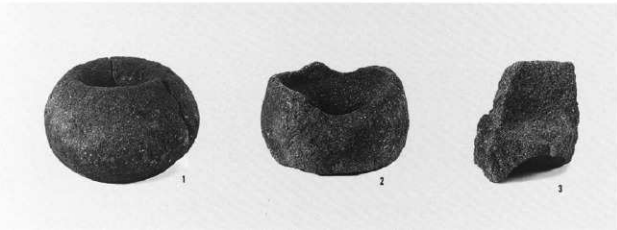




茶臼（上臼）
1　13号土坑
2　16号土坑
3　61号竪穴建物跡

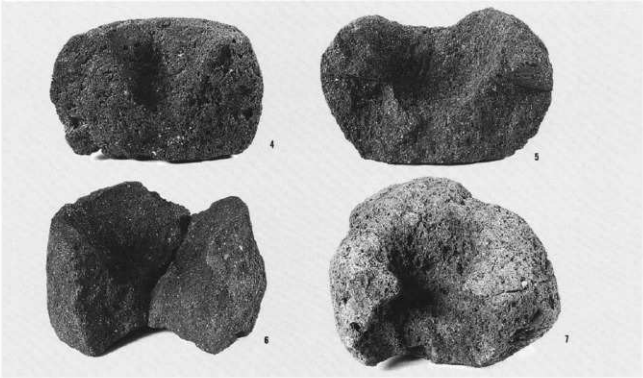


茶臼（下臼）
1・3・4　1号堀
2　102号土坑



搗き臼
1　29号土坑と1号堀接合
2　8号堀
3　119号土坑

搗き臼
4・5　1号堀
6　2号土坑
7　三郭表採



石擂鉢
1　7号堀
2・4　8号堀
3・5　1号堀

ひで鉢
1　3号土坑
2　7号堀（未製品か）

台石
1　1号堀

用途不明品
2　三郭表採

石臼未製品
3　1号堀

砥石
1・5・9　1号堀
2　8号竪穴建物跡
3　不明ピット
4　18号竪穴建物跡
6　358号ピット
7　13号土坑
8　16号土坑

硯
10　4号土坑

鉄製品

鉄鏃

1・2・3　2号竪穴建物跡

小札

4　71号竪穴建物跡

5　8号堀

6　II JA20グリッド

用途不明品

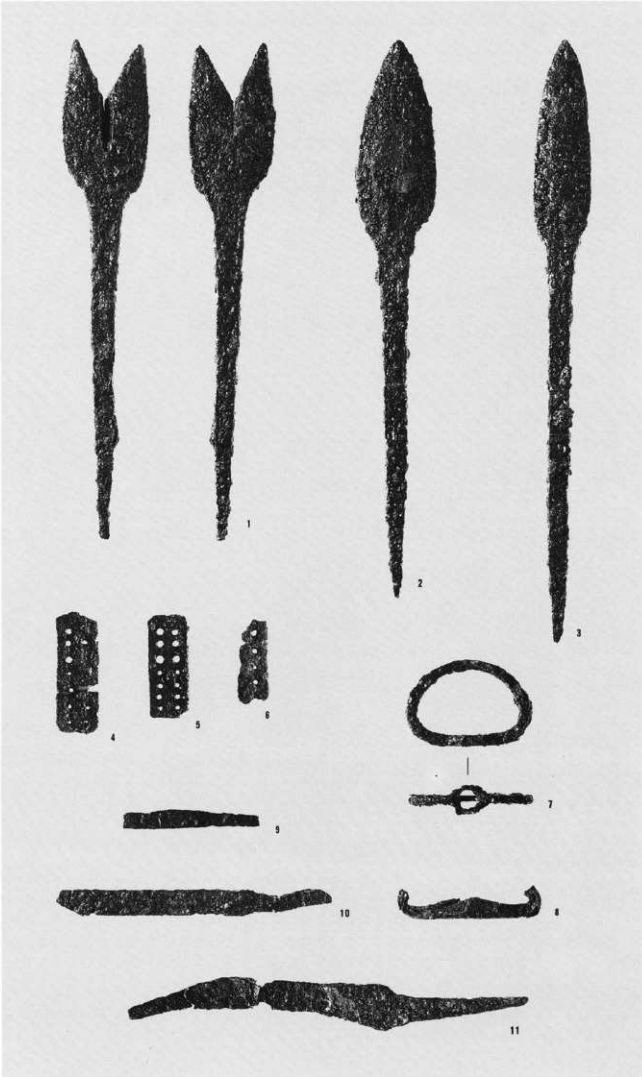
7　3号竪穴建物跡

火打金

8　三郭表採

刀子

9　5号竪穴建物跡

10　43号土坑

11　2号土坑